琴うたの稽古

浅尾芳之助

11
599

始

琴うた講話

淺尾芳之助

11-599

東京府立第三中學校教諭
箏歌講習會講師
淺尾芳之助著

生田流
山田流

琴うた講話

東京
株式會社
日本社

大正
11. 10. 20
内交

はしがき

□私は箏曲の演奏會に臨む度に、いつも二つの不滿を感じて歸ります。それは歌聲の低小な事と、謠ひ方に歌詞の含む氣分がよくあらはれて居ない事であります。處が私のこの不滿は奏手が歌詞の意味を充分に了解して自信を持つといふ事によつて充されるのであります。此の考が私をして此の冊子を書かしめました。

□本書に解説しました三十三曲は、私が某講習會の依頼を受け、その席上で講演したものが、大部分を占めて居ます。尚研究を續けて居ますから、それは後日卷を改めて公に致します。

□本書の中に作歌者又は作曲者の記して無いのは、何れも不明なのです。

□本書の講話は、左の順序に從つて致しました。

(一) 解題　曲の題號について説明したものです。

(二) 物語　歌詞の中心となつて居る人物の生涯を書いたものです。

(三) 句釋　歌詞を解釋したものです。(　)内に片假名で書いてあるのは、その上の語句を直譯的に説明したものです。

(四) 通釋　歌詞全體の筋を通して、口語に譯したものです。

□本書の特色は左の諸點にあります。

（イ）如何なる讀者にも了解の出來るやう、語句の解釋を三段に分つたこと。

（ロ）歌詞の句釋及び通釋をなるべく逐字的にしたこと。

（ハ）歌詞に段落を切り、又地の文と對話の文との區別を明瞭にしたこと。

（ニ）詳しい物語を附けて、歌詞の意を補つたこと。

大正十一年神無月　東京郊外笹塚の里にて　著者しるす

目次

一　序……橘宗利
二　赤蛙……坂本翠翠女
三　六……題辭　跋文　挿畫……小島達之助
四　蓍……武谷榮直
五　山……
六　姫……
七　櫻……山（武谷畫）
八　螢……
九　え……び
十　蓍……梅（武谷畫）
十一　歌の道……
十二　手習……
十三　八……幡
十四　秋の七草（小島畫）……

一〇　高砂（武谷齋）……二九
一一　三つの船（武谷齋）……三一
一二　今様朝妻船……三五
一三　新高砂……三九
一四　秋の夜……四五
一五　早春……四九
一六　さみだれ……五一
一七　小野の山……五五
一八　金剛石……六〇
一九　山櫻……六六
二〇　喜撰……六九
二一　六段前歌　後歌……七四
二二　初若菜……七七
二三　江の島……九四

二四　那須野……一〇八
二五　千里の梅（肖像）……一二三
二六　夕顔……一三六
二七　勾當内侍……一五四
二八　松風……一七〇
二九　壽くらべ……一八一
三〇　石山源氏上（武谷齋）……二〇三
三一　石山源氏下……二三四
三二　小督……二三九
三三　熊野……二六八

琴うた講話　第二輯　目次

一　薄霞　一五　御園生の竹
二　八千代獅子　一六　竹生島（生田）
三　時鳥（山田）　一七　春
四　地久節　一八　夏
五　紀元節　一九　秋
六　西行　二〇　冬
七　難波獅子　二一　常磐の榮
八　ゆき　二二　白の聲
九　夕空　二三　楓の花
一〇　千鳥　二四　かざしの雪
一一　茶おんど　二五　松上の鶴
一二　羽衣　二六　春日詣
一三　榮ゆる宮　二七　菊水（生田）
一四　大内山　二八　花の雲
二九　椿づくし
三〇　末の契
三一　都の春
三二　巖上の松
三三　銀世界
三四　雲雀
三五　ほとゝぎす（生田）
三六　須磨の嵐
三七　藤戸
三八　雨夜の月
三九　長恨歌
四〇　葵の上

山田流
生田流

琴うた講話

淺尾芳之助著

一　姫松

姫まつ小松、ひめ松小まつ。緑の色ませ、春ごとに。

（句釋）【姫松】五葉の松の一種でありますが、こゝは女兒の意を含めてゐます。〔小松〕小さい松のことですが、こゝは男兒を含めてゐます。

（通釋）坊ちゃん方や、嬢ちゃん方。姫松や小松を御覽なさい。春の來る度に、緑の色を増して年々に榮えて行きます。あなた方もあの樣に成人して、立派なものにおなりなさい。

二　さくら

櫻さくら。やよひの空は、見わたすかぎり、霞か雲か、にほひぞ出づる。いざや〳〵、見にゆかん。

（一）　句釋

【櫻さくら】（櫻ガ咲イタ、櫻ガ咲イタ）

【やよひの空】（三月ノ空）『やよひ』は即ち彌生で陰暦の三月のことです。今迄冬枯をして居た草木が正月（陰暦）になると芽が出初め、三月になるといよ〳〵生い茂るといふ處から、彌生が三月の異名となつたのです。

【霞か雲か】（霞カ、雲ノタナビイタヤウニ）これは櫻が一面に咲きウゾいてゐる有樣が霞の樣にも見えるし、また

雲のやうにも見えるといふことを言つたのです。

【にほひぞ出づる】（ホンノリト美シク見エル）『にほふ』は今日では專ら香について云ひますが、書の文では色について云つた例が甚だ多くあります。本居宣長翁の歌に『朝日ににほふ山櫻かな』とある『にほふ』も色について云つたので、それはテリカガヤクといふ意ですが、こゝの『にほひぞいづる』の『にほひ』はホンノリトシテ美シイといふ意です。

【いざや〳〵】（サア〳〵）人を勸誘する時に發する聲です。

（二）　通釋

櫻が咲いた、櫻が咲いた。それが爲に三月の空は、見渡す限り、霞か雲のたなびいたやうに、ほんのりと美しく見える。さあ〳〵見に行かう。

三　ほたる

清きながれのいさら川、袂すゞしき夕暮に、螢とぶなり。いざやをさな子、とりてあつめて終夜、窓のひかりにふみを見よ。

（一）　句　釋

【いさら川】（小川）『いさら』は或る語に冠らせて少しとか小さいとかいふ意を表はします。水の少い井戸のことを『いさら井』と云ひ、小川のことを『いさら川』といふのです。

【袂すゞしき】（タモトニ風ガ吹イテスズシイ）

【いざや】（サア）人を勸誘する時に發する聲。

【終夜】（夜ドホシ）一日中のことを『ひねもす』といふに對し、一夜中のことを『よもすがら』と云ひます。

【窓のひかりにふみを見よ】（窓ノ光トシテ本ヲ讀メ）昔、支那の晉時代に、車胤といふ人がありました。書物を讀むことが大層好きでありましたが、家が非常に貧乏で、油を買ふことが出來なかつた

爲、夏の頃は螢を聚めて、窓際に置きその光で本を讀んで、遂に偉い人になつたといふ話があります。この文句はそれから思ひついて言つたのです。『ひかりに』のにはトシテといふ意。『ふみ』は手紙といふことではなく、書物といふことです。

（二）　通　釋

清い水がさら〳〵流れて居る小川に行つて見ると、風が袂を吹いて涼しい夕暮には螢が飛んでゐるよ。さあ幼子達よ、それを取りあつめ、窓の明として夜通し書物を讀め。

【清い水】（キヨイ水）

【さらさら】（スラスラト）

（三）　句　釋

四　海老

えびは元より翁にて、腰に梓の弓をはり、目さへめでたき千代八千代。

（一）句釋

【元より】（イフマデモナク）

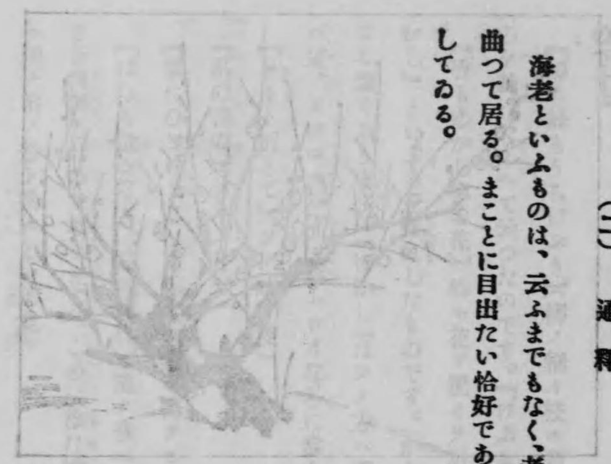
【翁】（老人）

【梓の弓】アヅサノ木デ作ッタ弓）『梓』は木の名、赤芽柏のことであります。昔から弓をつくるのによい木だと云つて居ます。

【目さへめでたき】目マデガ出テ居テ目出タイ）海老の目の突出てゐるのを『めでたき』に云ひ懸けたのです。

【千代八千代】（澤山ノ年數）『千代』は千年、『八千代』は幾千年といふ意でありますが、一般の場合に於いて、たゞ多くの年數をあらはしてゐるだけです。千とか八とかいふ數字に拘泥してはいけません。

（二）通釋



海老といふものは、云ふまでもなく、老人の姿によく似たもので、その腰は丁度、梓弓を張つた樣に曲つて居る。まことに目出たい恰好である。又、その眼までが突出てゐて、長生の目出たいことを表してゐる。

五　落梅

年たちかへる春の空、垣根の草はいろづきて、柳の絲もうちけぶり、香もゆかし梅の花。をりも折こて笛の音の、雲にひゞけるこゝちして、花も散るなり。はなも散るなり笛の音に。

（一）句釋

【年たちかへる春の空】（年ガカハッテ春ノ時候ニナルト）

『たちかへる』は、アラタマル或はカハルといふ意味です。

『春の空』の空は時節・時候といふやうな意味です。

【いろづきて】（青ミヲ帶ビテ來テ）今迄冬枯して居た草の根から新芽が出て來て、綠色を呈して居ることを云つたのです。

【柳の絲もうちけぶり】（柳ノ細イ枝モ新芽ヲフイテ綠色ニケブッテ居テ）『柳の絲』は柳の枝の細いのを絲にたとへて云つたのです。『けぶる』は煙の樣に淡く見えること。

【香もゆかし梅の花】（梅モ花ヲ開イテ居ルガ其ノ香ハマコトニ奥床シイ）これは『梅の花、香もゆかし』といふのを轉倒したものです。かうしたのは『香もゆかし』といふことを、特に强く云はうとする爲であります。『ゆかし』はソノ方へ深ク〳〵心ガヒカレテ行クヤウダといふ思想です。口語でいへば、オクユカシイ・慕ハシイなどに當ります。

【をりも折とて】（ソノ時丁度）

【笛の音の】（フエノ音ガ）

【雲にひゞけるこゝちして】（雲ニ鳴リヒビイテ居ルヤウナ氣持ガシテ）

【はなも散るなり、笛の音に】（笛ノ音ニツレテ花モ散ルワイ）『笛の音に、花も散るなり』といふべきを轉倒したのであります。この『はな』は勿論、梅の花です。『笛の音に』は笛ノ音ノ聞エテ來ル折ニ即チ笛ノ音ト共ニといふ意。

（二）通釋

年が變つて春の時候になると、垣根の草は新芽を生じて、綠色をおびて來るし、柳の細い枝も新芽をふいて、綠色にけぶつて來る。そして梅も花を開いて居るが、その香は實に奥床しいものである。其時丁度、笛の音が雲に鳴り響いて居るやうな氣持がして、花が散るわい。その笛の音につれて花が散るわい。

六　歌の道

鶯もかはづも、うたふ歌の道、月雪花のをり〳〵は、心うらゝに、うたへたのしめ。

（一）句釋

【鶯もかはづもうたふ歌の道】、鶯モカジカモ謠フトコロノ歌ノ道）これは今古集の序文に『花に鳴く鶯、水に住むかはづの聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける』とあるのによつて云つたのであります。その意味は、花間で鳴く鶯や、水中に住む河鹿の聲を聞いて見ると、生きて居るものは、何でも皆歌を詠んで居る。して見れば、人間は尙更歌を詠まねばならぬといふのであります。『かはづ』は今は田の中で鳴く蛙のことをいひますが、古くは谷川などに住んで、よい聲で鳴くかじかのことをいつたのであります。此處も勿論それであります。

【月雪花のをり〳〵は】（月雪花ナドノ眺メラレル時節々々ニハ）月は天に屬するもの、花は地に屬するもの、雪は天地の兩者に屬するものであります。この三つのものを以て、四季の風物を代表させ

たのであります。歌の題材に入るべきものは、決してこの三者に限つた譯ではありません。

【心うらゝに】(心晴レヤカニユックリト)『うらゝ』は元來、空ガヨク晴レテ長閑ナコトを云ふのであります。が、こゝはそれを心の方について云つたのであります。

(二) 通釋

鶯も河鹿もうたふと云はれて居る處の歌の道なのだ。だから誰でも、月雪花などの眺められる時節々々には、心晴れやかにゆつくりと謠へ、而して樂しめ。

七 手習

手ならふ稚兒よ、難波津に咲くやこの花冬ごもり、今を春べと文字の花。ふみの林にかをらせて見よ。

(一) 句釋

【手ならふ】(文字ヲ習フ) かういふ場合の『手』は文字といふ意味であります。文字をうまく書くやうになることを、『手があがる』といふのも、この意味であります。

【稚兒】(コドモ) 『ちご』は即ち乳子といふ意ですから、本來は乳を呑んでゐる位の子のことでありますが、それが轉じては、子供といふ意にも用ひます。こゝはその方です。

【難波津に咲くやこの花冬ごもり、今を春べ】 これは、王仁といふ人が、仁德天皇の御即位なされたことを、お祝申し上げて詠んだ歌の一部分です。その歌は、『難波津に咲くやこの花冬ごもり、今を春べと咲くやこの花』といふのであります。此の歌と、今一ツ孝德天皇の御代に采女が詠んだ歌に『淺香山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人をわが思はなくに』といふのがあります。この二首は一は天

皇の御世の始を祝し、一は葛城王の御心の解けた歌で、共に芽出度い歌でありますから、この頃の幼兒の手習の始めに必ず教へる事になりました。丁度現今手習の始めに、いろは歌を教へるのと同じであります。

【文字の花】(立派ナ文字)　王仁の歌に『この花』とあつたのを、もぢつて『文字の花』としたのです。上手な文字といふことを花に譬へて言つたのです。

【ふみの林にかをらせて見よ】(書道界ニカガヤカセテ見ヨ)　『ふみの林』は學問和歌の道のことを云ふのですが、此處は書道の意に用ひたのです。『かをらす』はヨイ香ヲハナタセルといふことですが、此處はカガヤカセルといふやうな意味に見てよろしい。

(二)　通　釋

手習をする子供達よ、『難波津に咲くやこの花冬ごもり、今を春べと咲くやこの花』といふ歌を手始めに、よく手習ひをし、立派な文字を書くやうになつて、書道界にかゞやかせて見よ。

八　弓八幡

山田桂扶作曲

松たかき枝もつらなる鳩の峰。くもらぬ御代は久かたの、月の桂の男山、げにもさやけき影に來て、君萬歳と祈るなる、神にあゆみを運ぶなり。神に歩をはこぶなり。

(一)　解　題

この歌は山城國にある男山八幡宮の事をいつたもので、謠曲の弓八幡から取つたものです。或人が八幡宮の御祭の日に男山に至り、參詣の群衆を見て詠んだ形になつて居ます。元來、八幡宮と申しますのは、源氏の氏神で、弓矢の守護神でありますから、弓と矢と幡との三武具に因んで、弓矢幡といひ、又、應神天皇がお生れになつた時、空から高麗錦の赤白の幡が八旒下つたといふので弓八幡ともいひます。(この故事によつて、應神天皇のことを八幡の尊と申し上げ、天皇をお祀りした社を八幡宮といふのであります)。

男山八幡宮は、清和天皇の貞觀元年に行教といふ僧侶の奏請によつて、筑前の宇佐八幡宮を勸

請したものであります。源氏は此神を深く崇敬して氏神となし、別宮を諸國に建立しました。足利氏は源氏の後裔でありますから、矢張この神を厚く信じて、男山の社殿を立派にし、德川氏も亦大に尊崇し、五代將軍綱吉の時には、此の社を再營し、社地をも增しましたので、なか〳〵盛大になりました。又朝廷の尊崇も厚く、代々之に幣を奉つて居られます。それで此の社の位は、伊勢大廟の次位にあつて、現今は官幣大社であります。

（二）句釋

【松たかき枝もつらなる鳩の峯】（松ノ樹ノ丈ガ高ク、ソノ枝モ連リ合ツテ居ル男山）『松たかき』は文法上から云へば破格です。『松たかく』といはねばなりませぬ。『枝もつらなる』は松の枝が生ひ茂つて、枝と枝とが連り合つて居ることです。『鳩の峯』は男山の別稱で、八幡宮の祠のある處のことです。その理由は此の山には鳩が多く居るからだとも云ひ、また此の山の形が鳩に似て居るからだとも申します。

【曇らぬ御代は】（ヨク治ツタ御代ハ）『曇らぬ』は空ガ明ニ澄ミワタツテ月ガ皎々ト照シテ居ルコトをいふのでありますが、こゝはヨク治ツテ居ルといふ意に用ひたのです。

【久かたの】本來は天の枕詞でありますが、轉じては月の枕詞ともなつて居ます。此處は上の『御代は』をうけて、『御代は久しく』といひ掛けてあります。

【月の桂の男山】（容姿ノウルハシイ男子）月の世界には桂の樹があるといふので、『月の桂』と云つたのです。それから容姿の麗はしい男のことを『かつらをとこ』といふ處から、『桂の男』といひつゞけ、その『男』を更に男山といふ地名に云ひかけたのです。『月の桂』といふことについて支那にこんな話が傳はつて居ます。月の世界に高さが百丈もある大きな桂の樹がある。そこで吳剛といふ人が仙術を學んで居たのだが、過失があつたため、その罰としてその桂の樹を伐り倒すことを命ぜられた。ところが其の樹の瘡口が伐る後からすぐ元の通りに合つて、何時まで經つても、伐り倒されず、今もなほ伐りつゝある。これが話の大要であります。

【げにも】（イカニモ・マコトニ）

【さやけき影】（神德ノ明カナトコロ）神德の明かなことを月光にたとへて云つたのです。

【君萬歲と祈るなる】我ガ大君ノ長久ヲ祈ル所ノ）『ばんぜい』は本來は天皇の御齡の長久ならんことを祈る語でありますが、轉じては國家・陸海軍或は個人の幸運を祝する場合にも用ひます。然し後者の意に用ひる時には『ばんざい』といふのが普通です。

（三）　通釋

鳩の峯には、丈高く又枝の連り合つて居る松が生ひ立つて居る。泰平の久しくつゞく御代には、立派な人々が、神德のいかにも明かなこの男山八幡宮に、大君の長久を祈るため、參詣するのである。

九　秋の七草

秋の野に、咲きたる花は何々ぞ。おのが指折りかぞへ見よ。錦をよそふ萩が花、尾花・くずばな・女郎花、誰がぬぎかけし藤袴、親のなさけの撫子に、露を命の朝顔の花。この七草はしも、昔の人のめでそめて、秋野の花のうるはしき、其の名は今に高まどや、野邊に匂へる秋の七草。

（一）　句釋

【錦をよそふ】（ニシキヲカザル）『錦』は數種の色絲で、色々の模樣を織り出した地質の厚い絹織物のことです。『よそふ』は裝ふと同じで、美シクカザリタテルコトであります。こゝは萩の花の美しいのを、錦を着飾つたのに譬へていつたのです。

【尾花】（スヽキノ花）薄の穗のことです。これも秋の七草の一に數へられて居ます。

【くずばな】（葛ノ花）豆科に屬する草で、多く山野に生えます。秋の頃、小形な紫赤色の花を開き

ます。そしてその根からはくず粉を製し、その茎はくず布の原料になります。これも秋の七草の一で

〔女郎花〕これも七草の一。山野に自然に生えて、夏の終から秋の初にかけて、小形な淡黄色の花を開きま

す。

【誰がぬぎかけし藤袴】（誰ガ脱ギ掛ケテ置イタ藤色ノ袴カト思ハレルヤウナ藤袴）『藤袴』は菊科に屬する草、秋の頃小形な淡紫色の花を開きます。やはり七草の一つです。此處は草の名の藤袴を藤色の袴に言ひ懸けたので、古今集にも藤原敏行の歌として、『何人か來てぬぎかけし藤袴、來る秋ごとに野べをにほはす。』といふのがありますが、こゝはこの歌からとつたのです。

【親のなさけの撫子に】（親ガ情ヲカケテ大事ニ育テタ子ト云フ意味ニ似タ撫子ノ花ニ）『撫子』は石竹科に屬する草で、やはり七草の一に數へられて居ます。これを文字通りに解すれば撫愛シテソダテタ子でありますから、これに『親のなさけの』を冠らせたのであります。

【露を命の朝顔の花】（朝露ノアル間ダケヲ命トシテ居ル朝顔ノ花）これは朝顔の花の壽命の短いことをいつたのです。槿・桔梗・晝顔なども時代によつて朝顔と云つたことが有ります。

【この七草はしも】（コノ七草ハ）『しも』は或物を取り立てゝ云ふ際に用ひる詞でありますが、大意を取るには省いて行つてよろしい。尙前文に云ふ通り七草は朝顔と桔梗と取換へてもよいのです。

【めでそめて】（珍重シハジメテ）『めづ』は愛賞することであります。

【其の名は今に高まどや】（其ノ名ハ今モ高クアルガ、コトニ高圓ノ）其の名が高いといふのを高圓

もいふ地名に云ひ懸けて居ます。『高圓』は大和國添上郡にあつて、秋の七草の名所になつて居ます。萬葉集に既にこれを詠んだ歌が出て居るのを見ると、餘程古くから知られて居たものと見えます。

高圓の野邊の秋はぎ此の頃の曉露に咲きにけんかも。（萬葉）

高圓の宮の裾廻の野高處に今咲けるらん女郎花はも。（同上）

【野邊に匂へる】（野ニ美シク咲イテ居ル）

（二）通釋

秋の野に今咲いて居る花は何々であるか、自分の指を折つて數へて見よ。先づ第一に錦を着飾つたやうに立派な萩の花がある。次には尾花・葛の花・女郎花がある。それから誰が脱ぎ掛けて置いた薄紫の袴だらうかと疑はせるやうな藤袴がある。親が情をかけて育てた子といふ意味に似通つた撫子や、朝露のある間だけしか咲いて居ないといふやうな短命な朝顔の花がある。以上七種の花は、昔の人が珍重しはじめて、綺麗だといふ評判が高くなつたが、中でも高圓の野邊に美しく咲いて居る秋の七草が最も有名である。

一〇　高砂

所は高砂や、尾の上の松も年ふりて、命ながらへて、なほ何時までもいきの松、是も久しき名所かな、これも久しき名所かな。

（一）句釋

【所は高砂や】（所ハ名モ高イ高砂ノ）『高砂』は播磨國加古郡にある地名です。元來、高砂とは濱風が吹き上げた砂が積つて、山のやうになつたものゝ事をいふのですから、何處にあるのでも、さう云はれるわけですが、文學上で高砂といへば、常に播磨のを指して居ます。『高砂や』のやはのの意に解して差支ありません。

【尾上の松の】（峯ノ上ニアル松ノヤウニ）『尾上』は『峯

の上』の約で山の高くなつた處のことをいふのです。こゝは高砂の尾上を指して居ます。此處には昔から有名な松の樹があつて、攝津の住吉の松と並べ稱せられてゐます。古今集の序文にも『高砂住の江の松も相生のやうに覺え云々』とあります。住の江は住吉のことです。

【命ながらへて】(ナガイキヲシテ)

【何時までもいきの松】(何時マデモ生キタイト思フガ、ソノ生キニ通フ生ノ松)『いきの松』は筑前にある有名なる松であります。此處は『何時までも生き』の生きを松の名に言ひ掛けて居ます。

(二) 通釋

名も高い高砂の、尾上といふ所にある松のやうに、年をとるまで長生をしてもまだ〳〵生きたいと思ふのであるが、その生きに通ふ生きの松、これも久しく聞えて居る名所であるわい。(この唄の文句は謠曲高砂から取つたものであります。)

一一 三つの船

花の都の大井川、遊も三つの友をわけ、船のよそひは唐錦。綾織る波の川淀に、おくれて乘れるみやび男は、歌にも詩にもしらべにも、かねて心をつくし琴、つくしゝ技は白波に、今も響くや、いまもひびくや大井川。

(一) 解題

白河天皇が山城の大井川に行幸なされた時、詩・歌・管絃の三つの船を浮べて、公卿達を各、その得意とするものによつて、これらの船に分乘せしめられました。その日に桂大納言源經信といふ人が一人後れて來まして、どの船にでもよいから乘せて呉れと云ひました。この一言は其の人が詩・歌・管絃の何れにも勝れてゐるといふことを證して餘りあります。尤もこれより先に、藤原道長が、大井川で三船の遊を催した時、藤原公任が道長から、何の船に乘るかと尋ねられたので、何の船でもよいと答へたといふ話もありますが、此の唄は源經信の事について作つたものであります。この二つの故事がもとゝなつて、詩・歌・管絃の三藝に堪能なことを三船の才といふやうになりました。

（二）　句釋

【花の都】（ウツクシイ京都）　京都の立派なのを花に譬へて言つたのであります。

【大井川】（保津川ノ下流）　山城國嵯峨及び松尾村邊では大井川といひ、その下流は桂川となつて賀茂川に合して居ます。

【遊も三つの友をわけ】（御遊ノ際ニ友ヲ三組ニ分ケ）　詩を作る組・歌を詠む組・音樂を奏する組の三つにわけたことを云ふのです。

【船の裝は唐錦】（船ノカザリツケハ唐錦デシテアル）『唐錦』は支那から渡つて來た錦といふことです。

【綾織る波の川淀に】（美シイ波紋ノ生ジテ居ル川ニ）『綾織る波』は波の美しいのを形容した詞です。上に錦とありますから、それに續けて綾織るといつたのです。

【川淀】（川水ノ流レズニタマツテ居ル處）　然し此處は、あまり文字に拘泥せず、單に川と云ふ意に見て置くがよろしい。

【みやび男】（風流ナ男）　此處は桂大納言源經信のことを云つたのであります。

【しらべ】（管絃）　管とは笛の類を云ひ、絃とは琴・琵琶などのやうな絃を張つたものを云ひます。それで管絃は音樂といふ意に見ればよろしい。

【かねて心をつくし琴】（以前カラ修業ニ心ヲツクシテ居タ）　『心を盡し』を「筑紫琴」に言ひ掛けたのであります。『筑紫琴』は箏即ち十三絃の琴の一名です。字多天皇の時、筑紫の石川色子といふ女が、支那人から箏曲を學んで、非常に巧妙になつたといふ處から、『箏のこと』を筑紫琴といふやうになつたのです。

【つくしゝ技】（骨折ツテ修メタ技）　『つくし琴』は『つくしゝ技』の序になつてゐます。同じ語が重なつて居るので、調子よく聞えます。

（三）　通釋

花の都の大井川で、白河天皇が御遊をなされた時、三組に友を分けて、之を三つの船にお乘せになつた。唐錦で立派に仕立てられたその船が川に浮ぶと、後れて來た一人の風流な男は、三艘の中どの船でもよいから乘せて呉れと言つた。此男は以前から、歌にも詩にも音樂にも心を盡して修業して居たのであるが、骨折つて修め得た技藝に對する名譽といふものは、大井川の白波の響と共に今の世にまで、響き渡つてゐる。

一二　今様朝妻舟

（山田檢校作曲）

一夜かりねに近江路の、朝妻山は深からぬ、人の契の名なれやと、馴れにし鳥籠の山風に、寢亂髪の柳かげ、つながぬ舟の浮きて世に、逐のよるべはいさや川、いさ白波も聲そへて、うつや鼓の、うつや鼓のうつゝなや。

（一）解題

此の唄は、遊女舟のことを詠んだものであります。『今様』は當世風といふ意、『朝妻舟』とは近江國坂田郡朝妻の渡を往復する遊女を乘せた舟といふことです。昔はこの朝妻の渡に遊女が澤山居て、攝津の神崎・河内の江口などゝ名を等しくして、なか〳〵やかましかつたものです。昔の遊女は可なり風流で、中には和歌を巧に詠んだりする者も居ました。從つて高貴の家にも、出入したものであります。江口の中の君といふ遊女は長元五年十月、關白藤原頼通が住吉に參詣した時、その宴席に招かれて、『おほかたにたどり聞くべき秋風の、さそひてかゝるひぐらしの聲』と詠んで居ます。小觀音（をぐわんのん）、これもやはり江口の遊女ですが、御堂關白藤原道長の寵愛を受けて居ました。その

詠歌は今も傳はつて居ます。攝津島上の遊女千歳（ちとせ）・若の前（わかのまへ）は鳥羽院に召されて、その舞を叡覽に供して居ます。殊に若の前は和歌に巧だといふので和歌の前とも稱ばれました。昔の遊女はこんなに高尚で、また風流でありました。序ですが、朝妻の遊女は、鼓を擊つことが得意で、冠をかぶり、鼓を持つた姿がよく繪にかゝれて居ます。

（二）句釋

【一夜かりねに近江路の】（客ニ逢ウテ一夜ノ假寢ヲスル遊女舟ト同名ナル、近江路ノ）遊女は往き來の人に逢つて、たゞ一夜だけの契を結ぶものですから、『一夜かりねに』と云つたのです。『一夜假寢に逢ふ』と云ふのを、地名の近江に云ひ掛けてあります。『一夜あふゆきゝの人のうかれ妻、いくたびかはる契なるらん』といふ歌は、よく遊女の身の上を寫して居るではありませんか。

【朝妻山は深からぬ、人の契の名なれやと】（朝妻山ハ深クナイ約束ノ名デアラウカト）朝妻山の『淺妻』に淺き契の妻、即ち一夜假寢の妻といふ意を持たせたのであります。

【馴れにし烏籠の山風に】（寢馴レタ床ニ烏籠山カラ吹イテ、來ル風ノ爲ニ）『馴れにし床』の床を山名の烏籠に云ひ掛けたのであります。烏籠山は近江國犬上郡にある山です。

【寢亂髮の柳かげ】（山風ニ吹キミダサレタ髮ノヤウナ柳ノカゲ）『床』と云つたので、寢亂れと續けたのであります。此處は柳の絲の亂れて居る樣を、遊女の寢亂れ髮に譬へたのです。

【つながぬ舟の浮きて世に】（ツナギ止メテナイ舟ノ樣ニ取リ止メモナク世ヲ渡ツテ）『つながぬ舟の』ののはノヤウニといふ意であります。『浮きて』は心の落ち付かないことで、トリ止メモナクといふやうな意に解すればよろしい。

【逢のよるべはいさや川】（最後ノ落チ付キ處ハ）。『よるべ』はたよる所といふ意でありますが、此處はオチツキドコロと見る方がよくわかります。『いさや川』は近江國犬上郡にある川の名ですが、此處は次の『いさ』を呼び起す爲の序になつて居ます。筋を通して解する際には、省いて行つてよろしい。

【いさ白波も聲そへて】（ドウダカ知ラナイ、川ノ白波モ聲ヲ添ヘテ）『いさ』はドウダカといふやうな意味の副詞で、常に『知らず』といふ語の上に來ます。これを濁つてイザと云つてはいけません。『いざ』といへば、人を勸誘する時に用ひる感動詞となるのであります。百人一首の紀貫之の歌も『人はいさ心も知らず』といはねばなりませぬ。

【うつや鼓のうつゝなや】（鼓ヲ打ツ心ノ中ハナサケナイモノダヨ）『うつ』は波の打つのと、鼓を打つのとを兼ねて云つて居ます。『うつゝなや』は現し心がないことゝといふ意でありますが、こゝはナ

サケナイとかハカナイとか解するがよろしい。

（三）　通　釋

客に逢うて一夜の假寢をする遊女（朝妻舟）と同名なる、近江の國の朝妻山は、深くない約束に對して付けられた名ではなかろうか。遊女の馴れた寢床へ吹いて來る鳥籠山風の爲めに、その寢髪は吹き亂される。その寢亂髪にも比すべき柳の絲の蔭には、小舟が一艘繫がれもせずに浮んで居る。遊女の身の上は丁度その舟のやうなもの、取り止めもなく此の世を渡つて、最後の落付どころは更にわからない。舟のまはりを打つ白波は、舟中で打つ遊女の鼓に聲を添へて居る。定めなき遊女の身の上を思ふと、鼓を打つ心の中は實に情ないものだらうよ。

一三　新高砂

高砂や、この浦船に帆をあげて、月もろともに出しほの、波の淡路の島かげや、遠くなる尾の沖すぎて、はや住の江に着きにけり。はや住の江に着きにけり。

（一）　解　題

これは謠曲高砂の一節であります。謠曲では、阿蘇の神主友成が、都に上る途中、高砂の浦船に乘つて住吉に赴く時、船中で謠ふ歌になつて居ます。箏曲の中にたゞ『高砂』といふのがあります。本曲はそれよりも後に作られた爲め、『新高砂』と名づけたのでせう。

（二）　物　語

時は醍醐天皇の御宇。肥後の國、阿蘇の宮の神主友成が、都見物に上る途中、音に聞えた播州高砂の浦をも一見しようと思つて、そこに立ち寄つた。里人が居たら、高砂の松のありかを尋ねようと、

四邊を見廻す折柄、ふと目に入つたのは老翁の姿である。

友『もし、御老翁樣。一寸御尋ね致したい事がございます。』

翁『お呼び止めありしは、此方のことにて候か。してその御尋ねとは如何なる事か。さあ〳〵御申しあれ。』

友『天下に名の聞えた高砂の松とは、何れの木を申すので御坐りませうか。』

老翁は彼方に箒を手にせる老婆を指して、

翁『左樣、唯今彼の木蔭を清むるが、御尋ねある高砂の松にて候ぞ。』

友『昔から高砂住の江の松は相生だと申しますが。當所と住吉とは國も違つて居りまするに、何故相生の松と申すので御坐いませう。』

翁『仰せは御尤も〳〵。古今集の序文にも、さやうの趣相見えたり。さりながら、拙者は攝津の國、住吉のもの、これなる老女は當所の人にて候。……(翁、老女の方を向いて)……コレ老婆や、其許も知る事あらば、この旅の方に申聞かされよ。』

友『これは不思議なこともあるもの、御兩方は一つ所においでなされるにもかゝはらず、『遠き住の江・高砂の浦田、國を隔てゝ住む』とは如何なる事で御坐いませうか。御聞かせ下さらば有り難き幸

と存じまする。』

婆『あな、うたての仰やな。山川萬里を隔つとも、互に通ふ心づかひの、妹脊の道は遠からぬものなるに……』

『この老人夫婦との問答によつて、友成は『相生』といふ理由を畧、了解することを得た。更に老人夫婦は、萬葉集と古今集との關係を高砂・住吉の松に配して說き聞かせる。友成の不審はます〳〵晴れて行く。友成はこれだけではまだ滿足せず、尙も追求して、高砂の松のめでたきいはれを聞かうとする。それに對する老翁の對はかうであつた。

『草木は情なしとは申せども、梅は花咲き、實を結ぶ時節を違ふる事あらず。さりながら、松の四時色かへざるに較ぶれば、なほ及ばぬものにて候。この松は雪の內にも、色更へず、またその齡の高きこと、異木にそのたぐひを見ず。かゝる芽出度き松が枝の、葉にも比すべき言葉の花(和歌)、心をみがく種となりて、生きとし生けるものことに、此の道に心を寄すと聞き侍る。』

老翁は尙も言を續けて、

『またこの松は、唐土にては秦の始皇の御爵に預り、我國人も上下こぞつて賞翫す。この松の落葉の拂へども盡させず、綠の色の年毎にまさりゆく樣は、我が大君の御代の久しきにたとふべく、又

言葉の花(和歌)の散り失せざるにもたとふべく覺え候。中にても、高砂住吉の松は、末代までも、相生のためしにひかれて、いともめでたきものにて候よ。』

始めは浦人のやうに見えて居た此の翁の、古事を說き、歌道を說く有樣がどうしても、只人とは思はれない。こゝに於いて友成は疑の心を起し、遂に、その素性を聞かんことを所望した。老人夫婦の言によつて、友成はその老翁が住吉の松の精(住吉明神)、老婆が高砂の松の精なることを知り得た。そこで老翁は住吉に歸るべく海人の小舟に打ち乘つて、沖の方へと漕ぎ出した。友成もまた同じ浦舟に棹して住吉へと向つた。その時の船歌。

高砂や、此の浦舟に帆をあげて、〳〵。月もろともに出しほの、波の淡路の島蔭や、遠くなる尾の沖すぎて、はや住の江に着きにけり。〳〵。

かくて友成は住吉に着き、神前に於ける神の舞を見て、忝じけなさの涙に、袖を濡しつゝ、都をさして其處を去つた。

(三) 句釋

【高砂や】(高砂ヨ) 『高砂』は播磨の國の海岸の地名。委しいことは二九頁を見よ。このやは所謂呼

掛けの感動詞である。此處は高砂といふ場處を提出して、その光景を讀者の念頭に思ひ浮ばせようとする書き方である。

【月もろともに出でしほの】(月ノ出ル頃、船ヲ出シテ) 『月もろともに出で』を『いでしほ』に言ひ掛けたのであります。『いでしほ』は月ノ出ル頃といふ意と、滿チシホの意とを兼ねて持たせてあります。

【波の淡路の島蔭や】(波ノ色ノウスク見エル淡路島ノカゲ) 『波のあはき』を淡路といふ地名に言ひ掛けて居ます。これは又『波の泡』を淡路に言ひ掛けたとも見られますが、私は前の意に見て置きます。

【遠くなる尾の沖すぎて】(高砂ノ浦カラ遠ザカリツヽ、鳴尾ノ沖ヲ通リ過ギテ) 『遠くなる』を『鳴尾』といふ地名に言ひ掛けたのであります。『鳴尾』は攝津國武庫郡の地名、大阪と神戸との間の海岸。大運動場がある。

【住の江】(住吉) 攝津國の地名。有名な住吉明神のある處です。「え」と「よし」とは、同じ意味の語であります。比叡山の東麓にある日吉神社は『ひえじんしや』とも云ひます。此の點から考へると『すみのえ』も『すみよし』も意味に於ては變りがありません。

（四）　通釋

天下に名を得たあの高砂、その高砂の浦の舟に帆をあげて、月の出るのと共に漕ぎ出す。波の色淡き淡路島を通り過ぎて、高砂の浦よりは次第々々に遠くなりつゝ、何時か鳴尾の沖をも過ぎて、早や住吉の浦に着いたわい。

一四　秋の夜

（一）　解題

松虫の、鳴く音もいとどあはれなり。葎の奥の夕まぐれ、萩がさえだにおく露も、そよと音なふ風ゆるに、玉と亂れて淋しとも、いとど淋しき折からに、高嶺を出づる月のかげ、ちりも曇らぬ光かな。松ふく風も一しほの、景色を添へて照りまさる、今宵の空のさやけきに、寢てやはひとり明石潟、月に浮かるゝ友あらば、鳥はなくとも詠めあかさん。

（二）　句釋

これは、月色皎々として吹く風涼しく、蟲の音あはれなる秋の夜の光景を謠つたものであります。

【いとどあはれなり】（マコトニ面白イワイ）『あはれ』はオモシロイといふことで、悲しいといふの

でありません。

【葎が奥の夕まぐれ】(雜草ノ生ヒ茂ツタ奥深イ處ニアル宿ノタ方)『夕まぐれ』は夕暮のことであります。

【萩がさえだ】(萩ノ小枝)『さえだ』は小エダ・コズエなどの意であります。

【そよと音なふ】(ソヨ〳〵ト音ヲタテル)

【玉と亂れて】(玉トナツテ亂レル) 風に露がバラ〳〵と散る有樣。

【淋しともいとゞ淋しき折からに】(ナカ〳〵サビシイ時分ニ)『淋しとも淋し』は非常ニサビシイと云ふ意です。『折から』は、時分・頃などの意であります。

【高嶺】(高イ峰)

【月のかげ】(月) この『かげ』はスガタ・カタチなどの意。だから『月かげ』は單に月といふ意に見て置けばよろしい。

【ちりも曇らぬ】(少シモ曇ツテ居ナイ) 月に一點の曇もなく、冴え渡つて居ることを云つたのです。

【一しほの景色】(一段ノオモムキ)

【照りまさる】(月ガマス〳〵明ルクナル)

【さやけきに】(アカルイノニ)『さやけし』はスミキツテ清ラカナコトです。

【寢てやはひとり明石潟】(寢テヒトリ明サレヨウカ。トテモ明サレナイ。明石潟ハ今宵ノヤウナ月夜ニハ實ニヨイ處ダ)『やは』は反語、『ひとり明し』を月の名所の明石に言ひ掛けたのであります。『明石』は播磨の國にあつて、風景のよい處、攝津の須磨と並べ稱せられてゐます。

【月に浮かるゝ友あらば】(月ニ心ヲ奪ハレテ見ニ行ク友ガアルナラバ)『浮かる』は深ク興ニ入ツテ心ヲ奪ハレルことであります。

【鳥はなくとも】(鶏ガ鳴イテモ) 夜が明けてもかまはずといふ意味であります。

(三) 通釋

秋の夜は松虫の鳴くのも面白いものだわい。荒れ果てた雜草の中にある宿の夕方、萩の小枝においた露が、そよ〳〵と吹く風の爲に、玉となつて散りみだれるさまは、中々さびしいものである。今しも向ふの高い峰から月が出て來たが、一點の曇もなく、マア明かな光を放つて居ること。そして松吹く風に、一段の趣が加はつて、なほ冴え渡るやうである。あゝ實によい景色だ。こんな夜を獨り寢て明かされようか。とても明かされはしない。あの明石潟は今宵のやうな夜には、實によからう。月に

浮かれて其處へ行く友達が有るなら、鶏が鳴かうが、そんなことはお構ひなしに、夜の明けるまで眺めたいものだ。

一五　早春

（今井慶松作曲）

まごの鶯、朝なあさな、あかつき知らぬ夢路をとひて、春めきそめぬ、きのふ今日。袖ふく風はなほ寒けれど、今朝や遊ばん野に山に、梅のさかりの過ぎぬ間に。

（一）句釋

【朝なあさな】（毎朝）なは接尾語で、別に意味はありません。それで『朝な朝な』は朝朝といふのと同じであります。

【あかつき知らぬ夢路をとひて】（夜ノ明ケルノヲ知ラズニ眠ツテ居ル處ヲオトヅレテ）『あかつき知らぬ夢路』は夜の明けるのを知らずに眠つて居るといふ意で、春の夜の寢心地のよいことを云つたものです。支那の孟浩然といふ人の詩に「春眠不ノ覺ノ曉、處々聞ニ啼鳥ニ」といふ句があります。此處はそれから取つたのです。

【春めきそめぬきのふ今日】（昨今ハ春ラシクナリ初メタ）

（二）　通　釋

毎朝まだ寢てゐるうちから、鶯が窓の邊に來て鳴いて居る。どうも昨今は春らしくなつたわい。袖をふく風はまだ寒いけれども、今朝は野山へ遊びに行かうよ。梅の盛の過ないうちにサ。

一六　さみだれ

（山登松齡作曲）

なよ竹の、夜の間の夢のみじかきに、長々しくも繰りかへす、軒の糸水いとどしく、槇の板戸のあけくれに、しめりがちなる閨の中、うつら〳〵こうたゝ寢の、枕に遠きほとゝぎす。雲間ほのかに忍ぶ音もゆかしや。まゝにならぬ身の、うき數まさる夏草の、鐘をばよそに聞き捨てゝ、まだ焚き殘る蚊遣火の、燃ゆるばかりの物思ひ、晴るゝ間もなき夜半のさみだれ。

（一）　句　釋

【さみだれ】（五月雨）　陰暦の五月、即ち陽暦の六月頃降りつゞく長雨のことです。俗に梅雨又はつゆと云つてゐます。

【なよ竹の、夜の間の夢のみじかきに】（夏ノ夜ハ短イモノデアルノニ）『なよ竹の』は枕詞です。此れは靭やかな竹といふことで、俗に女竹ともいふものゝ事であります。竹のよ（節のこと）といふの

を夜に言ひ掛けたのです。意を通じて解する時には、省いて行つてよろしい。

【長々しくも繰りかへす】（長々シク毎日々々）『繰りかへす』は次にある『糸』の縁語、毎日々々の意に見て置けばよろしい。

【軒の糸水いとゞしく】（五月雨ガヒドク降ッテ）『軒の糸水』は軒端に落ちる細い水即ち雨垂といふことで、五月雨の降る形容です。

【槇の板戸のあけくれに】（明ケテモ暮レテモ）『槇の板戸の』は『明け』の序詞になつて居ます。『戸を開け』のアケと、『夜の明け』のアケと音が通ずる處から、かう續けるのです。「槇の板戸」は全文の大意を取る際には勿論省いて行つてよろしい。『槇の板戸』は檜の板で造つた戸といふ意。

【しめりがちなる閨の中】（晴々シナイ寢室ノ中）『しめる』は物が濕氣を帶びるといふ意でありますが、此處は降雨の爲に、鬱陶しく氣の晴々しないことを云つたのです。

【うつら〳〵】（ウトウト）

【うたゝ寢】（假寢）本當に寢るのでなく假に横になること。

【忍ぶ音もゆかしや】隱レテ鳴ク聲モ何ントナク慕ハシイワイ）時鳥が忍び音に鳴いてゐるのは物思ひのある爲、自分も亦物思のため、心の内で泣いてゐる。同病相憐むの譬の如く、同じ境遇にある

ものは相愛し相慕ふもの。かういふ理由で時鳥を慕はしく、懷しく思ふのであります。

【うき數まさる夏草の】（夏草ノ茂ルヤウニ辛イ事ガ重ナル）

【鐘をばよそに聞き捨てゝ】（明ノ鐘ガ鳴ッテモ耳ニモ入レナイ）こゝは單に『夜ガ明ケテモ』位に見て置いてよろしい。

【焚き殘る蚊遣火の】（燃エ殘ッテ居ル蚊遣火ノヤウニ）夏の夜は短いものだから、夜が明けても、蚊遣火がまだ燃え切らないが、そのやうにといふ意です。

【もゆるばかりの物思ひ】（燃エ上ル程ノハゲシイ物思ヒ）『物思ひ』のひを火に通はせて、『もゆるばかり』と云つたのです。非常な心配といふ意です。

【晴るゝ間もなき夜半のさみだれ】胸ノ晴レル間ガナイト同樣ニ、降リツヅイテ晴間ノナイ五月雨ダナ）『晴るゝ間もなき』は『物思ひ』と『五月雨』との兩方に掛るのであります。

（二）通釋

夏の夜は短いものだが、それにも似合はず、雨は長々と毎日降り續いて、軒の雨垂水は、まことに甚しく落ちる。明けても暮れても、晴れ〳〵としない寢室の中で、うつら〳〵と假寢をして居ると、

遙か彼方で時鳥の鳴く音がする。その時鳥が雲間に姿を隠して、かすかに忍び音を漏らすのも、また慕しいものだわい。自分も丁度、その時鳥のやうなもの、思ふ儘にならぬ此の身には、憂い辛い事が夏草の様に数多くあつて、夜は明けても、未だ蚊遣火が燃え殘つて居る様に、自分の物思ひも容易に盡きることがない。かく晴間のなき我が胸は、連日降りつゞくこの五月雨によく似て居るわい。

一七　小野の山

忘れては、夢かとぞおもふ思ひきや。となせの宮の花ざかり、御供つかへてよるひるわかず、君を八千代と祝ひしも、天のがはらや交野の野邊に、御狩くらしゝ其の時々を、思ひ出づれば袖の露。睦月ばかりのことなれば、深雪ふりつみ道さへわかず、たとゞくしくも音づれて、見あげまつれば何となく、ものゝ哀ぞ身にしみまさる。夢か現か小野の山、雪踏わけて君を見んとは。

（一）　解　題

これは文德天皇の皇子惟喬親王が世を遁れて、小野の山奥で佗住をしておいでになる處へ、嘗て親王と御懇意であつた在原業平が御訪ね申上げた時のことを歌つたものであります。それで『小野の山』と題したのです。

（二）物語

文德天皇の皇子に惟喬親王と申し上げる御方があつた。第一の皇子であるから、まさしく皇太子に立ち給ふべき御方である。處がその御母が藤原氏でないために、儲位は藤原良房の女が生み奉つた生後僅かに八ヶ月なる第四の皇子、惟仁親王の御手に落ちた。在原業平は惟喬親王の御境遇に深く御同情申し上げ、有力な後援者として、この親王の爲めに、身心を碎いた。親王もまた無二の股肱として彼を愛し給うた。かくて二人の中は益々睦しくなり行き、茲に三世の契が固く結ばれたのである。

惟喬親王の御離宮は山城國の水無瀨といふ所にあつた。年々櫻の花の盛りには、その櫻を見る爲に行啓されるのが常になつて居た。その時には必ず業平を御供として連れて行かれる。一年、河内國の交野といふ處へ花見に行かれた。勿論業平も御同行申し上げたのである。すると其處の渚の院のほとりにある櫻が、何所の花よりも美しく咲いて、取り分け趣が深い。一行はその花の下に集り、花の枝を折つて髪に挿し、上・中・下、總ての者が、和歌を詠んだ。その時業平の詠んだ歌はこれである。

世の中に、絶えて櫻の咲かざらば、春の心はのどけからまし。

これに櫻を愛する餘り、雨や風に散らされはせぬかと、花のことが氣にかゝり、心が長閑でない所から、

嘆した嘆息の聲である。勿論この花には、惟喬親王を寓せて居る。此の親王故に我が心は千々に碎かれる。はじめから此の親王が居られなかつたら、こんなにまで心配はしないものをといふ彼の述懐である。花を見ても君の御身の上を思ふ彼の心情、誠に殊勝の至りである。さて其の櫻の下を立つて歸らうとする頃には、永い春の日も西の山に沈んで居た。折柄御供の者が新に酒を持つて來て、『此の酒を呑まうよ、同じくは景色のよい所で、うまく飲まう。』といふ。よい所を搜して行くと、天の河といふ所へ着いた。そこで新に酒を飲む事にして、親王の御前に、業平が大御酒を進らせると、親王は『交野の花を賞して、天の河まで來たといふ事を題にして歌を詠み、それを肴にして盃をさせ。』と仰せられた。隨分むつかしい題であるが、業平は直ちに、かう詠んで奉つた。

狩り暮らし棚機つ女に宿からん、天の河原に我は來にけり。

親王は此の歌に感心されて、繰り返し〳〵誦んで居られた。既にして親王は水無瀨に歸つて、離宮へ入られた。其の夜は深更に及ぶまで、親王を始め一同は續いて酒を飲み、物語などして居られ、終に主人夜である親王が、酒にお醉ひになり、其の座を立つて奥へ入らうとせられる。折柄見ゆる十一日の月も、早や山の端に隱れようとしてゐるので、業平はまたもやこんな歌を詠んだ。

飽かなくにまだきも月の隱るゝか、山の端逃げて入れずもあらなん。

折柄の月を親王によそへて、奥に入り給ふのを惜んだのである。

× × × × × ×

これはまた或年の三月のこと、惟喬親王が例年の通り、水無瀬の離宮へ花見においでになつた。業平もまた御供申し上げた。幾日か其處で御遊びになつて、京の宮へ御還りなされる際、業平は親王を宮まで御送り申し上げ、御暇を賜はつて家に歸らうとする。親王は御酒を下されたり、祿を下されたりなんかして、なか〳〵御暇を下されない。當然御暇を下さつてもよささうな場合であるのに、其の御氣色もない。何とかして引き止めようとして居られる樣に思はれる。業平もこれには何か仔細があるのでは無いかと、氣にかゝるので、その趣を歌に詠んだ

枕とて草引き結ぶ事もせじ、秋の夜とだに頼まれ無くに。

この歌の表の意は、短い春の夜だ、今夜はこゝに起き通して、お仕へ申さうといふのであるが、その裏には、親王の御樣子がどうも變だ。何かありさうである。これではうつかりと寢られもしないといふ意を寓したのである。業平が御樣子を伺つて居ると、親王は何時までたつても御寢みにならず、と う〳〵一夜を起き明されたのであつた。こんな風に業平は宮に來ては、御仕へ申して、親王を御後援申し上げて居たのであるが、親王は世を果敢なきものと思召され、竟に剃髮して小野の山奥へ移られ

た。

さて其の後、業平は正月の御禮の爲め、親王にお目に懸らうと思つて、參つた處が、其の小野といふ處は、比叡山の麓にあるため、雪がまことに深く積つて道さへわからない。その中を無理に踏みわけて、親王の御室に行つて、お目に懸れば、親王には御退窟な御樣子で、何となく物悲しげに御見受け申し上げたので、お暇を戴く譯にも行かず、稍〻久しい間、御前に居て、昔の事、今の事と、思ひ出すまゝに物語りなど申し上げた。この儘かうして、お仕へ申したいものだと、彼は思つたけれども、公の役目を帶びてゐる身のこととて、思ふにまかせられず、日も暮方にお別れして京へ歸らうとしてかう詠んだ。

忘れては夢かとぞ思ふ。おもひきや、雪踏み分けて君を見んとは。

一の親王として時めかせ給ふ筈の御身の、かうも變り果てられた御姿を見參らせては、夢か現かと疑はざるを得ない。業平の歌這般の心情を寫し得て甚だ妙である、かくて彼はつきせぬ名殘を惜みつゝ、泣く〳〵京に歸つたのである。

（三）　句釋

【わすれては夢かとぞ思ふ、おもひきや】（ウツカリトシテ居ルト夢デハナイカト思ハレル。コンナ事ニナラウトハドウシテ思ツタラウカ）　これは業平が惟喬親王を御訪ね申し上げて、親王が御出家遊ばされた御姿を拜し、悲しさの餘り詠んだ『忘れては夢かとぞ思ふおもひきや、雪ふみわけて君を見んとは』といふ歌の上の句を取つたのであります。○歌の意味、――ふと忘れては、一の親王として崇められ給ふ筈の御方が、かやうな御姿に變らせられたのを、夢では無いかと思ふ。其の當時、何で思ひ懸けよう、かうして深い雪を踏み分けて來て、君をお拜み申すやうな事があらうなどとは。

【となせの宮の花ざかり云々】（戸無瀬ノ宮ノ花盛ノ頃、夜晝君ノ御側ヲ離レズニ御供申シ上ゲテ、君ガ八千代ニ御榮エ遊バス樣ニト祈ツタコトモ）『戸無瀬の宮』は山城國大井川の川上にあつた惟喬親王の御所です。然し伊勢物語には『山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり。年毎の花盛には、その宮へなむおはしましける。』とあります。『水無瀬』は今の攝津國三島郡島本村大字廣瀬の地でありますが、伊勢物語の云ふ通り水無瀬に宮が有つたとするのが穩當でせう。

【天のがはらや交野の野邊に云々】（天ノ河原ヤ交野ノ野邊デ、花見ヲシテ日ヲ暮シタ時分ノコト）『天の河』は今の河內國北河內郡牧野村大字禁野の一名です。『交野』は今の河內國北河內郡中田・牧野・川越の三村の地にあたつてゐます。昔は櫻の名所として天下に知られて居ました。太平記俊基朝臣東

下りの條にも、『落花の雪にふみ迷ふ、交野の春の櫻狩』とあります。

【おもひ出づれば袖の露】（思ヒ出スト涙デ袖ガヌレル）

【睦月ばかりのことなれば】（正月頃ノコトデアルカラ）『睦月』は陰暦正月のことです。『ばかり』はコロといふ意。伊勢物語には『思ひの外に御髮おろさせ給ひて、小野といふ所に住み給ひけり。睦月に拜み奉らんとて詣でたるに云々』とあります。○月の異名については『壽くらべ』の處に詳しく說いてありますから御覽下さい。

【深雪ふりつみ道さへわかず】（雲ガ降リ積ツテ道サヘワカラナイ）『深雪』はたゞ雪といふのと同じです。『み』は接頭語で意味がありません。

【たど〳〵しくも】（タドリ〳〵シテ）わからない道をさがしさがしして辛じて行く有樣。

【ものゝ哀を身にしみまさる】（御氣ノ毒デマス〳〵情ナクナツテ來ル）

【夢かうつゝか】（コノ光景ハ夢カウツツカ）『うつゝ』はゆめの反對で現實といふ意味であります。あまりに惟喬親王の御身の上の變化が甚しいので、それを夢か現かと疑つたのであります。

【雪ふみわけて君を見んとは】（雪ヲ踏ミワケテ、カヤウナ山奥デ御目ニ懸ル時代ガ來ヨウトハ思ハナカツタ）　業平の歌の上の句で言ひ起したから、同歌の下の句で結んだのであります。この唄はなか

〳〵巧妙に出來て居ます。箏唄として立派なものだと思ひます。

（四）　通釋

ウッカリして忘れると、夢ではないかと思はれる。昔戸無瀬の宮の花盛の頃、夜叢親王の御側を離れずに、御供申し上げて、親王が八千代に御榮え遊ばす樣にと、お祈り申し上げた事も、それから天の河原や交野で花見をして、日を暮した時分の事を思ひ出すと、涙で袖が濡れる。自分が（業平）この親王を小野の山奥に御訪ね申上げたのは、正月頃の事であるから、雪は深く降り積つて、道さへわからない。それで辿り〳〵して行つて、君を御見上げ申すと、御姿が全く變つて居られるので、何となく御氣の毒に思はれて、益々情なくなつて來た。この光景は夢かそも現實か、疑はざるを得ない。小野の山奥へ雪踏けて、君に御目に掛る時代が來ようとは思はなかつたのに。

一八　金剛石

（四世　山木千賀作曲）

金剛石も磨かずば、玉の光は添はざらん。人も學びて後にこそ、眞の德はあらはるれ。時計の針の絶間なく、廻るが如く時の間も、日かげ惜みて、勵みなば、如何なる業かならざらん。水は器に隨ひて、その樣々になりぬなり。人は交はる友により善きは悪きにうつるなり。己にまさるよき友を、選び求めてもろともに、心の駒に鞭うちて、學の道に進めかし。

（一）　解題

これは明治天皇の御后、照憲皇太后がお作りになつた歌でありまして、七五調の句十四から出來てゐます。その第一句に金剛石といふ語があるので、それを此の曲の題にしたのであります。

（二）　句釋

【眞の德はあらはるれ】（眞實ノ德ガ身ニツクノデアル）『あらはるれ』はあらはると同じ意、上にこそといふ語がある爲めに、それに應じてかう變つたのであります。

【時計の針の】（時計ノ針ガ）こののは主語を示すので、がといふのも同じです。

【時の間】（ワヅカノ間モ）

【日かげ】（時間）

【如何なる業かならざらん】（ドンナ事業ガ出來ナカラウカ）如何なる事業でもなしとげることが出來るといふ意。

【水は器に隨ひて】（水ハソノ容器ニ隨ッテ）

【その樣々になりぬなり】（容器ノ種類ニヨッテ色々ニカハッテ了フノデアル）四角な器に水を入れると、水も四角な恰好になり、圓い器に入れると、圓くなることを云つたのです。『なりぬなり』のぬは完了の意を示す助動詞でありまして、何々してシマフといふ意味です。

【心の駒に鞭うちて】（心トイフ駒ニ鞭ヲウッテ）こゝは心を駒に譬へて云つたのです。心ヲハゲマシテといふ意に見て置けばよろしい。

【學の道に進めかし】（學問ヲ修メテ行ケヨ）『かし』は完結した文句の後につけて、餘情を添へ、念

を押す詞であります。今日の口語で云へばサ・ヨ・ワイなどに當りませう。

（三）通釋

金剛石のやうな寶石でも、それを磨かなかつたら、玉の光は加はらないであらう。人も學問をして後に、眞の德がその身につくものである。だから丁度、時計の針が少しも休む間がなく廻つて居るやうに、僅かの間も、時間を惜んで勉強したら、どのやうな仕事でも成就するのである。それから水といふものは、その容器に隨つて、色々に形のかはつて了ふものであるが、それと同じく人も、その交る友の如何によつて善くも惡しくもなるのである。だから自分よりもよい友達を選擇し、互に心を勵まして、學問を修業して行けよ。

一九　山櫻

のどかなる春の心にさそはれて、花の下ひもうち解くる、契や昨日、けふはまた、思はぬ方の山風の、吹くにまかする花の枝。　それも浮世の習ぢやものを、心弱さを咎にして、あだなる花ごともすれば、たつ名恥かし山ざくら。

(一)　解題

これは山櫻によせて、人の心の變り易いことを歌つたものです。山櫻は自に自然に生える櫻であります。普通の櫻とは異ひ、春葉が先きに出て、それから花が咲きます。花は一重で、早く咲き早く散るのであります。

(二)　句釋

【のどかなる春の心にさそはれて】(ノンビリトシタ春ノ陽氣ニツレテ)『のどかなる』はノンビリトシテ居ルこと。『春の心』は春の陽氣といふ意でありますが、これに溫かい男心の意を含めたのであります。

【花の下ひもうち解くる】(花ノ蕾ノ結ガホコロビ解ケル)　花の蕾の綻ぢ紐が解ける、即ち花が開くといふことでありますが、これに女ノ心ガウチ解ケルといふ意をも持たせて居ます。『したひも』は下紐です。

【契りや昨日】(約束ヲシタノハ昨日デアルノニ)『契』は男女が行末かけて變らじと言ひ交すこと。

【思はぬ方の山風】(思ヒガケナイ方面カラ吹イテ來タ山風)『山風』は山から吹き下す風でありますが、此處は他の男といふ意に用ひてあります。

【吹くにまかする花の枝】(花ノ枝ガ自由自在ニ吹カレテ居ル)　折角約束したのに、早くも他の男に女が奪ひ去られるといふ意を寓したのであります。女を花の枝に擬へて云つたのです。

【心弱さを咎にして】(女ノ心ノ弱イノヲ咎ムベキ事トシテ)

【あだなる花】(心ノ落チツカナイ浮氣ナ女)

【ともすれば】(ヤ、モスルト)

【たつ名恥かし山ざくら】(浮氣者ト名ヲ立テラレル山櫻ノ身ニナツテ見レバ恥カシイコトダラウ)

『山櫻』は勿論女に喩へてあるのです。

(三) 通釋

山櫻　春の陽氣に誘はれて、花が開くやうに、女が温い男の心に誘はれて心をゆるし、行末かけて變らじと契約をしたのは、まだ昨日のことである。それに今日は意外な他の男に語らはれて、それに身も心もうち任せて居る。然しそれも浮世の習はしであるから、致し方のないことであるのに、やゝもすると、人は女の心弱いのを責めて、浮氣な女だといふ名を立てる、――丁度山櫻が風にまかせて、すぐ散るので、あだなる花と云はれるやうに――然しさう云はれる山櫻や女の身になつて見れば、さぞ恥かしいことであらう。

二〇　喜撰

わが庵は、都のたつみしかぞ住む、うつふし染の麻衣、色といふ字はどうしたものか、始め終りのさだかにも、月のかほばせ見せぬも憂しや。雲の上なる三十一文字を、歌にのみ聞く戀のたね。茂り易うてそのくせに、秋の初花露よりもろく、枯れにし後のおとづれは、谷の螢か沖邊ゆく、海人のいさりの思ひをよそに、樂な夜毎の獨寢は、世をうち山と人はいふなり。

(一) 解題

これは喜撰法師の『わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうち山と人は云ふなり』といふ歌を、上下分けて前後につけてあるから、其の歌の作者の名を取つて題としたのであります。喜撰といふ名は、六歌仙及び小倉百人一首の中に見出されますが、此の人の詠んだ歌としては、唯此の一首しか傳はつて居ません。桓武天皇の後裔であります。元享釋書といふ本によりますと、宇治山に隱棲して、密呪

を持し、長生を求め、穀を避け、一夕白雲に乗じて去つたといふことになつて居ますが、あまり信用出來ません。

（二）句釋

【わが庵は都のたつみしかぞ住む】（我ガ庵室ハ京都ノ東南宇治山ニアル。而シテ此處ニ此ノ通リニ住ンデ居ル）『庵』は庵室の義、草木を結んで作つた假の家のことです。『たつみ』は昔の方角を示す語で、辰と巳との間といふ意、丁度東南にあたります。一字では『巽』と書きます。尙序ですから方角のことを一寸申上げて置きませう。方角に十二支を割當てて、北を子とし、子丑寅卯と東に廻れば、卯は東、午は南、酉は西です。それで地球儀の南北に引かれた線を子午線といふのであります。また東北は丑寅、東南は辰巳と云ふことになります。尙辰巳を巽と一字であらはす樣に、未申・戌亥・丑寅をそれ〴〵坤・乾・艮と書きます。『しかぞ住む』は『然ぞ住む』でありまして、此ノ通リニ住ンデ居ルといふ意です。それを鹿ぞ住むと書いた本を時々見ます。甚だ滑稽ではありませんか。

【うつふし染の麻衣】（低イ俯伏シタヤウナ庵ニ五倍子染ノ麻衣ヲ着テ住ンデ居ル）庵が低くて俯伏したやうになつて居ることを、黑の染料の五倍子に言ひ掛けたのであります。『五倍子』はぬるでの樹

幹又は枝葉などに生ずる袋狀のもの、沒食子蜂が生みつけた卵子の孵化によつて出來るのであります。これを粉末にしたものをふしのことといつて昔の婦人が齒を染める際に用ひました。こゝの『ふし染』は墨染の意に見て置いてよろしい。『麻衣』は麻織の衣の意ですが、こゝは僧侶の著る法衣のことです。そして次の『色』といふ字を呼び起す序詞のやうになつてゐます。

【色といふ字は云々】（色ト云フモノハドウイフワケカ）『色』は色情の意です。『色といふ字』の字はモノといふ意に見るがよろしい。

【始め終りのさだかにも】（何時始マツテ何時終ルノカハツキリワカラナイ）『さだかに』はシカト或はハツキリトといふ意です。

【月のかほばせ】（美シイ顏）『かほばせ』はかんばせともいひまして顏ノ狀・顏色などの意ですが、こゝは單にカホといふ意に見て置いてよろしい。

【見せぬも憂しや】（見セテクレナイノモ辛イコトヨ）

【雲の上なる三十一文字】（高貴ノ方々ノモテアソバレル歌）『雲の上』は宮中を天に比していふ語でありますが、此處は高貴の方々の意に見るがよろしい。『三十一文字』は和歌のことです。

【歌にのみ聞く戀の種】（歌ノ上デシカ聞カナイ戀ノ種ハ）戀を植物になぞらへて種と云つたので

す。

【秋の初花露よりもろく】（秋ノ初花ガ露ヨリモ早クシボムヤウニ）『もろし』はコハレヤスイといふことですが、此處はシボムの意に見るがよろしい。『初花』は朝顔の初花であります。

【枯れにし後】（戀ガ消滅シテシマツタ後）前に『初花』とありますから、その縁語を用ひて、『枯れにし』と云つたのです。

【谷の螢か、沖邊行く海人のいさりの】（谷底ニ居ル螢カ、又沖ヲ行ク海人ノ漁火ノヤウニ）『谷の螢』は外部からは、一寸も見えません。それでこの語で音信ノ全ク無クナルことをあらはして居ます。『沖邊行く海人のいさり』は絶え〳〵にしか見えないものです。それで此の句によつて音信ノ間遠ニナルことをあらはして居ます。『海士』は海で魚介を捕ることを業として居るもの、即ちレフシのことです。『いさり』は漁火の略、漁船のつけてゐる燈火のことです。

【思をよそに】（斷念シテ）

【世をうぢ山と人はいふなり】（コノ世ノ中ヲ憂ク辛ク思フノダト人々ガ云フ）喜撰法師の歌の上の句を取つて來たのです。『うぢ山』のうに『世を憂』のうを云ひかけてゐます。『うぢ山』は即ち宇治山のことで、山城國宇治郡にあります。今は喜撰嶽と稱へて居ます。

（三）　通釋

喜撰法師は都の東南、宇治山の俯伏庵に、墨色の麻衣を身に纏うて、憂いとも思はず氣樂に住んで居たといふが、その墨色の色といふものは、どういふわけか、始めと終りがしかとしないものだが、その樣に相手の女が美しい顔をしかと見せて呉れないのは辛いものだよ、戀といふ語は、丈卿稼方が、三十一文字の歌の上で、よく云はれるのを聞くのであるが、その戀といふものゝ種は、非常に茂り易くて、一度芽を出せば、ずん〳〵と成長はして行くが、そのくせに、秋の初花が露よりも早く凋むやうに、束の間に消滅してしまふ。その後の音信はといふと、谷底の螢のやうに全く見えなくなるか、沖行く海人の漁火のやうに絶え〳〵になつてしまふのである。こんな位なら、いつその事と思ひ切つて毎夜樂に獨寢をして居ると、『この世の中を憂く辛く思ふが故にそんなことをすると』世間の人が云ふ。

二一　六段の歌

まつとても花に寢ぬ夜は無きものを、如何につれなき山時鳥。幾夜こがれて待つ閨の戸に、せめて慰む妻琴の、調さえ行く月のかげ。（以上前歌）

ふけて霜夜のさむしろに思はつもりて雪のあけぼの。（以上後歌）

（一）　句釋

【まつとても花に寢ぬ夜は無きものを】（如何ニ待ツカラト云ツテモ櫻ノ花ノ爲メニハ寢ズニ居タト云フ夜ハ無イガ）たゞ『花』といへば大抵の場合には櫻を指します。

【如何につれなき山時鳥】（何トマア不人情ナ時鳥ダコト）時鳥を待つ場合には、夜も寢ずに居るのに、一聲も鳴かない。それで不人情だと云つたのです。『山時鳥』はたゞ時鳥といふのと同じです。重に山に棲むから、かう云ふのであります。鷗・千鳥を海鷗・濱千鳥といふのも此の類です。時鳥の聲は、昔は非常に歡迎されたもので、その一聲を聞かうとして、夜明まで起きて居たといふ例は、少くありません。『忍び音は、更けてや鳴くと、時鳥いも寢ぬ夜半を重ねてぞ待つ。』といふ進子內親王の御

歌によつても、その邊の消息が伺はれます。『つれなし』はナサケ心ガナイ・薄情などいふ意です。

【幾夜こがれて待つ閨の戸に】（幾夜モ戀ヒ慕ツテ待ツテ居ルノニ寢間ノ戶口ニ來テ鳴カナイ）『こがる』は深ク戀ヒシタフことです。

【妻琴】（コト）爪琴の義、爪を用ひて彈くからかういふのです。

【調さえゆく月のかげ】（琴ノ音モ月ノ光モ冴エテ行ク）琴の音の冴えて行くのをさえゆく月に云掛けたのです。『調』は音律とか音の調子とかいふ意ですが、此處は單に『音』といふ意に見てよろしい。

【さむしろ】（セマイ敷物）『狹筵』の義、此處は狹い敷物の意に見るがよろしい。

（二）　通　釋

如何に待つといつても、花の爲に夜を明したことはない。それに時鳥を待つとなると幾夜も寢ないで戀ひ慕つて居るのに、一聲も寢間近くで鳴いて呉れない。マア不人情な時鳥だこと、せめてもの慰みに、此處で琴を彈くと、その音は月の光と共に冴えて行く。

霜夜の深更、狹い敷物に獨寢する此の身には、色々物思が積つたが、夜が明けてから見たら雪も積つて居た。

二二　初若菜

（山田檢校作曲）

小松原、末の齢にひかれてや、君が爲とて野の朝戸出に、年も若菜の六十ひとつ、摘むてふ春ぞ限りなき。（第一段）

朱雀の御賀にならうたる、萬歳樂や賀皇恩。けしきばかりの舞の袖、ためし少き御あそびに、おの〳〵心いれ給ふ。先づその得手の人々に、琵琶は螢の兵部卿、誰にこがるゝ名のゆかり、光る君には琴のこと、大臣は例の大和ごと、上手をつくし給へばぞ、いと優にこそ聞ゆなれ。（第二段）

その十二律十三の、いとし男にあひの手の、六段九段、人目の關、越ゆる屏風の雀繪、すゞめいろ時しのぶ夜を、君が手ごとに掛けられて、曲も雲井のするてうに、心の表うらなくも、あかしや須磨の恨みわび、人傳ならでその中をわたせし橋の長枕。早やかさゝぎに急がれて、わかれ車の涙返し、かへる直衣の袖たもと、わりなき仲のわりづめや、みだれ亂るゝまごゝろを、しろし召させ給はれと、後の朝の藻鹽草、かいて參らせ候かしく。千歳の松のみとりごに、かへる暦の女文字、取る成る開く吉日や。（第四段）

猶末廣のことぶきを、盡きせぬ春と祝しけり。盡せぬ春と祝しけり。（第四段）

（一）　解題

此れは源氏物語の若菜の卷に基いて作つたものですから、初若菜と題したのであります。此曲の第二段の終まで、即ち『いと優にこそ聞ゆなれ』は源氏の君の六十一歳の御賀の事を云つたのであります。當日、人々が初若菜を摘んで源氏の君に献上しましたこと、及び盛大な管絃の演奏會が催されたことが書いてあります。

後半即ち『その十二律云々』以下は樂器や樂曲等に關係のある語を用ひて、二人の男女間の艶事を唄にして述べたものですが、全然寄せ布を綴つた樣に、徒らに語句を尻取的に連接して居りますから、一貫した意味を取ることが甚だ困難であります。源氏物語では源氏の君の四十の賀になつて居ますが、

箏唄ではそれを六十一歳の賀に作り換へて居ます。

（二）物語

一、源氏の君は今年六十一の春を迎へた。六十一と云へば祝賀をなすべき年である。正月の二十三日は子の日であつた。此の日に左大將の夫人なる玉鬘の君が、源氏の君の六十一の賀の御祝に初若菜を差し上げたいと云つて來た。前に何の沙汰もなく俄にこんな事を云つて來られたので、源氏の君は一寸斷り樣もなく、其の賀宴を受けることにした。南の正殿の西なる出座敷が其式場になつた。屏風壁代を始め、總てが新しく設置された。麗しい倚子等は立てず地錦四十枚、御茵・脇息等に至るまで、總て立派に飾られてある。螺鈿の厨子が二つ、夏冬の裝束の入つた衣箱が四つ、香爐藥を詰めた箱・硯・髮洗水を盛りたる器・櫛笥なども、立派なものが其場に並べられてある。造花臺には沈紫檀のものを用ひ、所有ものには珍しい紋が附いて居る。此等は皆趣味の高尙な玉鬘の君の好みで製作されたものであるから、何れも珍しく人々の注意を惹いた。宴會の席に列るべき皇子、大臣、公卿方も御出になつたので、源氏の君も愈、式場に出ようとしたが、其前に先づ內部で玉鬘の君に對面した。此對面は隨分久し振りであつたから、源氏の君は心の中で昔の事を色々と思ひ出して居た。玉鬘の君の方でもさうであつたに違ひ

ない。源氏の君の御容姿は誠に美しく立派で、年よりはずつと若く見えた。それで六十一歳などと云ふのは間違ではないかと思はれた。玉鬘の君は多少恥かしいと云ふ氣はしたけれども、打ち解けた樣子で物語をした。玉鬘の君は自分の生んだ子達を、源氏の君には見せまいと思つて居たけれども、其の夫左大將が『こんな機會にでも御見せしたがよいだらう』と云つたので、二人の子供を直衣姿に裝はせて伴れて來て居た。其の振分髮の無邪氣な處は實に愛らしい。

『自分では年などを忘れて居るが、こんな孫などを見せられると、思ひあたりますよ。中納言夕霧（源氏の君の長子）の處にもあるのだが、未だ見せて呉れませんよ。賀などして貰ふのは嬉しい樣で悲しくもあるね。老などと云ふことを忘れて居たいのだから……』

と源氏の君は笑ひながら云つた。玉鬘の君も益、美しい人になつて、一層品も添うて來る樣に見えた。

若葉さす野邊の小松を引き連れて、もとの岩ねを祈る今日かな。

と云ふ一首の歌を作つて源氏の前で吟んだ。そして沈の折敷四つに初若菜を盛つて獻上した。すると源氏の君は盃を取つて

小松原末のよはひに引かれてや、野邊の若菜も年をつむべき。

と返歌をした。

さうする間に、大臣●公卿等は皆所定の場處に就かれた。いよ〳〵祝賀の宴は開かれたのである。

二、式部卿の宮は此の宴席に列つて、左大將(玉鬘の夫)の得意顔で居るのを見ることを、面白く思はれなかつたのであつたが、源氏の君からの御招きがあつたので、矢張お出でになつた。然し大分遲れてゞあつた。式部卿の宮の御孫樣達は下り立つて奏役をして居られた。籠に入れた獻上物四十點、折櫃に入れた獻上物四十點を、中納言夕霧の君を始め、其他の方々が持つてお出でになつた。其の中に御盃が下つて若菜の羹が出された。源氏の君の御前には沈香木の掛盤が四個、そして其上には立派な御器具が並べられてある。

朱雀院御病氣の折柄とて遠慮をされて、管絃樂などは樂師を呼んでさせることを見合された。其方のことは玉鬘の父なる太政大臣が擔當して、客の中でその役をする人が調へられてあつた。使用の樂器も殊に優れたものばかりが選ばれたのである。其中和琴は彼の大臣が第一の秘藏のもので、其の音の妙なることは實に世に雙びがないのである。大臣は柏木の君に此れを彈けと命ぜられた。柏木の君は固く辭退したけれども、餘りに責められたので、仕方なく手を觸れた。

大臣は和琴の絃を緩く張つて、低音で御彈きになつて、高音で彈いて居る柏木の君と御合せになつ

た。平素から名手と評が立つて居る大臣の巧なることは云ふ迄もないが、柏木の君も其れに劣らぬ出來ばえであつたので、一座の人々は皆舌を卷いて感心した。琴のことは兵部卿の宮が御彈きになつたのである。此の御琴は宜陽殿(昔宮中で樂器書籍等を納め置かれた所)の御物で、代々第一と稱へられたのであるが、桐壺帝(源氏の君の御父)が御晩年に一品の宮に御下賜になつたのである。それを此度大臣が申し受けて此宴會に持出されたのである。源氏の君はこの琴の來歷を考へられるにつけて、色々と昔戀しく思つて居られた。兵部卿の宮は悄然として居る源氏の君の心中を察して、此れを源氏の君に讓られた。それで源氏の君は懷舊の情に堪へず、涙ながらに此琴で一曲を彈かれた。誠心の籠つて居る所爲か其の音は實に妙なるものであつた。奏賀の人々は階下に在つて、優れた聲の限を出して御祝の歌を唱へた。琴は呂の律になつた。

夜の更け行くに從つて、曲調も換つて青柳と云ふのが奏せられた時には、塒の鶯も夢を破られるかと思はれ、大邊面白かつた。公儀とは違つて、これは私事であるから、祿なども一段と心を用ひられた。夜明け方になつて玉鬘の君は御歸りになる。其時に源氏の君からは贈物を御出しになつた。さて源氏の君は

『自分は最早かく世を捨てた樣にして、呑氣に明し暮して居るので、年月の經つのも知らずに居た

のに、六十一の賀などして、自分に年を知らされたので、却つて心細く思はれますわい。尙時々は訪ねて見て下さい。かう古めかしくなつた身は、思ふ儘に對面の出來ないのを甚だ口惜しく思ひます。』

と仰せられた。まだ〳〵云つて置きたいことが澤山おありになるのに、玉鬘の君が餘りに歸りを急がれるので、源氏の君は甚だ物足りなく殘念に思はれた。玉鬘の君も眞の親よりも源氏の君の御心榮を有難く思はれるのであつた。

(三) 句釋

●第一段　源氏の君が六十一歳の賀をうけるに當つて、その感想を述べたものです。

【小松原】(小松ノ澤山ニ並ビ生ヘタ所)　此處ではそれを年若い子供達といふ意に用ひてゐます。昔は正月の子の日に人々が野邊に出て、小松を採つて長壽を祈つたものであります。これを『小松をひく』と云ひます。而して其遊びを『子日遊』と云つたのであります。

【末の齡にひかれてや】(生ヒ先キ永キ子供達ニ引カサレテ)　『末の齡』は末遠き人の齡と云ふ意味で、生ひ先永き子供のことを云つたのです。やは感動の意をあらはす詞であります。

【君が爲とて野の朝戸出に】(アナタニ御上ゲスル爲ニ朝早ク野原ニ出テ)　『朝戸出』は朝早く戸を開けて出ると云ふ意味ですが、此處は單に朝早くと云ふだけの意味に見て置けばよろしい。

【年も若菜の六十ひとつ摘むてふ云々】(年モ若キ人々ガ若菜ヲ摘ンデ六十一ノ年ヲ積ンダコトヲ祝ツテ呉レルト云フ此ノ春ハ限リナク芽出度イコトデアル)　『年も若菜』は年も若いと云ふ意と植物の若菜との兩意を持たせて居ます。『若菜』とは其年に生えた新しい菜のことです。これには芹・薺・御行・蘩蔞・佛座・菘・蘿蔔の七種があります。正月の上の子の日に、此の七種の菜で羹をこしらへて食べると、萬病を除くと云ふので、昔は盛に行つたものであります。『六十ひとつ』は六十一歳即ち本卦回のことであります。人が此年になると御祝をします。これを六十一の賀と云ふのです。『てふ』は云ふと云ふ意味です。『限りなき』は限りなく芽出度いものであると云ふ意。

●第二段　盛大なる御賀の有樣を云つたものであります。

【朱雀の御賀にならうたる】(朱雀院ノ六十一歳ノ御祝ニ習ッタ)　此れは朱雀院の六十一の御祝にならつて、源氏の君が六十一の御祝をなされたことを云つたのです。『朱雀院』は源氏物語によりますと、桐壺帝の第一皇子で、六條院即ち源氏の君の御兄上樣であります。

【萬歳樂や賀皇恩、けしきばかりの舞の袖】(萬歳樂ヤ賀皇恩ト云フ舞ヲホンノ形バカリニ舞ッタ)

『萬歳樂』は唐の高宗の后、即ち則天武后と云ふ人が樂人に作らせた舞であります。此皇后が鸚鵡を飼つて居られましたが、其鸚鵡が何時も『萬歳々々』と云ひましたので皇后がこれを大層喜び、遂に此舞を作らせられたと云ふことです。日本では醍醐天皇が京都大堰川で御遊をなされた時、纔か七歳の雅明親王に此舞を舞はせられた處が、大層御上手であつたので、帝の御感が深かつたと云ふことであります。『賀皇恩』は一名感皇恩とも申します。唐の太宗が作られて、父の帝の御美德を稱讃せられたものださうです。此舞が日本に傳つて後、嵯峨天皇の勅で大石岑良と云ふ人が改作しました。それから上皇の御祝の際に舞ふのが例となりました。此處は朱雀院六十一歳の御祝にその舞を舞つたのであります。『けしきばかり』は『形だけに』とか『少しばかり』と云ふ意味であります。

【ためし少き御遊びに】(今迄ニ例ノナイ盛大ナ御遊ビニ)『御遊』は音樂の御遊。平安朝といふ時代は管絃の遊が非常に流行致しまして、たゞアソビと云へば、管絃のことを指すのであります。管とは笛・笙・篥篳などのやうに管狀をなして居る樂器をいひ、絃とは琴・琵琶などのやうに絃を張つた樂器をいひます。それで『管絃』はまた音樂といふ意味にも用ひます。

【おのおの心入れたまふ】(其座ニ列ツタ人々ハ各〻心ヲ入レテ熱心ニ笛ヲ吹イタリ、琴ヲ彈イタリナサレタ)

【先づ其の得手の人々に】(先ヅ夫々ノ方面ニ得意ナ人々ニ)

【琵琶は螢の兵部卿】(琵琶ハ螢ノ兵部卿ト云フ方ガ御彈キニナツタ)『螢の兵部卿』は源氏の君の御弟でありまして、螢の宮とも申します。『兵部卿』とは其宮樣の御職名であります。

【誰にこがるゝ名のゆかり】(螢トハ一體誰ニ思ヒ焦レル緣カラシテ付ケタ名デアルダラウ)『こがる』には苦だしく思ひわづらふと云ふ意味と螢が火で燒かれると云ふ意味とが含まつて居ます。

【光る君には琴のこと】(光ル源氏ノ君ハ七絃ノコトヲ)『光る君』とは光る源氏の君を云つたのです。源氏の君が餘り立派であつたので、當時の人が光源氏と稱へたと物語に書いてあります。その光るは此處では螢の緣語となつて居ます。『琴のこと』は七絃のことを云ふのであります。十三絃のを箏のことと云ひます。それで皆樣が現今御彈きになるのは十三絃ですから『箏』と云ふ字を書かねばならないのですが、今では俗に『琴』の字を書いて居ます。それですから琴曲教授と云ふよりも箏曲教授と書いた看板の方がよいのであります。序に申しますが二十五絃のことを『悉』と云ひます。

【大臣は例の大和ごと】(致仕大臣ハ何時モノ通リ大和ゴトヲ)『大臣』は致仕の大臣と云ふ人のことを云つたのです。此方は源氏の君に御元服をさせた攝政太政大臣の長子であります。大和ごとが得意であつたのです。『大和ごと』は『あづまこと』とも『和琴』とも申しまして六絃のものを云ふのであります

す。日本古代からの樂器でありまして神樂や雅樂の際には必ず用ゐられたものであります。

【上手を盡し給へばぞ】(出來得ル限リ上手ニ御彈キニナツタノデ)

【いと優にこそ聞ゆなれ】(誠ニ優美ニ聞エマスワイ)『聞ゆるなれ』ならば『聞えるのである』と云ふ意味ですが、『聞ゆなれ』ですから『聞えるわい』と云ふ意味に取られなければなりません。

●第三段　之れは賀宴の席で、或る婦人が歌つた唄と思へばよろしい。

【その十二律十三の】　これは『いとし男』のいとを導かんが爲めに置かれた詞、即ち序と云ふものであります。『その』は賀宴で奏せられて居る音樂を指したのであります。『十二律』とは支那で定めた音樂上の十二樣の調子であります。即ち壹越●斷金●平調●勝絶●下無●雙調●鳳鐘●黃鐘●鸞鏡●盤涉●神仙●上無を云ふのであります。『十三の』は箏のことの十三絃即さ一二三四五六七八九十斗爲巾を云つたのであります。

【いとし男にあひの手の】(自分ガ可愛ユク思ッテ居ル男ト合ウタ)『いとし』は可愛ゆく思ふこと、或は慕はしく戀しく思ふこと。この『いと』には勿論『絲』と云ふ意味も含ませて、十三の絲(絃)と續く樣になつて居るものであります。『あひの手』は男に逢ふ意の『あひ』から手につゞけて合の手としたのであります。『合の手』とは箏曲等で歌と歌との間に歌はないで彈くだけの所を云ふのであります。

【六段九段人目の關、越る屏風の雀繪】(幾重モアル人目ノ隔ヲ通リ抜ケテ)『六段九段』は六切目、九切目と云ふことで曲の合の手を數へる時に云ふ語であります。箏曲『松竹梅』の合の手が三段になつて居ることは皆樣も御存じでせう。然しこゝでは單に『幾重』と云ふ意味に見て置けばよろしい。『人目の關』は人の見る目が邪魔をするといふことです。男女が相逢はんとする際に、人が見て居ると邪魔になりますから、それを關所の番人に譬へたのであります。『屏風の雀繪』は雀の繪が描いてある屏風と云ふことです。賀宴の席にこんな屏風が置いてあつたので、こゝに持ち出したのでせう。

【すゞめいろ時しのぶ夜を】(夕方カラ隱レ忍ンデ居ル處ヲ)『すゞめいろ時』は夕暮とか黃昏とか云ふ意味であります。『しのぶ』は人目につかない樣に隱れて居ることです。

【君が手ごとに掛けられて】(アナタノ手練ニ掛ケラレテ)『手ごと』は手練と云ふべき處を、曲の緣語を以てかう云つたのであります。

【曲も雲井のすゐてうに】(宮中ノ翠帳ノ垂レテ居ル中デ)『雲井』は內裏とか宮中と云ふ意味ですが此處は箏の調子の雲井と云ふ意味をも含めてあります。『すゐてう』は漢字で書けば翠帳であります。翠帳とはミドリ色ノ戶帳と云ふ意味で婦人の寢間のことを云ひます。此處は宮中にある女官の部屋のことを云つたのです。又この『すゐてう』には雲井と云ふ調子が粹な調子だと云ふ意味も持たせて居る

のです。

【心の表うらなくもあかしや須磨のうらみわび】（女ガ自分ノ心中ヲ少シモ包ミカクスコト無ク男ニ打チ明カシテ、昔オ互ニ恨ミワビテ居タ時ノ事ナドヲ語ス）『心の表うらなくも』は少しも包み隠すことなくと云ふこと。表●裏は翠帳の縁語となつて居ます。『あかし』は地名の明石に『うちあける』と云ふ意味のあかしを云ひ掛けたのであります。源氏の君が須磨明石に漂浪して居たと云ふことがありますから此處に須磨●明石の地名を持ち出したのであります。『うらみわび』は戀のかなはぬのを恨んで心を苦めることです。『うらみ』のうらには須磨の浦の浦と云ふ意を含ませて居ます。

【人傳ならでその中を渡せし橋の長枕】（人傳ナラズ直接其ノ男女ガ相逢ウテ長枕ニ二人寢ヲシタ）『人傳ならで』とは人の取次でなく直接にと云ふことです。『その中を』は男女の中をと云ふことです。『渡せし橋の長枕』とは川の兩岸に橋をかけわたす樣に二人の間にかけわたした長枕と云ふことです。『長枕』とは男女二人が肩を並ならべて寢る時に用ふる長い枕を云ひます。

【早やかさゝぎに急がれて】（最早ヤ急イデ歸途ニ就カレテ）『かさゝぎ』は鵲の橋を略して云つたのであります。鵲の橋とは陰暦七月七日の夜（即ち七夕の夜）牽牛（男星）が天の川を渡つて織女（女星）の處に赴く時、鵲が翅を並べて天の川に架けると云ふ橋です。此處は男を牽牛に喩へて、鵲の橋と云

ふものを持ち出したのです。『鵲の橋に急ぐ』とは急いで歸途に就くと云ふことになります。

【わかれ車の浪がへし】（其男ハ車ニ乘ツテ歸ラウトスル）『別れ車』は將に別れようとする人の乘つて居る車の意味です。『浪がへし』は只車が返ると云ふだけの意味です。それを浪にたとへて『浪がへし』と云ふたのであります。

【かへる直衣の袖たもと】（歸ラウトスル男ノ直衣ノ袖ガ風ニ翻ル）『かへる』には『歸る』と『翻る』との意が含まつて居ます。『直衣』は昔の常服であります。これを着る時には烏帽子と指貫とを用ひます。『袖たもと』は單に袖と云ふ意に用ひて居るのであります。『たもと』は衣服の袖の垂れて袋の樣になつて居る處を云ふのですが、此處はそんなに詳しく考へるには及びませぬ。

【わりなきなかの割爪や】（親密ナル二人ノ間柄）『割爪』は琴の彈法の名でありますが、此處は語調をとゝのへる爲めに置いたので、深い意味はありません。『わりなき』は親しくして隔のないことを云ふのであります。

【みだれ亂るゝまごゝろを】（此上モナク亂レテ居ル妾ノ心ヲ）『まごゝろ』は僞なき眞實の心と云ふのが本當の意味ですが、此處は單に『心』と云ふ意に見て置けばよろしい。

【しろし召させ給はれと】（御察シ下サイマセト）此れは女が男に向つて云つた文句であります。『し

ろし召す』は『知る』の敬語であります。

【後の朝の藻塩草】(後朝ノ手紙) 『後の朝』は『きぬぎぬ』とも申しまして、男女が相會した夜の翌朝と云ふ意であります。男女が相會した翌朝には雙方から前夜の感想等を書いた手紙を出しあふと云ふことが習慣になつて居ました。筆曲を集めた本に『浪の朝』と書いてあるのがありますがこれは全然間違つて居るのです。『藻塩草』は塩を採るに用ふる海草を云ふのですが、轉じて物を書き集めると云ふ意に用ひます。此處ではそれが更に轉じて手紙と云ふ意に用ひてあります。

【かいて參らせ候かしく】書イテ差上ゲマス、カシク) 『かいて』には手紙を書く意と、海草を掻くの意とが含まつて居ます。『かしく』は皆樣の御存じの如く婦人の手紙の末尾に用ひる語で頓首とか謹言とか云ふのと同じ意味であります。

【千歳の松のみどりごに】(千歳ノ齢ヲ籠メタル芽出度キ松ノミドリノ如キ嬰兒ニ) 『松のみどり』は松の新芽のことを云ふのであります。松のみどりに嬰兒(みどりご)を云ひ掛けたのであります。

【かへる暦の女文字】(六十一年目ニハ生レタ年ト同ジ暦ニ立チ歸ルト云フガ其暦ト云フ名ノ如ク暦手デ書イタ女文字) 『かへる』には嬰兒に還ると暦が還るとの二意を持たせて居ます。『女文字』は平假名を云ひます。これに對して漢字のことを男文字と申します。『暦手』とは高麗燒(陶器)などの縁に

細かく模樣のあるものです、こゝは女文字の形容に用ひたのであります。

【取る成る開く吉日や】(暦ノ吉日ニハ取ル、成ル、開クナド云フノガアル) 『取る』とは物を手に入れること。『成る』とは事業が成就すること。『開く』とは運が開けて行く意味であります。

●第四段 祝言を述べて賀宴を終へたことを云つたのです。

【猶末廣のことぶきを】(ナホ其上ニ、末廣ク芽出度盛エル樣ニトノ祝言ヲ)

【盡せぬ春と祝しけり、つきせぬ春と祝しけり】(何時迄モ限リナク續ク春トイフ詞デ祝ヒ納メタ)

『ことぶき』は祝賀の言のことであります。

(四) 通釋

【第一段】 小松の如く生先き永き子供達の齡にひかされて、此の老軀も若返つた樣な氣持がする。私の爲にといつて年若き人々が朝早くから野原に出て若菜を摘み、それを以て私が六十一の齡を積んだことを祝つて呉れる此春は、限りなく芽出度いことであるわい。(以上源氏の心中)

【第二段】 源氏の君の六十一歳の御賀が朱雀院の六十一の御賀にならつて行はれた。其時に萬歳樂や、賀皇恩と云ふ舞樂が奏せられたのである。(元來舞と云ふものはほんの形式ばかりに衣の袖を振

るものである）比類稀なる此の御宴に於て、其座に列つた人々は各〻心を籠めて熱心に笛を吹いたり或は琴を彈いたりなされた。先づ夫々の方面に得意な人々を擧げて見ると、琵琶は螢の兵部卿と云ふ方である。此方の御名の螢と云ふのは一體誰に思ひ焦れる緣から付けたのであらうかしら。それから御主人の光源氏の君は七絃琴を御彈きなされた。致仕大臣は例の如く大和琴（和琴）をお彈きになつた。各方が出來得る限り上手に御彈きになつたので誠に優美に聞えたのである。（以上賀宴ノ有樣）

〔第三段〕 この御賀の席で或女が次のやうな意味の唄をうたつた。『自分は日比いとしき男に逢ひたい〳〵と思つて居た。處が世間の人々の眼を避ける爲に夕刻から雀の繪の書いてある屏風の中に隱れて居た處を男の手にかけられて遂に宮中の翠帳の垂れて居る中に連れて行かれた。其處で我が心の中を少しも包み隱すことなく、その男に打ち明して、お互に恨みわびて居た時の事などを語り合つた。そして今迄のやうに人傳に交つて居たのとは違つて直接に二人が相逢うて長枕に共寢をしたのである。曉近くなつたので其男は最早や歸途に就かうとして居る。（車に乘つて歸らうとする其男の袖一風に飄つて居る。）「妾と貴方とは實に親密な間柄なのです。それですから此上もなく亂れて居る妾の心中を御察し下さい。先づは後朝の御手紙を差し上げます。かしく。」と云ふ手紙を翌朝男の處へ出した。暦と云ふものは六十一年目には其人の生れた年と同じ年に返るものであるが、それと同時に亦芽

出度き意味をあらはす松のみどりにも譬ふべき嬰兒の氣分にもなるものである。其の暦と云ふ名に通ふ暦手で書いた女文字の手紙、其手紙を彼の男は手に取るや否や開いて見てくれる。此日こそ妾にとつて實に芽出たき吉き日である。』

〔第四段〕 其の女がかく歌ひ終つて尙其の上に末廣く芽出度く榮ゆる樣にとの祝言を、『壺させぬ春』と云ふ詞を以て祝ひ納めた。祝ひ納めた。

二三　江の島

（山田檢校作曲）

春すぎて、今ぞはじめの夏衣。輕き袂が浦風に、しなどの追風そよ〳〵と、福壽圓滿かぎりなき、誓の海のそれならで、干潟となればいとやすく、歩をはこぶ江の島の、繪にも及ばぬながめかな。（第一段）

水は山のかげをふくみ、山は水の心にまかす。神仙のいはや、名に聞えたる蓬萊洞、そばだつ岩根峨々として、隨緣眞如の波の聲、心も澄めるをりからに、海人の子供のそれならで、うたふ一節おもしろし。みづら結ひたる二人の稚兒が、眞砂の上におりたちて、拂ふまそでに萬代の、龜のかはらを拾ひとり、やがて四筋のことの緒かけて、彈くや調のいと妙なれば、波の響もうち合ひて、聞けば心も、空になりけり。かくて一人は雲鳥の、あやの衣の袖かへす、世に面白きその姿。暫し留めんよしもなく、もとの波間に消え失せぬ。（第二段）

げにありがたき神仙の、まさしき使の歌舞は、この世のものにあらねども、後に傳へて今の世も、昔のあとをぞとゞめける。幾千代もつきせじ、盡きせじ。この島の磯山松を吹く風、岩根によする波までも、さながら夏風樂・青海波を奏すなり。ことわりなれや名にしおふ、妙音菩薩のしらべの絃、永く傳へて富貴自在、壽命長久繁榮を、守らせたまふ御神の、ひろき惠ぞありがたき、廣きめぐみぞ有りがたき。（第三段）

（一）　解　題

これは相摸國江の島の風景の佳いこと及び、辨才天の御靈德をうたつたものであります。やはり謠曲江の島をもとにしてゐます。現今箏唄で江の島と稱するものが三種あります。最も早く作られたものには、その中に貝盡しといふ部分がありまして、その文句が非常に下品にわたるため、その部分だけを作り替へたものがあります。今一つは貝盡しといふ部分を全く省いて、その代りに他の文句を挿

入したものがあります。これが文句も一番上品でよろしいから、此處には之を解説する事に致します。

（二）物語

江の島といへば、皆さんも御承知の通り、相摸國片瀬の海岸にある島であります。さて此の島は如何して出來たかといひますと、小淘の岩から續いて居た一岬角が海水の爲に中斷されて出來たものであると、地文學者は申します。私もその邊のところだらうと思ひますが、こゝに俗間に傳はつて居る面白い話があります。今日の人々の頭腦では到底そんな事があらうとは信じられませんが、まことに壯嚴で而も優美な話ですから、この曲を解説するに當つて一寸申して置きたいと思ひます。私は如何に世の中が進歩して、一切の不思議といふものをうけ入れない樣になつても、此の樣な事は所謂傳説としていつまでも保存して置きたいと思つて居ます。

頃は人皇第廿九代欽明天皇の十三年（この時代にはまだ年號がありません）、その四月十二日といふ日の戌の時（午後八時頃）から雲霞が起つて見る〳〵中に野山を包んで了つた。これに伴つて大地が震動を始めて、この閻浮提が盡く崩壞して了ふかと思はれる程である。この凄慘な光景が繼續するこ

と十餘日、同月二十三日の辰の時（午前八時）になつて、俄然一人の天女が二人の童子を從へて出現した。と思ふと忽ち天上から磐石が落ち來り、海底からは塊砂を噴き出す。電光は閃いて波浪金龍をおどらせ、霹靂は轟いて帛を裂くやうである。凄また凄、慘また慘、世は全く修羅の巷と化したのである。すると彼方此方から夜叉・鬼神があらはれ出て、或ものは銅杵を持つて大石を打ち碎き、或ものは鐵杖を以て巨岩を裂き破り、或ものは二つの岩を押し合せ、或ものは一大巨石を峙てるといふ風で、誠に目覺ましい活動が開始された。暫くして一つの島が出來上つたかと思ふと、すぐ上天下界の神々が數多此處に御出現まし〳〵て、末永くこの島を守ることを誓はれた。前に立ち籠めて居たあの雲霞はこの神々の出現と共に消え失せて、もとの晴天白日となつた。

以上が話の概畧であります。さて此の附近一帶の地を以前から江野々々と呼んで居ましたから、それに因んで此島を江の島といふに至つたのであります。

次に此の島の鎭守の神について一言致します。先刻云ひました樣に、本島成立の際天降られた神々が皆此の島の守護神でありますが、其の中でも辨才天（最初にあらはれ給うた天女）と龍口の明神とが最も重だつた方であります。この二神は御夫婦にまし〳〵、なか〳〵御利益がありましたので、參詣する人々が絶えないといふ有樣でした。序に申して置きますが、今の江の島神社は何方樣がお祀り

してあるかといふと、多紀理姫命・市寸島姫命・多岐都姫命のお三方であります。そしてこれがそれ〴〵邊津宮(下の宮)中津宮(上の宮)奥津宮(本の宮)の三つに分祀されてあります。何れも水に縁のある女神ではありますが辨才天とは何の關係もありません。それからあの有名な岩窟のことですが、壽永元年に文覺上人が源頼朝の命をうけて辨才天をこの窟に誘請しましたから、從來は辨天窟とか窟辨天と云つて居ましたが、今では此處に大日如來が安置してあります。今なほ之を窟辨天といふは舊名を用ゐて居るのであります。

(三) 句釋

●第一段　江の島の景色のよいことを賞め稱へたのであります。

【今ぞはじめの夏衣】(今ハモウ夏ノ初ニナツテ人々ハ單衣ヲ著テ居ル)

【浦風】(海邊ヲ吹ク風)

【しなどの追風】(風ノ神ガ吹カセテ下サル順風)『しなど』は科戸と書いて、風の神のことであります。『追風』は順風のことであります。

【福壽圓滿】(幸福・壽命トヲ圓滿ニオ授ケ下サル)『福壽』の福には『しなどの風が吹く』の吹くとい

ふ意味が持せてあります。即ち掛詞になつて居ます。『あと白浪(知らず)と逃げ失せけり』『まだ踏みも見ず(文も見ず)天の橋立』なども同じ類であります。

【誓の海のそれならで】(誓ノ海トイフモノデナクテ)『誓の海』は佛が衆生を救はうとせられる御誓願の廣大甚深なのを海にたとへて言ふのであります。法華經にも『弘誓深如レ海』と書いてあります。此處の誓は辨才天が福壽を圓滿に授けて一切衆生を濟度してやらうとの有り難い誓であります。『それならで』のそれは誓の海を指して居ます。即ちそのやうな深い海といふのでなくて干潟となれば云々とつゞくのであります。

【干潟】潮ガヒイテ洲ノ出テ居ルトコロ)

【繪にも及ばぬ】(繪モ及バナイ・繪ニ畫カウト思ツテモ畫ケナイ)　これは少し不穩當な言葉であります。まともに解釋すると妙なことになつて了ひます。即ち繪にも及ばぬだから、繪よりも實際の江の島の景色の方がまづいといふ事になります。それではいけません。此處は繪も及ばぬとある筈の處です。かうすれば、繪に畫かうと思つても到底畫くことが出來ない樣なながめだといふことになつて、江の島の景色が非常によいことになります。それから『江の島の繪にも』とエといふ音が二つ重つて居る爲、口調が大へんよくなつて居ます。

●第二段　江の島に於ける昔の出來事を述べたのであります。

【水は山の云々】（水ハ山ノ影ヲウツシテ居ル）

【山は水の云々】（山ハ水ニウツツテソノ影ハ水ノユラグガマヽニ動イテ居ル）　右の二句は謠曲江島からとつたものである。

【神仙のいはや】（仙人ノ棲ム窟）　兒が淵から少し行つた處にあるあの有名な岩窟のことです。昔役の行者や文覺上人が此處に居たことがあるので神仙のいはやと稱へるのであります。

【蓬萊洞】（蓬萊ニアルヤウナ洞穴）　これも前の岩窟のことをいつたのです。『蓬萊』は支那で海中にあつて仙人の住む山だといつて居ます。だから蓬萊洞は仙人が住む洞穴といふことで、前の神仙の窟と同じ意味になります。この窟はまだこの外に龍穴・金窟などいふ名があります。

【そばだつ岩根】（高クソビエ立ツテ居ル岩）『岩根』は文字の通り岩のねもといふ意味にも用ひますが、此處はたゞ岩といふだけの意味です。

【峨々として】（ケハシクカド〳〵シテ）『峨々』は山などのカド〳〵シクソビエテキル有樣をいふのです。

【隨緣眞如の波の聲】（神佛ガ姿ヲ變ヘテ人々ヲ御救ヒ下サル樣ニモ比スベキ波ノ聲）『眞如』は本體

といふことであります。この本體が緣にしたがつて樣々に形を變じてあらはれるといふので、隨緣眞如といふのです。即ち神・佛（何れも本體）がその相手の如何によつて姿を變へて出現し、一切の衆生をお救ひ下さることであります。そこで水（本體）といふものは、大きい風（緣）が吹けば、大波を生じ、微風ならば小波を立て、風が止めば靜止して了ふ。此點がかの本體と現象との關係前に云つたことに似通つて居りますから、隨緣眞如の波とつゞけるのでありますが、こゝの隨緣眞如は殊に辨才天が色々に姿を變じて一切衆生を御濟度下さることを云つたのです。

【心も澄める】（心マデガ澄ンデ居ル）　波が澄みわたつたよい音を立てゝ居るばかりでなく人の心までが澄みわたつてゐるといふ意であります。

【海人の子供】（漁夫ノ子供）

【それならで】（海人ノ子供ガウタフ歌デハナクテ）

【みづら】（子供ノ髮ノ結ヒ方）　頭髮を眞中から兩方へわけて、耳の上で結んで置くもので、あげまきとも云ひます。

【拂ふまそで】（袖ヲヒルガヘシツヽ）『まそで』はたゞ袖といふことであります。このまは物をほめて云ふ時に用ふる接頭語で他に深い意味はありません。『ますみのかゞみ』などといふも同じ類であり

ます。（佛敎の上で、天人が天降つて大きな石を衣の袖ではらふと云ふことを申します。こゝもそれから思ひ付いて『はらふまそで』といつたのでせう）。

【萬代の龜】（カメ）『萬代の』は、龜は萬年も生きるといふ處から、龜といふ語の上に冠らせただけで深い意味はありません。

【龜のかはら】（龜ノ甲）

【四筋のことの緒】（琵琶ノ絃）『四筋の琴』とは琵琶のことです。

【彈くや調のいと妙なれば】（琵琶ヲヒク音ガマコトニヨイノデ）『妙』とはすぐれてよいことであります。

【心も空になりけり】（心モウツトリシテシマツタ）あまり琵琶の音がよいので、それに聞きほれたことであります。

【うち合ひて】（琵琶ノ音ト波ノ響トガヨク合ツテ）

【雲鳥のあやの衣】（雲ト鶴トノ模樣ヲ織リ出シタ衣）『あや』は即ち綾で、模樣を織り出した絹のことをいひます。

【暫し留めんよしもなく】（暫クノ間サヘ留メル方法モナク）これは百人一首の中にある『天つ風雲

のかよひ路吹きとぢよ、乙女の姿しばしとゞめん』といふのと同じ思想です。

●第三段　稚兒の歌舞に深く感心したことを述べ、延いては辨才天の御德をほめたゝへたのであります。

【げに】（マコトニ）

【神仙のまさしき使】（間違ナク辨才天ガ遣ハサレタ御使）『神仙』は此處では辨才天のことを云つて居ます。『まさしき』はタダシキとか本當ノとかいふ意味です。

【昔のあとをぞとゞめける】（其ノ當時ノモノガ今モ殘ツテ居ル）昔の跡を殘した即ち辨才天からの御使の者（二人の稚兒）の歌や舞は今も殘つて存在して居るといふことです。更にいひかへれば、今現に存在して居る夏風樂（かふうらく）・青海波（せいがいは）などの舞はあの二人の稚兒の形見だといふことです。

【幾千代もつきせじ】（稚兒ノ形見タル歌舞ハ末永ク此ノ世ニ傳ハツテ無クナルコトガナイダラウ）『じ』は文法上打消の推量といふものでありまして、ナイダラウとかアルマイといふ意味であります。

【磯山松】（海岸ノ小高イ處ニ生エテ居ル松）『磯』は石の多い海濱のことをいふのですが、此處はたゞ海岸といふ意味に見て置くがよろしい。『磯山』といへば海岸にある山です。

【岩根】（岩ノスソ）岩の根元といふこと。

【さながら】、アダカモ・丁度）

【夏風樂】（舞樂の曲名）　春庭樂とも和風長壽樂とも申します。古は皇太子がお立ちになる時に、此の舞をまはせられたといふことですが、後には春季皇室で行はれる宴會に用ひられる樣になつて居ます。

【青海波】（舞樂ノ曲名）　龍宮の曲とも申しまして、舞人の服に波の模樣が染め出してあります。源氏物語にも此の舞の事が出て居ます。

【ことわりなれや】、尤モナコトデアルワイ・ワケノアルコトダワイ）　この『や』は感動の助詞でありまして俗語のワイに當ります。

【名にしおふ】（名ニソムカナイ）　妙音菩薩といふ名にそむかず、妙なる音を出すといふ意であります。在原業平の歌に『名にしおはゞいざこと問はん都鳥、わが思ふ人はありやなしやと』といふのがありますが、これも『都鳥といふ名にそむかず都の事を知つて居るならば云々』といふ意であります。

【妙音菩薩】（菩薩ノ名）　文字の如く妙音を出される菩薩で、女の姿をして居られます。然し此處は妙音樂天即ち辨才天のことを云つて居るのです。菩薩といふのは佛樣の次に位する方です。即ち今一歩進めば佛になると云ふ方です。これには大分澤山ありまして、觀音菩薩・文殊菩薩・普賢菩薩・妙

德菩薩・勢至菩薩・神通華菩薩など、數へるに遑がありません。

【しらべの絃】（辨才天ノ彈キタマフ琵琶ノイト）　この『絃』は次の『永く』といふ語の序になつて居ます。

【富貴自在】（富貴ヲ自在ニ得ルヤウニ）

【壽命長久】（壽命ガ長久デアルヤウニ）

【繁榮】（家門ガ繁榮スルヤウニ）

【御神の廣き惠】（辨才天ノ廣イ惠）

（四）　通　釋

〔第一段〕　百花爛漫の春も何時しか過ぎ去つて今はもう夏の初になつた。人々は皆夏衣を著て居る。そして科戸の神の送りたまふ追手の風がそよ〳〵と心地よげに、輕い單衣の袂を吹く。さて福壽が圓滿にお授け下さる江の島辨才天の御誓は海のやうに限なく深いものである。そんな深い海といふのではなくて、この江の島の海が干潟になると歩いてわたることが出來る。この江の島はそれは〳〵景色が佳くて到底繪にかきあらはすことは出來ない。

〔第二段〕見渡せば、碧の水は峨々たる岩山の影を映し、そして水に映つて居る山の影は水の搖ぐがまゝに動いて居る。まことに靜かで長閑な景色である。この島には嘗て神仙が住んで居たといふ岩窟があるが、それは別名を蓬萊洞とも云つて居る。この邊には岩石が高く聳え、その麓には、辨才天が姿を變へて人々をお救ひ下さる狀にも比すべき波が、まことに心地よき音を立てゝ打寄せて居る。こんなに佳い景色を眺めると、見る人の心までが澄み渡るのである。たま〳〵節面白く聞えて來るものがある。一體何の聲だらう。場所柄から考へると、漁夫の子供等の歌聲ででもありさうだが、これはその樣なものでなく、髪をみづらに結つた二人の稚兒の歌であつた。さてその稚兒といふのは、最初波間から現れ出て、白い眞砂の上に降り立つた。と思ふとその中の一人が袖をひるがへしつゝ、龜の甲を拾ひあげ、それに四筋の緒をかけて、一面の琵琶を作つたのである。そして早速それを彈き始めたところが、その音が餘りよいので、打寄せる波までがそれに聲を合せてゐる。これを聞いて居ると、心を奪はれてうつとりして了ふ。かやうに一人が琵琶を彈いて居る間に、今一人の稚兒は雲に鶴の模樣を織り出した衣の袖をフワリ〳〵と風に飜して舞ひ始めた。その面白い舞姿、暫く止めて見たくは思つたけれども、その術もなく、二人の稚兒はもとの波間に消え失せて了つた。

〔第三段〕あゝ實に有りがたい。あれは確に辨才天よりの御使である。その二人の稚兒の歌や舞は、

人間界のものではないが、それが後々の世に傳はつて今に殘つて居る。（夏風樂・青海波等がそれである。）その歌舞といふものは、行く末永く傳はつて、決して絶えることはあるまい。此の江の島には往昔かやうに優雅なことがあつたものだから、海邊の山に生えて居る松を吹く風、岩の裾に打ち寄せる波までが、恰も夏風樂だの、青海波だのを奏して居る樣に思はれる。かの辨才天が妙音菩薩と賞め稱へられ給ふは、誠に無理もないことだわい。あんなに妙なる調を後の世永〳〵お傳へになつたのだもの。そして人々が富貴を自在に得るやうに、壽命が長久であるやうに、また家門が繁榮するやうにお守り下さるこの辨才天の廣大な御惠は實に有りがたいものだ。あゝ實にありがたい。

二四　那須野

梟松桂の枝に鳴きつれ、蘭菊の花に隱るゝ野狐の臥床。　虫の聲さへ分ちなく、荻吹き送る夜あらしに、いと物凄き景色かな。(第一段)

野邊の狐火おもひに燃ゆる、もゆる思に焦れて出でし玉藻の前。　萩の下露いとひなく、月にそむけて恨み言。(第二段)

過ぎし雲井にありし時、君が情にいく年も、比翼の床に鴛鴦の、衾かさねて契りしことも、胸に暫しも忘れはやらで、ひとり涙にかこち草。　ぬれてしをるゝ袖の雨。(第三段)

抑われこそは、天竺にて班足太子の塚の神、唐土にては褒似と呼ばれ、日の本にては鳥羽の帝に宮仕へ、玉藻の前となりたるなり。　清涼殿の御遊の時、月まだ出でぬ宵の空、砂吹きこし風もつれ、燈消えし其時に、わが身より光を放ちて照すにぞ、君は御惱となりたまふ。　桐の一葉に秋たちて、昨日にかはる飛鳥川、今は浮世をかくれ笠。　都をあとに見なしつゝ、關の白川よそになし、那須野の原に住みなれて、遂に矢先にはかなくも、かゝる此の身ぞつらかりき。　殺生石と人の世に、疎まるゝ事となりはてし。(第四段)

涙の霰荻すすき、振り亂したるありさまに、消えてはかなくなりにけり。(第五段)

(一)　解題

この唄は謠曲の殺生石の筋を取つて作つたものであります。謠曲では、鳥羽上皇の寵妃玉藻の前が安倍泰成に祈り伏せられ、野狐の本性を現はして、下野國那須野に飛び去つたが、三浦の介・上總の介の爲めに射殺された。そこで其の怨念が石に化して、是に觸れる者を立ち所に殺したが、源翁といふ僧の引導によつて、遂に成佛したといふことになつて居ます。但し箏唄の方では、玉藻の前の靈が現はれて、過去の榮花を述べ、今の不幸を喞ち歎くことになつて居ます。この事件が那須野を舞臺として演ぜられたのですから、その地名を取つて『那須野』と題したのであります。

（二）物語

昔印度に班足王といふ王があつた。其夫人は惡虐甚だしく、人の生命を取る事を以て無上の快樂として居た。それで或時王に勸めて千人の首を斬らせた事さへあつた。其後この夫人が生れ變り、周の幽王の后となつて支那に出現した。これが世に名も高い褒似である。その容貌が頗る美であつたので人を惑はし、遂には國を滅ぼさせるに至つたのである。

此の女は死後また生れ變つて我國に來り、鳥羽天皇に宮仕して、名を玉藻の前といつた。幾度生を變へても美人は美人、花の顏、月の眉てふ言の葉も、その容貌をあらはすには不充分である。夜な夜な河畔にあらはれては、舟人を惑はせて身命を失はせたラインの妖姫も、この美には到底及ぶまいと思はれる。從つて帝の御寵愛殊に深く、三千の寵愛を一身に集めたといつても、過言ではない。然しこの美人の顏面には何となく陰氣な氣分、寧ろ凄味がたゞよつてゐた。一體眞の美人といふものには多少こんな趣はあるものだが、玉藻の前にはそれが特に著しく感ぜられたのである。

平安朝といふ時代は極めて優美な時代であつた。當時の人々は智よりも寧ろ情に生きて居た。從つて遊戯の如きも上品な管絃が最もよく行はれて居る。武人も弓矢を取ることよりも笛を吹く技を重んじた。宮中に於いてもこの遊はよく行はれたものである。一夜鳥羽の帝も清涼殿においてこの管絃の遊をせられたことがある。玉藻の前もその座に連つて居た。それは十八九日頃であつたらう、月の出がおそく、それに空がいくらか曇つて居たから、外は眞暗で鼻をつまゝれても解らない。それに時々冷やかな風が頰を撫でゝ、本當に薄氣味の惡い晩であつた。その中に一陣やゝ强い風が吹いて來て、燭が消えたかと思ふと、玉藻の身から御光がさして四邊を照した。これは不思議なこともあるものかな、何か凶事の前兆ではないかと一同が心配をして居たが、間もなく帝は御惱にかゝらせられて、病の床に就かるゝ御身となられた。こは一大事と早速占者をよんで卜はせられたら、明に玉藻の前のしわざであるといふことがわかつた。

時に玉藻は何れにか姿を隱して見えなかつた。見當れば生かして置かぬぞと、洛中は勿論、近傍の國々を搜索させられたけれども見當らない。もうこの日本國中には居ないのだらうと斷念して了はれた。

それから數ヶ月といふものは玉藻の行方がわからずに過ぎたが、何時しか桐の一葉に秋は來た。その頃になつて誰云ふとなく、風の便に玉藻の前は狐と化して東國に住んで居るといふことが知れた。朝廷は三浦介義明、千葉介常胤、上總權介廣常の三人に命じて、早速彼を退治させることになされた。この三人は命を奉じて直樣退治に着手したが、神變不思議の狐のこととて容易に功を奏しない。遂ひ

逐つて終に下野の國那須野が原に來た。

那須野が原といつてもなか〳〵廣いから、何處にその狐が潜んで居るかわからない。狩裝束の三名は、幾多の武夫と諸共に、丈にも餘る草押し分けて片端から搜索し始めた。四方八方殘る隈なく尋ねたけれども、件の狐は影さへ見せぬ。一夜を明して鳴聲なりとも聞かんとて、耳を澄して居てもそれらしいものは聞えない。聞えるものは枯草にそよぐ蕭々たる秋風の音と、松桂の枝に鳴く梟の聲ばかり。次の日は討手の勢も搜しあぐんで、策の出し樣もなくたゞ茫然、野狐退治も早や斷念と覺悟をきめて、歸途に就くべく駒の蹄を向け直した。時しもあれ何方よりか一匹の大狐現はれ出て、討手の前を走り過ぎた。これを目擊した一同の顏には紅の血がさつと漲つた。そら來たといふので早速弓に矢を交へて、散々に射たけれども、矢よりも狐の位置を轉ずる方が迅速である。左を射れば右にあり、前を狙へば後に居る。神力自在のこの狐は、到底討手に征服されさうもない。あまりの不思議さに此方も薄氣味惡くなつて來たので、いよ〳〵退却することにした。

退却はしたものゝまだ未練が殘つて全く思ひ切つて了ふことは出來ない。一同首を鳩めて談議に及んだが、容易に名案も出ない。もう人間の力では到底退治が出來ないと悟つて、義明、廣常の兩名は、當時靈驗あらたかであつた、相州箱根若宮八幡に參籠して、斯念することにした。すると或夜夢の御

告げに『野狐は犬に似て居るから、百日間犬を以て射術の練習をせよ』とあつた。(序ですが、是れが鎌倉時代からよく行はれた犬追物といふ遊戯の始原であるさうです)そこで彼等は八幡宮の御告げに從つて百日稽古を行ひ、それが濟むや否や再び那須野が原に向つた。おのれ憎つくき野狐め、今度こそはと勇み立つた雄々しき姿には、流石の老狐も聊か辟易したことだらう。かくて義明が引き固めて放つた一矢命中して、あはれ命を徒らに、なす野の露と消えて了つた。

その後百年餘經つて狐の怨靈が化して一個の怪石となつた。そして一度其の石に觸れば禽獸はおろか人類までが皆生命を失ふ。それで世人はこれを殺生石と云つて大層恐れて居た。嗚呼如何なる怨みがあつてかくまでこの世に祟るのであらう。

高僧太徹この怪を止めようとして色々苦心したが、更にその効を奏しなかつた。其後相州海藏寺の開祖源翁といふ僧が、後深草天皇の御詔で此怪を止むべく那須野が原に赴いた。すると、こはそも如何に、石の左右には白骨髑髏が山の樣に積つて居る。源翁これを見て思ふやう『木石には心ないとはいふけれども、草木國土悉皆成佛といふ處を見ると、やはり佛體を具足して居るのだ。況して衣鉢を授けたならば、成佛することは疑ない』と。乃ち花を手向けて燒香し、石面に向つて佛事を行つた。

『汝元來殺生石。問ふ石靈。何れの所より來り、今生かくの如くなる。急々に去れ〳〵。自今以後

汝を成佛せしめ、佛體眞如の善心となさん。西方淨土の御佛達、早々御引取りあれかし。』と偈を唱ふれば其の石が忽ち二つに割れて了つた。其夜源翁の前に一女子出現して『妾は、汝の淨戒によつて天國に生る』と云ひ畢るや否や件の女子は烟の如くに消え失せた。此から翁の名聲が都にも鄙にも響き渡つたといふことである。これが世に名も高き殺生石のいはれである。

（注意）前文を讀んでおわかりになつた通り、此の唄は非常に凄味をもつたものですから、眷たお彈きになる時もその積りでなさらんことを希望します。

（三）句釋

●第一段　先づ凄涼たる那須野の光景を述べて、玉藻前の怨靈の出現すべき背景としたのであります。

【梟松桂の枝に鳴きつれ云々】（木ノ枝ニハ梟ガ數多鳴キ、草ノ蔭ニハ野狐ノ寢處ガアル）『梟』は人里離れた處に棲み、その鳴聲も極めて淋しく物凄いものであります。『松桂』は松と桂といふことですが、こゝは樹木の代表として用ひたのです、『蘭菊』は蘭と菊ですが、此處は草の代表として用ひたのです。『狐』は人家のない野山に住み、夜間出でて、人を誑すといふ一癖ある奴であります。『臥床』は

ネドコであります。○此の句は白樂天の凶宅の詩に、「梟ニ鳴松桂枝ニ、狐藏ニ蘭菊叢ニ」とあるのを取つたのです。

【虫の聲さへ分ちなく】（秋虫マデガ澤山鳴イテ其ノ聲ヲバ聞キ分ケルコトガ出來ナイ程デ）松虫●鈴虫●轡虫などの秋虫が數多鳴き亂れて、此は何虫の聲と聞き分けることが出來ないといふ意であります。

【荻吹き送る夜あらしに】（荻ノ上ヲ吹キワタル夜風ノタメニ）『荻』は多く水邊に生ずる草で、莖は蘆に似て、花と葉は茅に似て居ます。そして、その上を風が吹き渡ると、隨分淋しい音を立てます。

【いと物凄き景色かな】（マコトニ物スゴイ景色ダワイ）『かな』は感動詞でありまして、口語のワイにあたります。

此の一段の取材は皆陰氣な物凄いものばかりで、玉藻の前の幽靈を出現させるに甚だ適はしくあります。

●第二段　玉藻の前が怨の一念壓へがたく、幽魂再び此の世に現はれ出たことを述べたのです。

【野邊の狐火】（野中ニアラハレル青イ火）『狐火』とは狐が口から吐くといはれて居る青い火のことですが、燐火だらうといふ說です。

【思に燃ゆる】(切ナル思ノタメニ燃エル)『おもひ』のひを火に見立てゝ、燃ゆると云つたのであります。

【燃ゆる思に焦れて出でし玉藻の前】(燃ユルガ如キ切ナル思ノタメニ、落チ付イテ居ラレナイデ姿ヲアラハシタ玉藻ノ前)『玉藻の前』は鳥羽上皇の寵妃であります。詳しいことは物語の部に出て居ます。かう云ふ場合の前は貴婦人の名に添へる一種の尊稱であります。御前の御の字を添へる場合もあります。巴御前・常磐御前などの例であります。

【萩の下露いとひなく】(萩ノ下露ニヌレルノヲモ厭ハズニ)『下露』とは枝葉から下にしたゝり落ちる露のことです。

【月にそむけて】(月ニ顔ヲソムケテ) 月に背を向けることです。

【恨み言】(恨メシト心ノ中ヲ語ル)『恨み言』の下に『言ふ』とか『語る』とか補つて意味をとりなさい。

●第三段 玉藻の前が嘗て鳥羽上皇に近侍して、寵愛をうけた當時を思ひ出して、涙に袖を濡す狀を言つたのであります。

【過ぎし雲井にありし時】(昔宮中ニオ仕ヘ申シテ居タ時)『雲井』は雲居の義で、雲ノアル處即ちソラといふ意味でありますが、轉じて宮中・御所といふ意に用ひます。此の一句は玉藻の前が鳥羽上皇の妃として宮中に仕へて居た時の事を言つたのです。

【君が情に】(鳥羽上皇ノ御寵愛ヲウケテ)

【比翼の床に鴛鴦の衾かさねて】(一室ニ床ヲナラベテ夫婦ノ仲睦シク)『比翼』は翼をならべる意。支那の傳說に、比翼の鳥といふものがあります。それは雌雄共に一目一翼で、常に雌雄が一體となつて飛ぶといふことです。それで夫婦仲のよいことを比翼の鳥と申します。『鴛鴦』はヲシドリであります。この鳥は雌雄常に相伴つて居るといふ所から、よく夫婦仲のよい喩に引かれます。『衾』は即ち今の夜具であります。

【契りしことも】(約束シタコトモ) 行末永く變らじと約束したことをいふのであります。

【かこち草】(愚痴ノ種デアル)『かこつ』はワビゴトヲ言フ・愚痴ヲ言フなどの意であります。『草』は本となるもの、即ちタネといふ意です。

【濡れてしをるゝ袖の雨】(袖ガ涙ニ濡レテシヲレル) 涙を雨に見立てゝ『袖の雨』といつたのです。

●第四段 玉藻の前の幽靈が自己の經歷を物語るところであります。

【抑】(一體) 事物の由來を說き起す時、冒頭に用ひる語です。

【天竺】(印度)

【班足太子】(天竺天羅國王ノ子)　玉藻の前は此の王子の夫人として、惡虚を極めたのであります。

【塚の神】(墓神ヲ祭ラセタ)　班足太子は頗る殘忍な人で、外道の言を信じ、千人の頭を取つて塚の神を祭り、その報によつて王位に登らうとしたのであります。この唄では玉藻の前が班足太子に說き勸めてそれを爲させたやうになつて居ます。

【唐土】(支那)

【褒似】(周ノ幽王ノ寵妃)　幽王が褒似の笑顏を見ようと思つて、事もないのに數〻烽火を擧げました。或時敵が周室に攻め寄せた時、幽王は烽火を擧げましたけれども、諸侯はまた例の僞であらうと思つて、一人も駈け付ける者がありませんでした。かくて周は遂に攻め亡ぼされてしまつたのであります。だから間接には玉藻の前が周を亡ぼしたと云へませう。

【日の本】(日本國)

【鳥羽の帝】(第七十四代ノ天皇)

【清涼殿】(陛下ガ常ニ起居アラセラレル御殿)　宮中の正殿たる紫宸殿の西北にあつて、古くはセイロウデンと讀みました。天皇の常の御在所で、晝御座・夜御殿・臺盤所・朝餉間などに分れて居ま

す。延喜の昔菅公が九月九日の夜、「去年今夜侍二清涼一」の詩を作つたのも此の御殿であります。

【御遊】(管絃ノ御遊)　詳しくは八四頁を見て下さい。

【月まだ出でぬ宵の空】(月ノマダ出ナイ宵闇ノ空)　陰曆二十日頃の夜であつたでせう。

【砂吹きこし風もつれ】(風ガ吹キモツレテ細砂ヲ送リ來リ)　『いさご』は細い砂のこと。『もつる』は一定の方向に吹くのではなく、渦を卷いて吹くことを云つたのです。

【御惱】(御ナヤミ)　御病氣のことです。

【桐の一葉に秋たちて】(桐ノ葉ガ散リ初メテ秋トナツテ)　落葉樹の中で桐の葉が最も早く散るといふ所から、『桐の一葉に秋立ちて』『一葉落ちて天下の秋を知る』『梧桐葉上秋先到』などと云ふのであります。此處では我が身の寵幸が衰へたと云ふ意をも含めて居ます。

【昨日に變る飛鳥川】(昨日ノ榮華ニ引キカヘテ今日ハ零落シテ了ツタ)　『飛鳥川』は大和國にある川で、淵瀨が變り易いといふ所から、よく變り易いものゝ喩に引かれます。古今集に、『世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀨となる』といふ歌が出て居ます。

【今は浮世をかくれ笠】(今ハ人間界ノモノデハナクナツタ)　『浮世』は定めなき世といふ意で、此の世のことをいひます。『浮世を隱れ』を『隱れ笠』といふ名に言ひ掛けたのであります。『かくれ笠』は自

分の顔をかくす笠であります。

【都をあとに見なしつゝ】（京都ヲ去ッテ）

【關の白河よそになし】（白河ノ關ヲヨソ目ニ見テ）『關の白河』は即ち白河の關です。栃木縣と福島縣との境にあります。能因法師の歌に『都をば霞と共にたちしかど、秋風ぞ吹く白河の關』といつてあります。『よそになす』は其處には行かず遠クカラ眺メテ通ルといふ意です。

【那須野】（栃木縣ニアル野原）

【つひに矢先にはかなくもかゝる此の身】（遂ニ人ノ射タ矢ニカヽッテ、モロクモカヤウニナッタ此ノ身）『矢先』は矢の先、即ちヤジリといふ意味です。『矢先に罹る』は『斯かる此の身』に言ひ掛けてあります。『はかなくも』はモロクモといふ意。

【殺生石】（生物ヲ殺ス石）鳥や虫がそれに觸れると直に死ぬといふ所から、この名がついたのです。今那須温泉の附近にその遺跡があります。思ふにこれは其の石の附近から、一種の毒瓦斯が噴出して、其處に近づいたものがそれに中毒して死んだのでありませう。

【蝕まるゝ】（遠ザケラレル・イヤガラレル）

【なりはてし】（ナッテシマッタ）

●第五段　玉藻の前が述懐を終へて再び原頭に消え失せたところを述べたのであります。

【涙の霰】（涙ガ霰ノヤウニコボレ）

【荻すゝき振り亂したる有樣】（荻ヤ薄ガ風ニ亂レタヤウニ、髪ヲ振リ亂シタ有樣ヲシテ）玉藻の前の物凄い姿をいつたのであります。

（四）　通釋

【第一段】　木の枝には梟が數多鳴き連れ、草の蔭には野狐が隠れ潜んで居る。其の上秋虫さへが澤山鳴いて、其の聲をば聞き分けることが出來ない程である。四邊一面に生えて居る荻の葉の上を夜嵐が吹き渡る。あゝまことに物凄い景色であるわい。

【第二段】　この凄凉たる那須野邊の彼方に青い狐火が見える。これは切なる思の爲に燃えて居るのであらう。その燃ゆる思の爲に、落ち付いて居られず、遂に現れ出た女の姿、それは玉藻の前である。彼は荻の下露で衣の裾が濡れるのをも厭はず、月に背いて叢の中に立つて恨言を云ひ始めた。

【第三段】　彼が嘗て宮仕をして居た頃には、鳥羽上皇の御寵愛を蒙つて、夫婦の仲極めて睦しく、行末永く變らじとお約束申したのであつた。彼は暫時もそれを胸に忘れた事がなく、今涙を流して獨

り悲痴をこぼして居る。そして其の涙の雨は何時しか彼の袖を濡らして居た。

〔第四段〕　そも妾は印度に於いては、班足太子の夫人と仰がれて、塚の神を祭らせたのである。それから支那に來ては、周の幽王の妃となつて褒似と呼ばれ、日本へ渡つては、鳥羽天皇に宮仕して玉藻の前となつたのである。嘗て清涼殿で管絃の御遊が催された時、月は未だ出ない宵闇の空であつたが、忽然砂を吹き卷いて一陣の風が起り、あたりの燈火が全部消えて了つた。その際、妾が身體から光が射して四邊を照した。すると俄に鳥羽上皇が御病氣にお罹り遊ばされた。桐の一葉が落ちて秋となると共に、妾が身の上にも秋が來た。昨日の榮華に引きかへて今日は早や零落といふ運命に立ち至つた。その轉變の急なること、飛鳥川の淵瀬にも比すべきである。此の世を去つて、隱れ場所を索めねばならなかつた。そこで妾は隱れ笠をかぶつて花の都を立ち出で、奥州白河の關をよそに見て、那須野が原に住むことになつた。そして其處に暫く住み馴れたのであるが、遂に三浦介・上總介などといふ人の矢先に罹つて、はかなくも倒れ、かやうな淺間しい身となつたが、其時は實につらかつた。そして殺生石殺生石といつて世間の人からは遠ざけられる事となつたのである。

〔第五段〕　玉藻の前はかやうに物語つたが、兩眼からは霰のやうに涙がこぼれた。そして、其の髪が丁度荻か薄の風に亂れたやうな狀になつたかと思ふと、早や妾は消えて跡形もなかつた。

二五　千里の梅

常住に、吹かせてしがな、家の風。世を經て仰ぐ文の道。廣き惠を思ふ、その心づくしや。（第一段）

千里まで、香ひおこせし梅の花。心をそむる一枝を、ただ其の儘の手向にて、香も神のまに〳〵と、ゆくての袖もにほふまで、思をはこぶおとひ河。水のそこひも深みどり、掬ぶ手に吹く春風は。（第二段）

けふ衣更の神業に、よるの鼓の澄みのぼる、眞如の月もところがら、和光の影もいさぎよし。塵も和ぐ御德は、世々經て絶ゑじ四方の民、慕ひまつれや苅萱の、關守る人もあらばこそ。（第三段）

神の情は深き夜の、暗にもしるき梅が香。そも此花は萬木に、魁してかばかりの、形色香の花なければ、自ら御神も、めでさせ給ひ花もまた、心ありけり飛

び通ひ、主忘れぬ勳を、知る人ぞ知る。（第四段）

言の葉の、繁き林にとりそへて、君が千歳を護るなる、君が千とせをまもるなる、梅の香やあめに滿つらむ。（第五段）

（一）解題

此れは太宰府の飛梅によそへて天滿宮の神德を謠つたものであります。其梅が二月廿五日天滿宮の御祭禮の折に、京都から千里の外なる太宰府さで飛んで行つたと云ふ事によつて、千里の梅と題したのであります。

飛梅について茲に一言申上げて置きませう。人皇第六十代醍醐天皇の御時、藤原時平が左大臣菅原道眞公が右大臣となつて大政に參與して居られました。處が天皇は平がまだお若かつたのでこの左右大臣に政治を一任しておいでになりました。當時左大

臣は二十八九歳、右大臣は五十七八歳。右大臣は學問も人に勝れ御性質も格別御賢明であつたのに、左大臣は御年も若く學問もずつとお劣りになつて居ましたから、天皇の御寵愛が自然右大臣の方に傾いたのを左大臣は大層不平に思はれた。それで時平公は天皇に『道眞は非常な野心を持つて居ますから除りに彼を御信任なさつては御爲になりますまい。今の中に適當な御處置をなさつたが宜しう御座います』と讒言を申上げた。處が此讒言が見事効を奏して哀にも道實公は昌泰四年正月二十五日、太宰權帥となつて九州にお流されになりました。そして其御子達も一人殘さず彼方此方にお流されになりました。

道眞公が愈々京都の御宅を立たれる時、日頃御愛しになつて居た御庭の梅を御覽になつて轉た感慨の情に堪へられなかつたのでありませう、一首の歌をお詠になりました。これは皆さんも御承知の事と思ひます。

東風ふかば香起せよ梅の花　あるじなしとて春な忘れそ。

此歌を殘して公は配所に赴かれましたが御氣の毒な事にとう〳〵彼の地で御薨去になりました。そして太宰府に天滿宮としてお祀られになりました。すると、或年の二月二十五日此天滿宮の御祭禮の夜不思議な事には彼の京都の御庭にある梅が一夜の中に飛んで行つて天滿宮の社前に根を下したので

あります。これが有名な飛梅と云ふものださうです。其時御邸宅の御庭に櫻の木もあつたのですが、之れには何の御言葉も御下しにならなかつたので枯れて了つたと云ふ事です。源順朝臣の歌に

梅は飛び櫻は枯れぬ菅原や　深くぞたのむ神のちかひを。

とあるのは即ちこのことです。

此曲も物語としてはこれ以外に云ふ事がありませんから、直に評釋にかゝります。

（二）　句　釋

●第一段　菅公の生母の理想と菅公の學德とを敬慕した處であります。

【常住に吹かせてしがな家の風】（菅原家ノ學風ヲ永久ニ吹カセタイモノデアル）　これは菅公の生母が菅公の元服の祝の夜に詠ぜられた『久方の月の桂も折るばかり、家の風をも吹かせてしがな』と云ふ歌の文句を取つたものであります。歌の意味は、月の中にあると云ふ桂の枝も折れる程我が家の學風を天上迄も吹き通はせたいものであると云ふことで我が子の成業を祈つた歌であります。『常住』は永久にとか何時までもと云ふこと。『吹かせてしがな』は吹かせたいものであると云ふことです。

【世を經て仰ぐ文の道】（數多ノ年月ヲ經テモ仰ギタフトブ學問ノ道）

【廣き惠を思ふ】（菅公ノ此世ニ及ボサレタ廣大ナ御惠ヲ思ヘバ）

【その心づくしや】（菅公御在世ノ頃ノ御心盡シヲ今更ニ忍ビ奉ルノデアル）『心づくし』とは苦心と云ふことであります。そして此心づくしのつくしには筑紫（九州）と云ふ意味をも持せて居ます。此筑紫が次のちさと云々に續いて行くのです。

●第二段　此處で初めて千里の梅を出し、此梅を立樹の儘で手向の幣帛の代りとして、天滿宮に廣、參詣すると云ふことを云つたのであります。

【千里まで香ひおこせし梅の花】（京都カラ千里モ隔タツタ筑紫マデ薫ツテ來タ梅ノ花）　これは道眞公が配所に赴かれる時、庭上の梅を御覽じて『東風ふかば香ひおこせよ梅の花、主なしとて春な忘れそ』と詠せられた歌の文句を取つたのです。歌の意は『春の東風が吹く頃となつたら、あの芳しい香を我が配所なる筑紫までも薫らせよ、主人が留守だと云つて春を忘れるな』と云ふのです。處が此歌を文字通りに解釋して、梅の枝が何でも筑紫まで香つて行かねばならぬと思つて、太宰府まで飛んだとやつたので、所謂飛梅の傳說が起つたのであります。

【心を染むる一枝を】（心ニ泌ム位美シイ一枝ヲ）

【たゞその儘の手向にて】（手折ラズシテ立樹ノ儘デ御供シテ）

【かをりも神のまにまにと】（清キ香モ神ノ御心ノマヽニ御賞翫下サイト）これは道眞公の『此の度は幣も取りあへず手向山、紅葉の錦神のまに〳〵』の文句を取つたのであります。『手向』とは神佛に物をそなへることです。

【行く手の袖もにほふまで】（歩キ行ク我ガ袖ガ梅ノ香ニ染ミテ香ルマデ）屢、梅花の下を往來する事を云つたのです。これは新拾遺集の『梅が香に行くての袖のにほふまで、山分衣春風ぞ吹く』と云ふ歌の詞であります。『ゆくての袖』は歩き行く人の袖と云ふ意味です。

【思ひをはこぶおとひ河】（オトヒ川ヲ渉リツヽ祈念ノ心ヲ運ブ）『おとひ河』は何處にあるか不明であります。もし實際ありとすれば太宰府神社の近傍にあるとせねばなりません。私が考へますに、とも・は平假名では甚だよく似て居りますから『おもひ河』とあつたのを何時の間にか間違つて『おとひ河』と云ふ樣になつたのだらうと思ひます。『おもひ河』とすれば前後の續き工合も大へんよくなつて來ます。そして『おもひ河』と云ふ河ならば太宰府天滿宮の近傍にあります。それで私は『おとひ河』は『おもひ河』の讀み違ひであると斷言することを憚りません。

【水のそこひも深みどり】（其河ハ河ノ底モ深ク又滿フル水モ深キ綠色ヲ呈シテ居ル）この『深』は『底』と『綠』の兩方に懸るのであります。『そこひ』は本來は『かぎり』とか『はてし』とか云ふ意味ですが

こゝでは單に底・と云ふ意味に用ゐて居ます。

【掬ぶ手に咲く春風は】（其水ヲ掬ッテ、口ヲス、ギ手ヲ洗ッテ居ルト我ガ手ニ春ノ風ガソヨ〳〵ト吹イテ來ル）　此處は『春風は』と云つて下に續く形にするよりは『春の風』と云ひ切つて了つた方が餘程よいのです。『春風は』として置くと次に之を受ける語がないのです。故佐々醒雪氏は春風・は・と云ふ語をけふきさらぎのふきに云ひ掛けたものかと思ふ。頗る無理な言掛けではあるが、其外には讀方が無からう』と云つて居られますがこれは少し變だと思ひます。上に一度『吹く』と云ふ語が出て居るのですからこれを再び『ふき』と云ふ詞に云ひ掛るには及びません。

前に云ひました樣に『春風は』を『春の風』と改めて了ふのがよいと思ひます。强ひて『春風は』として置かればならぬと云ふのならば此れは上に掛る詞と見るが宜しい。即ち『掬ぶ手に春風は吹く』と云ふのを倒置したものと見るのです。何れにしても春風は次の『けふきさらぎ云々』の文句には續かないものとするのであります。

●第三段　天滿宮の御祭の夜の光景、天滿宮の神德を敍して參詣を促して居ます。

【けふ衣更の神業に】（今日ハ二月十五日ノ御祭デ）二月二十五日は菅原道眞公が薨去せられた日でありまして此日を公の御祭日と定められて居るのであります。『衣更』は陰暦二月のことを云ふのであります。『神業』は御神事、即ち御祭典のことを云ふのです。

【よるの皷の澄みのぼる】（御祭ノ夜神樂ノ皷ノ音ガ高ク冴エテ空ニ澄ミノボル）この『澄みのぼる』は皷のことを云ふと同時に又次の『眞如の月』にも懸るのであります。

【眞如の月もところがら】（空ニ澄ミノボツタ月モ流石ニ神ノ御庭ダケアツテ）『眞如』とは佛教の語で一切萬有の眞實の相を云ふのであります。すべての煩惱の雲を拂ひ盡してあらはれ出づる心の本體を曇りなき月に喩へて『眞如の月』と云ひます。然し此處の『眞如の月』は曇りなき月即ち明月と云ふ程の意味です。『ところがら』とは場所柄としてと云ふ意味、即ち神聖なる天滿宮の御境内だけあつてと云ふことであります。

【和光の影もいさぎよし】（和ラカイキレイナ光デ照ラシテ居ル）『和光』は光を形容すると共に又神の御德をあらはして居るのですが、それは次の『ちりもやはらぐ』の處で一緒に說明致します。

【塵も和ぐ御德は】（身分ノ賤シイ人々ニマデ及ブ御神德ハ）『和光の影』とか『塵も和らぐ』とか云つてあるのは皆『和光同塵』と云ふ意味であります。神佛が餘りに尊嚴な形相をして居られると其の御威光に畏れて賤俗なる人間は神佛の傍によりつけない。かくては廣大無邊な神佛の御惠に漏れることになる。神佛がこれを氣遣ひ遊ばされ、御自分の尊嚴な姿を變じてこの濁惡の世の中に俗人と共に居て御救護下さるのを和光同塵と云ひます。基督が人間として此世に生れ出て來たのも矢張和光同塵

と云つてよいのでせう。それから觀音樣が可愛らしい乙女の姿となつてお顯はれになる等も皆この和光同塵です。此處は天滿宮の御神德が下賤の人達に迄及んで居ることを云つたのです。

【世々經て絕えじ】（何年經ツテモ絕エルコトハナカラウ）

【四方の民慕ひまつれや】（天下ノ人々ヨ、此ノ天滿宮ヲ慕ツテ此處ニ參詣セラレヨ）

【苅萱の關守る人もあらばこそ】（苅萱ノ關ニモ番人ガ居ナイ）これは神德を慕つて參詣する人を神は決して隔て給はぬことを苅萱の關に番人が無く何人も自由に通行出來ることに喩へたのです。『四方の民』は四方に居る人民と云ふことで天下の人々をさして云つたのです。『苅萱の關』は筑前の太宰府の南門の處で昔齋明天皇が行宮をお建てになつた時、お置きになつた關です。苅萱道心として世に名も高い加藤左衞門重氏も此附近の人であります。『あらばこそ』は『アラバ困ルダラウガ無イカラ幸ダ』と云ふ意味です。

●**第五段**　梅を褒め稱へた處であります。

【神の情けは深き夜の】（神樣ノ御情ノ深イコトハ深キ夜ノ）この『深き』は情と夜との兩方に懸つて居るのであります。

【暗にもしるき梅が香】（暗ニモ著シク香ツテ隱レルコトノナイ梅ノ香ニ比ブベキデアル）暗夜にも

梅の香が高く薫ると云ふことは昔から歌にもよく詠まれて居ます。古今集に凡河内躬恒の歌としてこんなのが出て居ます。『春の夜の暗はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ』

【そも此花は萬木に魁して】【抑此ノ梅ト云フ花ハ春ノ初メニ、他ノ總テノ花ニ先立チテ】『そも』はそもそもと同じく物事の由來を說き起す時に眞先に用ひる語です。

【かばかりの形色香の花なければ】【コレホドノ形ヤ色香ヲ供ヘタ花ハ他ニナイカラ】　これは謠曲の『梅』から取つた文句であります。此の前後特に七五調を破つて居ますがこれも謠曲のを其儘取つた所爲でせう。

【おのづから神もめでさせ給ひ】【自然ト神樣モ御賞美遊バサレ】

【花も亦心ありけり】【花モ亦情ガアツタノデアル】

【とびかよひ、主忘れぬ動を】【京都ノ菅公邸カラ此ノ太宰府マデモ飛ビ通ツテ御主人ヲ忘レナカツタソノ手柄ヲ】　飛梅が菅公の歌に感じて主人を忘れなかつたことを云つたのであります。

【知る人ぞ知る】【知ラナイ者ハ致シ方ガナイガ知ル人ハヨク知ツテキルダラウ】　此れは古今集の中にある紀友則の歌即ち『君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る』から取つたのであります。

●第五段　我國の文學界が繁榮するやうに又大御代の千代も續くやうにと御守り下さる神樣（天滿宮）の御動功を讃美した處です。

【言の葉の繁き林にとりそへて】【我國ノ文學界ヲ御守リ下サル上ニ、更ニソレニツケ加ヘテ】『言の葉の繁き林』は詞のはを木の葉に寄せて繁き林と云つたので、文學界とか學問の道とか云ふ意です。『とりそへて』は更につけ加へてと云ふ意です。

【君が千歲を護るなる】【大君ノ御代ガ千年モ續ク樣ニオ護リ下サル處ノ】

【梅の香やあめに滿つられむ】【梅ノ香ニモ比スベキ御動功ハ天滿宮ト云フ御名ノヤウニ廣イ天ニモ滿チ充ツルコトダラウ】　梅の香が天に滿つると云ふことは新古集にも『大空は梅の香に霞みつゝ、曇りも果てぬ春の夜の月』とあつて突飛な形容ではありません。此處は表面から見ますと『梅が香』が文學の道と君の御代とを守るやうですが勿論この『梅の香』は天滿宮の御動功、即ち御神德を表はして居るのであります。

（三）　通　釋

〔第一段〕　菅公の御母君が公の成業を祈つて永遠に菅原家の學風を吹かせたいと云ふ意味の和歌を

御作りになつたが、其詮あつて菅公の學問の道をば幾多の年月を經た今日も、猶仰ぎ尊んで居る。尙又菅公が此世に及ぼされた廣大なる御惠を思へば、菅公御在世の頃の御苦心が如何ばかりであつたかが察せられるのである。

〔第二段〕 さてもかの京都から千里も隔たつて居る筑紫迄飛んで行つた梅の花、其の飛梅の心に染むばかり美しい一枝を立樹の儘で御供して、清き香も神の御心の儘に御召し下さいませと、其名木の下蔭を歩み行く我が袖が梅が香に染みて香る程も往來し、おとひ河と云ふ河を渉りつゝ、この太宰府天滿宮に祈念の心を運ぶのである。其おとひ河と云ふは河底も深く、又湛ふる水も深き綠色を呈して居る。口を嗽ぎ手を洗はんため其の河邊に立つて水を掬つて居ると我が手に春風がそよ〳〵と吹いて來る。

〔第三段〕 思へば今日は二月の廿五日、此御社の御祭典である。夜に入れば御神樂の鼓の音が高く空に澄みのぼる。折しも澄み昇つた明月も流石に場所柄だけあつて和かき綺麗な光を放ちて居るが其光に自ら和光同塵と云ふ御神德があらはれて居る。この和光同塵と云つて下賤の人達をも隔て給はぬ御神德は此から先何年經つても絕えることはないであらう。天下の人達よ、此天滿宮の御神德を慕つて精々此御宮に參詣せられよ。慕つて來る人を決して隔て給はぬこと譬へば苅萱の關所に關守がないのと同じである。

〔第四段〕 此神樣の御情の深いことは深き夜の暗にも著しく香つて隱れることのない梅の香に比ぶべきであらう。抑、この梅と云ふ花は春の初、他の總ての花に先立ちて咲くばかりでなく、これほどの形や色香を供へた花は他に無いからして、自然と神樣も御賞美遊ばされ、花も亦情があつたのである。それで京都から此の地まで飛び通つて、自分の主人を忘れなかつた其手柄は、知る人はよく知つてゐるのである。

〔第五段〕 我國の學問の道を御守り下さるが上に、更にそれに附け加へて大君の御代が千年も續く樣に御守り下さる處の、梅の香にも比すべき御神德は、天滿宮と云ふ御名の如く廣大な天にも滿ち充ちることであらう。

二六　夕顔

『住むや誰、訪ひてや見む。』とたそがれに、寄する車のおとづれを、絶えて床しき中垣の、隙間もとめて、かいま見や。　かざす扇にたきしめし、空だきものゝほの〴〵と、主は白露光を添へて、いとどはにある夕顔の、花に結びし假寢の夢の、覺めて身にしむ夜半のかぜ。

（一）　解題

此れは源氏物語の夕顔の卷に基いて作つたものであります。同卷は夕顔と云ふ女が主人公となつて居るので、かく名づけられたのですが、此曲も同じ理由で夕顔と題したのであります。

さて此夕顔と云ふ女は三位中將であつた人の娘でありますが、早く父を喪ひました。其後頭中將と云ふ方が、此の女の處に御通ひになりまして、其間に玉鬘と云ふ子供が生れました。すると頭中將の奥方が大層御嫉妬なさいましたので、夕顔は我身を危く思ひ、玉鬘を乳母に預けて身を隱しました。

彼が五條あたりに假住居して居た折、或日の夕方源氏の君が其の家に御立ち寄りになりました。すると其の女は夕顔の花に歌を添へて源氏の君に奉りましたが、其れが深く御心にとまつて、其後は源氏の君が此の女の許に御通ひになりました。八月十五夜、源氏の君は此の女を連れて、或御別莊に御移りになりましたが、十六日の夜に至り、夕顔は物に襲はれて遂に果敢なき最期をとげました。これが夕顔の卷の梗概でありますが詳しいことは物語部を御覽下さい。尙此歌が僅か三四行で、夕顔全卷の骨子を巧に云ひ盡したのは作者の手腕です。

（二）　物語

一、源氏の君の御父桐壺帝の御弟で、皇太子の中に御隱れになつた方がある。此方の御妃が一人の姫宮を連れて京都六條で寡婦住居をして居られた。源氏の君は此の御妃と睦み合つて、折々六條邊へ微行せられた。丁度其頃の事である。源氏の君は内裏を出て其邊へ行く途中、嘗て自分を世話してくれた大貳の乳母が重い病に罹つて尼になつたのを見舞はん爲、五條なる其家に立寄られた。行つて見ると門の扉が閉つて居る。源氏の君は其の門が開くのを待つ間、車を大路に止めて、下京の街を車の簾の中から物珍らしげに眺めて居られた。すると乳母の家の隣に新らしい檜垣を圍らした一軒の家

が御目に止まつた。其の家は窓の揚戸を幾間も押し上げて、白い涼しさうな簾が掛けてある。して其簾の處へ若い女が代る〳〵來て大路を覗いで居る。先刻からぢつとして動かない車が問題になつて居るらしい。源氏の君は御供の數も少くし、車の裝飾などもわざと質素にして來て居られるので、自分が誰だと云ふことが解る氣遣はないと思つて、此の見つけない家の樣子を猶じつと車の中から見て居られた。門と云つても大したものではない。たゞ編格子のやうなものがあるばかりで、其横の塀の樣な所には青々とした蔓草が一面に纏つて居て、白い花が氣持よく澤山咲いて居る。源氏の君は此家には一體どんな人が住んで居るのだらうと、そればかり氣に掛けて居られる。供の者を呼んで、

『あれは何と云ふ花か、今迄に見た事のない花ぢや。一房折つて來て呉れ』

と源氏の君は云はれるので、御供の者は檜垣の家へ入つて花を折らうとした。

其時。可愛い十二三の女の子が薄絹の單衣の上に赤い袴を穿いて、出て來て

『これに載せてお上げ遊ばせ。提げていらつしやると恰好のよくない花ですから。』

と云つて白い扇を渡した。御供の者が編格子の樣な門から花を持つて出た時、丁度乳母の息子で、源氏の君の腹心の臣なる惟光と云ふ男が出て來て、門を開けながら

『どうもお待たせ致しました。門の鍵の置所が一寸知れなかつたもので御座いますから……』

と申し上げた。そして御供の手から夕顔の花を受け取つて、源氏の君に奉つた。

源氏の君はそれから大貳の乳母の病をお見舞ひになつて、色々と物語をした末、歸らうとなされたが、先刻隣から花を載せて來た扇が氣に懸つてならなかつたので、惟光に燭を持たせて御覽になる。すると白い扇が黄色く見える程、香で焚きしめたもので、それには、

心あてにそれかとぞ見る白露の　光そへたる花の夕がほ。

（夕顔の花が白露の光を帶びて一層美しく見える樣に、夕方の薄明で見ると一層御立派にお見えになるあなたを、私は心あてに源氏の君と御推察申上ます。）

と云ふ歌が書いてある。手跡も極めて上品なものであつた。源氏の君はこれは面白いと好奇の心がむら〳〵起り、あの家に如何なる人が住むかを益〻知りたく思はれた。それで早速惟光に尋ねられたが彼もよく知らない。隣家の下男を呼び出して聞かれたら、男の主人は任國へ下つて居て、今は女主人公だけである。そして其女主人公と云ふのが、年も若くてなか〳〵の風流人、其人には宮仕をして居る妹があつて、よく此の家に來ると云ふことがわかつた。源氏の君は此れを聞いて

『さては扇の主は其女主人公の妹であらう。宮仕へと云つても餘り立派な人でもないだらうが、なか〳〵氣の利いたことをする女だ。』

と想像を廻らして、少からず心を惹きつけられた。そこで

よりてこそそれかとも見め黄昏に　ほの〴〵見えし花の夕顔。

（夕暮の薄明でおぼろげに我が姿を見て、其許は此方を源氏だと申されたが、偖に寄つて見てこそわかるのではござらぬか。）

と云ふ歌を書いてやつた。それから六條の御妃の許に行つて、翌朝自宅へ歸られたが、其後も猶かの夕顔の花咲く五條の家が、御氣に掛つてならなかつた。

二、此の事件があつてから大分經つた所で、惟光が源氏の君の許に伺候して、色々と隣家の探索談を始めた。それを聞くが早いか、君は心の中で或は意外の堀出物があるかも知れないと思はれた。丁度其頃、源氏の君が日比意を懸けて居られた空蟬と云ふ女の夫、伊豫介が任國から上京して來た。君は何だか良心の可責を受ける樣な氣持がする。其れに此度は伊豫介が妻の空蟬を伴れて任國へ下ると云ふ噂を聞いて、心の奥に妙な氣持が起り始めた。すると一方では藤壺の女御に對する戀の焰が益〻燃え出して來る。例の六條の御妃は苦心して手に入れたものであるが、思つた程に自分の氣に召さない。此の妃は今年二十四歳で、君よりも八つ年上であつた。かういふ風で此頃の君の頭腦は異性に對する戀慕の情で攪亂されて居たのである。

さうかうして居ると又惟光がやつて來て隣家の噂を始める。

『まだ誰と云ふことは解りません。併し此の間、かやうな事がございました。まあ御聞き遊ばせ。日は忘れましたが何でも二三日前のことです。御供を澤山隨れた車が例の家の前を通りました。すると女の童が急いで座敷へ走つて行つて、「右近樣右近樣（夕顔の侍女）、中將樣（夕顔の夫人たりし人）の御通りですよと云ひますと、なか〳〵落付のある女が「何だえ、お前は騒々しい子だね、もつと靜におしよ」と云つて出て參りました。すると其後からぞろ〳〵と大勢の女達が隨いて來まして、「誰が來た、何さんの御通りだ。」などと云つて居ましたが、其れを聞きますと、どうも其れが頭中將樣の御家來の名の樣で御座いました。』

之を聞いて居られた源氏の君は、其女達が大騒ぎをしたと云ふ車の主が、確に頭中將であつたかどうかが、知りたくて堪らなかつた。そして其の女が若しかすると、行方が知れなくなつたと云つて頭中將が歎いて居た女であるかも知れないと思はれた。

其後惟光の橋渡しで、源氏の君は遂に此女の許に通はれる樣になつた。しかし君は身分を秘めて顔まで隱して逢つて居られた。女も亦深く身分をつゝんで誰だとも知らせない。只君の濃やかな情に絆されて語り合つて居る。君は不思議な程此の女に心を引かれて、別れて居る一日の晝間が苦痛であつ

た。そこで日の暮るゝを遲しと待つて、歩を運ぶ處は白い夕顏の花が少女の姿の樣になびいて居る五條の家である。

三、八月十五夜。此夜も源氏の君は例の通り此の女の許に行かれた。君は徐に口を開いて

『何處かへ一緒に行つて、其處でゆつくりと話をしようぢやありませんか。』

と云ふ。すると女は

『わたし、嫌ですわ。御名も解らない御方と御一緒に行くなんて、怖いんですもの。』

と如何にも娘らしい調子で答へた。君はそれは尤もなこと。可笑しく思はれて

『でも、好いぢやありませんか。まあ欺される積りでいらつしやいよ。』

と云はれる。そして自分にこんな勝手な事されながら、猶自分を頼らうとして居る女の心を、源氏の君は可愛く思はれた。それはそうとして、此の女はどうも頭中將の話の女の性格によく似て居ると考へながら、なほも會話を續けられた。

折しも十五夜の明るい月影が、粗末な造りの屋根から射し込んで、家の中が隅々までよく見える。君にはこんな處で寢るのが珍しく、却つて面白かつた。夜明近くなると近所の人達が起きていろ〳〵の

話をして居るのが聞える。

『今年は心細い。田舍商賣にも出られさうもない。』

などと云つて居る者もある。ごろ〳〵と碓の音もする。遠くでは砧の聲も聞える。直ぐ下の庭には秋虫が澤山鳴いて居る。白い袷に薄紫の上着を重ねた女の裝ひが、しつくりと身體に合つて嬋やかである。勝れて美人といふほどでもないが、ものを云ふ調子がまことに相手の心を引く。

『あなたのお仰ることが餘り急で、私はどうして好いかわかりませんわ。』

と女は俯きながら云つて居る。

『二人は後の世も變らないで居ませうね。』

など源氏の君が云つても女は一點の疑もさしはさまない。君はもう人が何と評判を立てゝも構はぬと云ふ氣になつて、此の女を外へ連れ出すべく、車を家の中へ入れることを命ぜられた。偶、近所では老人らしい聲で

『南無當來導師彌勒佛。』

と云つて居るのが聞える。御嶽精進をする祈禱の聲であらう。

『あの人が佛樣を拜んで居るのを緣として、私達も佛に歸依して、來世も一緒になる樣にお願しませ

うよ。』

源氏の君が、かう云はれると

『さうですね……』

と懐しさうに女も云つた。

四、さうかうして居る間に車が來た。二人は早速この車に乘つた。右近と云ふ侍女も御供をした。五條から程遠からぬ處に、河原院と云つて、七八代前の帝の御隱居所であつた大きな邸宅がある。源氏の君の車はそれを目ざして進みつゝある。來て見られると、荒れ果てた門に忍草が澤山生ひ茂つて、それから露がぽたり〳〵と落ちて居る。

『私はまだ想ふ人と一緒に、こんな處へ來た經驗がない。あなたは。』

と源氏の君はさゝやいた。女は顏を紅をさして、

『私だつて。』

と云つた。心細く思つたのか、女は大きな邸へ入ることを恐ろしがつて居る。君は留守居を呼んで無理に女を連れて入られた。

源氏の君はかうして女を此の邸にお入れになつたが、自分が此處に來て居ることが他に知られないやうにしやうと務めて居られる。そこで留守居の者にも堅く口留をして置かれた。他に何もすることがないので二人は

『何時までも變らないでね……』

とこんな言葉を繰返して時を過した。

晝に近い頃、君は自ら戸を開けて外を見られた。庭の荒れ果てゝ居ることは實に驚くばかり。恐しい程木が生ひ茂つて居る。緣側に近い庭の植込は、秋の野の樣に草が茫々と伸びて居る。留守居は廊下を隔てた別の家屋に住んで居るので、此處には人影もない。源氏の君はまだ自分の口から名を明して居ない。然し女が恨んで居るのも尤もだと思はれて、ぽつ〳〵打ち明けられる。

源『いつか夕顏の花を貰つてあの隣の家へ入つた車の主は私でしたよ。』

女『あら、さう、するとあなたが源氏の君……』

源『あなたも誰の子だと云ふ位のことは、打ち明けたつて好いぢやありませんか。』

女『わたし……わたしは名なんどはない海人の子なんですよ。』

こんな會話の初まつて居る處へ、例の惟光が主人の跡を尋ね當てゝやつて來た。氣の利いた彼は菓子

などまで用意して持つて來たが、遠慮をして源氏の傍へはよう來ない。今迄かなり長い間知らぬ顏して懸け橋をして居たので、右近に責められはしないかと云ふことも憚つて居たらしい。

五、此院の夕暮は譬へ樣のない程靜寂である。奥の方は暗くて怖いと女が云ふので、簾の傍へ床を設けて二人は寢に就いた。女の心は次第に打ち解けて來るやうである。女は離れまいとぢつと傍に寄つて居る。間もなく戸を下して灯をつけさせられた。誰に氣兼もない唯、二人の差向ひが珍しく樂しきにつけて、六條の御妃の重苦しい所に此女の柔味を加へたらよからう……などゝ、源氏の君はかゝる場合にも、他の戀人の上が胸に浮んで來るのであつた。

少しばかり寢入つたかと思ふと枕頭に美しい女性の影がヌーッと現れ出て（六條の御妃の怨靈）

『あなたに熱情をさゝげて居るこの妾……この妾を外にして格別取り所もないこんな女を伴れて來て隱蔽幕とはあんまりな御振舞……あゝ悔しや……怨めしや……』

と云つて夕顏を搖り起さうとする。何か變化の所爲であらうと驚いて眼を開かれると、灯がぱつと消えた。源氏の君も薄氣味惡くなり、太刀を拔いて起き上つて右近を呼び起された。この女も恐る〳〵傍へ寄つて來た。

源『さあ、灯……灯……灯をつけさせて呉れ……あの留守居を起して……早う、早う……』

右『どうして、彼處まで行かれませう、暗う御座いますもの……』

源氏の君が手を叩かれると家の中で山彦が起る。留守居の人には聞えないらしい。夕顏はどうすれば好いかと慄へて、汗もしどろになつて居る。源氏の君は氣が弱くて晝間でさへ怖がつて居た此の女が可哀さうでならない、そこで君は

『それぢや此方が留守居を起して來よう。もう少しお前はこの人（夕顏をさす）の傍へ寄つて居て呉れ。』

と右近に云ひ置いて、西の戸口から出ると、其時廊下の灯もまた、フッと消えた。君は手探りで留守の寢室へ行つて叩き起し

『直ぐ灯をつけて來い。こんな處に居るにも似ず、餘り氣を許して寢て居るぢやないか。』

と促された。すると直樣留守居の息子が灯を持つて出て來た。折しも身にしみわたる夜半の風が吹き起つて、手に持てる灯を明滅させる。君がもとの處へ歸つて見られると、夕顏は先刻の儘の形で寢て居る。右近は其橫にうつ臥になつて居る。源氏の君が夕顏の身體を動かして見られると、唯なよ〳〵と動く計りで息もしない。君は如何したら好いかと溜息をついて居られる。

時しも先刻夢で見た女性が前と同じ姿で其處に現はれ出たが、直ぐまたスーッと消えてしまつた。夕顔はどうしても、もうもとには返らない。冷く冷くなつて行くばかりである。

『これ、これ、もう一度生きてお呉れ。私に悲しい眼を見せないでね。おい……おい……』源氏の君は泣きながら斯う云ふのであるが、女の身體は次第々々に死骸らしくなつて行つた。

一旦歸つた惟光も此の悲しき報に接して、早速又やつて來たが、此の變り果てた狀を目擊して貰ひ泣をした。右近の悲愁は云ふ迄もない。然しかうなつた以上はいくら泣いても仕方がない。夕顔の死骸を莚に包んで、惟光の知己なる尼が東山に居たから、其處へ連れて行つた。源氏の君は別れを非常に悲みながら、明けぬ中に二條院(源氏の御住居)へ歸られた。夕顔が或は蘇生でもするかと、十七日は其儘にしておいて、十八日に人知れず野邊の送りを濟まされた。

嗚呼、薄命の佳人夕顔はかくの如く果敢なく此世を去つたのである。

(三) 句釋

【住むや誰、訪ひてや見む】(此ノ家ニハ一體誰ガ住ンデ居ルノデアラウ。一ッ訪問シテ見ヨウカ) これは源氏の君が或日の夕方、五條にある夕顔の假住居の前を通られた時の御感想を云つたのであり

【たそがれに】(夕暮) 誰そ彼の義、誰彼と見分けのつき難い時と云ふ意味で夜になる前の薄闇い時のことを云ひます。此れに對してまだ夜の明けない薄闇い時のことを『かはたれ時』と云ひます。

【寄する車のおとづれを】(我ガ家ニ立寄ル車ノ訪問ヲ) これは源氏の君の御乘りになつて居る御車が夕顔の家の前に留まつて訪問することを云つたのであります。

【絶えて床しき(中)】(交ヲ絶ッテ久シクナルノデ何トナク慕ハシイ間柄) これは夕顔が頭中將と夫婦關係を絶ちて久しく會はないので何となく中將を懷かしく慕はしく思つて居ます。それで自分の家の前を車でも通れば若しや其人ではないかと垣の隙間から覗き見たのであります。今しも源氏の君の御乘りになつて居る車が通つたので例の人ではないかと覗いて見たのです。『床しき中』の『なか』は間柄と云ふ意と次の中垣のなかとの二つを兼ねて居るのです。

【中垣の隙間もとめて】(隣家トノ隔ニナッテ居ル垣ノ隙間ヲサガシテ) 『中垣』とは相隣れる家と家との間の隔になつて居る垣のことを云ふのであります。

【かいまみや】(ノゾイテ居ルヨ) 『かひまみ』とは物のすきまからこつそりと窺ひ見ることであります。やは感歎の意をあらはす詞です。

【かざす扇にたきしめし】（カザシニ使フ扇ニタキシメタ）『かざす』とは眼の上に陰をなすと云ふことで扇の用途を云つたのですが全體の意味を取る時には省いて行つた方がよくわかります。『たきしむ』とは香を焚いて衣服、扇などに其香をしみ込ませることを云ふのであります。今日ならば斯かる場合には香水を用ひますが香水のない平安時代にはこんな方法を取つたのであります。此處は夕顔が歌を書いて源氏の君に渡した扇に香が焚きしめてあつたことを云つたのです。

【空だきものゝほのぼのと】（香ノカホリガホンノリト）『そらだきもの』とは何等の目的もなくして香を焚くことを云ふのでありますが、此處はたきしめた香の意に見るがよろしい。『ほの〳〵』は甚だほのかなことですが、此處は香のかをりがかすかに香つて居ることを云つたのです。この『ほのぼの』は次の『光をそへて』にも懸つて行くのであります。

【主は白露光をそへて】（主即チ源氏ノ君ノ御容貌ハ白露ノタメニホンノリト光ヲソヘテ）夕暮の薄明に源氏の君の容貌が一入美しく見えることを、夕顔の花が夕刻の白露をうけて一際美しく見えることに喩へて云つたのであります。これは夕顔（女の名）が扇に書いて源氏に奉つた歌即ち『心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる花の夕顔』といふのから取つた文句であります。して此歌の意味は物語の部に解してあります。

【いとゞはえある夕顔の】（甚ダ美シク見エル夕方ノ御顔デ）『いとゞ』は『いよ〳〵』とか『甚だしく』と云ふ意味であります。『はえある』は『照り輝いて』とか『つやがまさつて』と云ふ意味ですが此處では『美しく見える』と云ふ程の意に見ておけばよろしい。『夕顔』は夕方の顔と云ふ意ですが其他に二つの意味を含ませて居ります。即ち花の名の夕顔と女の名の夕顔であります。

【花に結びし】（夕顔ノ花ガ縁トナツテ結ンダ）これは夕顔の花が縁となつて源氏の君と夕顔（人名）との關係の結ばれた事を云ひます。

【かり寝の夢の】（ウタヽ寝ノユメガ）此れは八月十六日の夜、源氏の君が某の別莊に於て夕顔と二人で寝たことを指して居るのです。

【さめて身にしむ夜半の風】目ヲ覺シテ見ルト夜中ノ風ガサツト吹イテ身ニシミワタル）これは十六日の夜夕顔が六條御息所の怨靈に殺された時の光景を云つたのです。此の處少し源氏物語夕顔の卷の本文を引いて見ませう。

宵過ぐる程少し寝入り給へるに、御枕上にいとをかしげなる女居て、『己がいと愛でたしと見奉るをば、尋ねも思ほさで、斯く異なること無き人をゐておはして、ときめかし給ふこそ、いとめざましくつらけれ』とて、此の御傍の人を揺さ起さんとすと見たまふ。（以上夢）

物に襲はるゝ心地して驚き給へれば火も消えにけり。(中略)右近(夕顔の侍女の名)を引寄せ給ひて西の妻戸に出でて、戸を押明け給へれば、渡殿の火も消えにけり。風少し打吹きたるに人は少くて、侍ふ限り皆寝ねたり。

此時に夕顔は殺されて了つたのであります。

(注意) 此曲は那須野と同様誠に物凄いものですから其の心持で御弾きなさることを希望致します、

(四) 通釋

源氏の君は『此家には一體誰が住んで居るのであらう。一つ訪問して見やう。』と思はれて、夕暮時に車を其家に寄せられた。其家の主人公即ち夕顔と云ふ女は、嘗て我が夫たりし人と關係は絶つて居るけれども、鴛鴦の契深かりし昔の片時も忘れられず、慕はしく懐しき仲なれば、今我が家に近寄りつゝある車の主が、若しや其人にあらざるかと、中垣の隙間をもとめて覗いて見た。然し其れは彼が意中の人ではなかつたが、花を欺く源氏の君の美貌に心を惹かされて、其儘には默し難く、遂に我が名に通へる夕顔の花を扇子に載せて奉つた。源氏の君が其扇子を手に取つて見られると、薫物の香が微かに殘つて居る。其扇子を送られた主、即ち源氏の君は夕方の白露がほんのりと光を添へた爲御顔が一

入美しくお見えなされた。そして意外にも彼の夕顔の花が縁となつて、夕顔と云ふ名の女と妹脊の契を結ばれることゝなつた。其後八月十六日の夜、河原の院と云ふ御別荘に於いて、其の女と假寝をして一炊の夢を見られたが、其夢の醒むるや、君は夜半の風の身に泌み渡るを覺えられた。

二七　勾當内侍

（佐藤左久作曲）

影ふかき大内山の老松に、宿れる月も、八千草にすだくや蟲のもろ聲も、あはれを誘ふ折しもに、ほのかに聞ゆる玉琴の、主や誰ともしら露を、踏みしだきつゝ義貞は、漫に心ひかされて、萩の戸近く立ち寄れば、世にも稀なる上蔦の月に向ひてかき鳴らす、水の調も澄み渡る。（第一段）

折らば落ちなむ萩の露、拾はゞ消えむ玉篠の、霰よりなほあだなれば、隈なく月はさしながら、心の闇に迷ひけり。見し其人は勾當の内侍と知るや一筋に、思ひ入る矢に楯もなく、我袖の涙に宿る影ぞとも、知らで雲井に月や澄むらん。しらで雲井に月やすむらむ。送りし言の何時しかに、天津空まで聞えけむ。遂に内侍を賜び給へり。月にしらべし玉琴も、今こそ宿の妻琴と、末の緒かけて契りけむ。末の緒かけてちぎりけむ。（第二段）

（一）　解題

此れは新田中將義貞が後醍醐天皇から勾當内侍を賜はつて妻とした由來を太平記によつて作つたものであります。勾當内侍が其中心となつて居るので、かういふ題をつけたのであります。此の歌詞は他の布片を綴り合せた樣なものとは違つて、筋もよく通り文句も大層優美に出來て居ります。

最初に禁庭の秋夜の景を叙し、次にほのかに聞ゆる琴の音に心を惹れて萩の戸に立ち寄る義貞を點出し、次に月に向ひて琴掻き鳴らす内侍の容姿を表はし、次に義貞が内侍に和歌を送つたことを書き最後に後醍醐天皇から内侍を賜はつたことを述べて此曲の結末をつけてをります。

（二）　物語

勾當内侍は頭大夫行房の女である。十六歳の春、端なくも後醍醐天皇に召されて禁中に入り、内侍として日夜君の御側に仕へ奉る身となつた。天性の美容、譬へるに物なく、早くから公卿達の目を惹いたのである。

建武の初、天下が再び亂れようとした時、新田左中將義貞は天皇の召に應じて、内裏を御警固申し

上げることになつた。忠義の情に厚い彼は、君の御寵幸を蒙ることが、極めて深かつた。

或夜義貞は御宿直を勤めた。時は正に秋の最中であつたので、禁庭の老松に懸れる月も一際清く、八千草に鳴く虫の聲も一入あはれであつた。折柄かすかに琴の音が聞える。義貞は耳を傾けて、その音に聞き惚れて居たが、やがて思ふやう、

『あゝ實によい音だ。一體誰が彈いて居るのだらう。それを知らずに過すのも、甚だ殘念。』と、宿直姿に露踏み散しつゝ、清涼殿の東面、小萩の籬に近く立ち寄つた。彈く主は早や之を氣付いたのか、琴の音が俄に止んだ。義貞は甚だ失望したが、『此の儘引き返すも、本意ないことだ。迫めては主の姿でも見屆けて置かう。』と、垣根越に内部を覗き込んだ。すると半ば卷き揚げられた御簾の下に、美しい女が此方を向いて坐つて居る。十三絃の箏は未だその前に横へられてある。義貞は『あゝ、これが正しく今まで聞えた箏の主に相違ない。』と、一安心の體であつた。

折しも月影は、松の梢を離れて、さやけき光を女の半面に送つた。義貞はまたもや視線をその方に注いだ。月の光で前よりは一層よく見えて、顏の容まで判然とわかる。深き憂に沈で居るやうな面持、打ち萎れた姿は、折らば散りさうな萩の露、拾はば消えさうな玉笹の霰よりも、なほはかなく哀に見えた。始めは姿だけ見ればよいと思つた義貞も、茲に到つては、その女が果して何人であるかを知りたく思つた。そして噂に聞いてゐる女官の名などを、獨言に唱へて、あれではないか、これではないかと思ひ廻らし、そして時々その女の方を見た。色々と考へた後、それが宮中に名を得て居る勾當内侍である事がわかつた。義貞は益々心が迷ひ出し、月は明るくても、彼の心の中は闇かつた。然し何時の間にか女の姿も見えなくなつたので、義貞はやう〳〵斷念し、宿直の詰所に歸るべく、其の場を去つた。處が淑景舍の邊まで來ると、一旦思ひ諦めた事が、また頭を擡げて來る。月影を浴びたあの美しい姿が、俤となつて彼の眼に映ずる。彼は益々黯慕の情を制し兼ねて、到頭曉近くまで其處に立ち續けた。

東天紅を催す頃になつて、詰所に歸つたが、頭が茫然して何事も手に就かぬ。數日經つても、まだ心が落ち付かない。或日彼は『迫めて胸中に燃ゆる思の片端なりとも通じよう』と思つて、

我が袖の涙に宿る影とだに、知らで雲井に月やすむらむ。

といふ歌を詠んで、使の者に持たせて遣つた。間もなく使の者が歸つて言ふやう、

『陛下の御耳に達するのを、お憚りなされてか、かの御歌を手に取ることすらも、なさりませぬ。』

此れを聞いた義貞は非常に落膽した。鬼をも拉ぐ武士魂も何處かへ影を潜めて、たゞ悄然として居るばかりである。そして『もう此の上は、何の樂しみがあつて、此の世に生き存へよう。』と歎息をす

る迄に至つた。

何人が奏したのであらか。天皇はやがて此の事を聞召されて、

『これは只事でない。然し夷心の分別なさに思ひ初めたとすれば、是非もあるまい。』

と仰せられたばかりで、別に何のお咎もない。むしろ彼を哀れと思召すやうであつた。或日清涼殿で御遊を催された時、義貞を御召になつて、御盃と共に勾當内侍をお下しになるべき旨を仰せ出された。義貞の喜びは、如何ばかりであつたらう。

其翌日の暮方、義貞は牛車を立派に飾り立て、内侍の許に遣はして、天皇の御仰を達せしめた。内侍も『誘ふ水あらば……』と思ふ折柄、快くこれを諾ひ、差向けられた車に乗つて、義貞の許に赴いた。

かくて勾當内侍は、新田左中將義貞の夫人となつたのである。

× × × ×

一命を賭けて贏ち得たこの愛妻、義貞が如何に彼に心を盡したかは、想像するに餘がある。時には弓矢取る身として恥づべき振舞もないではなかつた。去んぬる建武の末、朝敵が西海の波に漂つた時には、暫時の別を惜んで、征路に滯つた。後醍醐帝が比叡山に行幸なされた時などは、彼の色香に

迷つて、敵軍に勝利を得させて了つた。佳人の一笑は能く國を傾ける。義貞程の勇士も、妹脊の道には、何物をも棄てゝ顧みなかつた。

延元元年十月、義貞は後醍醐帝の詔によりて、北國に赴くことになつた。其の時も彼は出來るならば、内侍を伴ふ積りであつたらしい。然し途中の難儀を考へて、琵琶湖畔の今堅田といふ處に留めて置いた。此の旅は何時までといふ期限も定まつて居ないので、義貞は一入内侍との別を悲しく思つた。内侍も越路に赴く我が夫の身の上、後に殘されて孤閨を守る我が身の上を思ひ浮べて、非常に心細く思つた。かくて別れて二人、これが今生に於ける最後の對面と思つたであらうか。

其後内侍は今堅田の賤が屋に、淋しき月日を送つて居た。其の間に、雪の白く積つて居る北方の連山を望みつゝ、『我が夫のいますは、かの山の彼方。あゝ、さぞお寒い事であらう。越路の風よ、心して吹いて呉れ。』と義貞の身の上をうち案じて、人知れざる涙に袖を濡すことが、一度や二度ではなかつた。この誠心は義貞にも通じたであらう。

年が明けて延元二年となつた。すると程なく悲しい報知が内侍の許に齎された。取るが早いか、開いて見ると、内侍の父行房が金が崎城で討死をしたとの事である。彼は物思ひの上に、今又新しい悲を添へて、生きて居る心地がしなかつた。

一方義貞は、北國に行つて後、いとしき妻の事を思はぬ日は一日もない。而もその情は日一日と切になつて、遂には内侍を我が許に迎へようとまで思つた。然し道中の不安を思ひ、人の思はくを憚る所があつた爲め、唯、時々の音信に心を遣つて居た。處が延元三年の秋になつて、道中も一時靜になつたから、これならば心配はあるまいと思つて、内侍を迎へるべく、使を上らせた。

内侍はこゝ三年が間、心の闇に迷つて居つたが、迎への使と聞いて、俄に夜が明けたやうな心地がした。直樣旅裝を調へて、北國へと向つた。はやる心に足も捗り、今堅田の宿を出て三日目の夕刻、越前國杣山の城に着いた。折節義貞は、福井の近郊なる足羽に向つた後で、杣山には守兵が數人居るばかり。内侍は我が夫の後を追ふべく輿を急がせた。彼が淺津の橋にさしかゝるや、その輿を目がけて馳せ來る一騎があつた。近づくまゝによく見れば、瓜生彈正である。急いで馬から飛び下り、輿の前にひれ伏して云ふやう、

『やあ是は何處への御渡り。新田殿には昨日の暮、足羽と申す所にて御討死遊ばしてござりまする。』

内侍は聞きもあへず、

『なんとお言ひある。新田殿が御討死と……』

内侍は驚きと悲しさとに胸が塞つて、覺えず輿の中に倒れ伏したが、やがて涙でよごれた顔を彈正の

方にさし向けて、

『さらば、妾をその野邊、――我が夫の露と消え給ひし――その野邊に伴ひて給べ。亡き夫の後を追ひ、妾も露と消なましを。いざ疾く、疾く。』

と促した。彈正は暫時無言。何事かを胸の中で考へて居るらしかつたが、輿丁に向つて、

『御輿。早う、もとへ返せ。』

といふ。輿丁は命ぜられたる儘に、急いで杣山へ引き返した。

内侍はかくて無理やりに杣山へ返された。この上はせめて、義貞が生前起臥して居た跡なりとも、見ようと思つて、守兵にこの旨を語つた。守兵は快く承諾して其處に案内した。障子の内へ這入つて見ると、歌など認めた色紙が散らかつて居る。その中には

『いつか都へ……。』

と歸洛を豫言した言の葉も見えた。内侍はかゝる空しき形見を見るにつけて、益、悲しさに堪へられなくなり。そこで彼は

『わが夫の起臥せられし處と聞くからは、此處にて中陰を過し、御跡をもお弔ひ申し上げよう。』

と、思つたがまた『處柄敵の近付く懼があるから。』と思ひ返し、涙を呑んで、京都へ歸つた。

× × × × ×

空しく杣山から歸つた内侍は、御室のあたり、住む人稀なる處に、佗住ひをすることゝなつた。此處に來て三日目、彼は徒然なる儘に、昔の人にも逢はうと思ひ立つて、蓬生の宿を出た。陽明の邊まで來ると、路傍に多くの人が集つて、非常な混雜、その中からは、『あな、あさまし』『あなあはれ』などいふ聲が時々聞えて來る。内侍は何事が起つたのかと、立ち寄つて見た。すると、彼が趨路遙かに尋ねても、逢はずに歸つた義貞の首が獄門に梟らされてゐるのであつた。眼は固く閉ぢ、顏色は全く變り果てゝゐる。内侍は二目と見る事が出來ず、とある築地の蔭に泣き伏して了つた。これを見た人は、知るも知らぬも、貰ひ泣をした。

日は何時しか暮れ果てゝ、上弦の月が都大路の柳の梢に懸つて居る。群衆も皆去つてあたりに人影は見えなくなつた。内侍は亂れた髪を左右に振り分けつゝ立ち上り、月に對して物思ひ顏である。思ふにその時に於ける彼の感想は

『嘗て琴を彈きながら、禁庭で眺めた月、今宵こゝで眺める月。月に變りはなけれども、變り果てたは我が夫の御身の上……』

であつたらう。彼はなほも月を眺め居て御室の宿に歸らうとはしない。

折柄、一僧が其處を通りかゝり、彼の樣子を不審しく思つて、事の仔細を尋ねた。彼は涙ながらに一部始終を物語つたが、其の僧の眼にも何時しか涙の玉が宿つてゐる。僧は涙を押し拭ひつゝ、内侍に向つて、懇に會者定離の理を說いて聞かせた。内侍はその言によつて、やうやく愛別離苦の夢覺め、其の夜直ちに翠の黑髪を剃り下して、尼になつて了つた。而して嵯峨野の奥、往生院のほとりに柴の庵を結んで、念佛三昧に殘年を送つた。

あゝ新田左中將義貞の夫人、勾當内侍の半生はからくもはかなくあはれであつた。

(三)　句釋

●第一段　秋の一夜、勾當内侍が琴を彈いて居た時、義貞が其妙なる音に聞き惚れて居た事を云つたのであります。

【影ふかき大内山の老松に】(幾重モ枝ヲ重ネテヨク繁ツテ居ル宮庭ノ老松ニ)『影ふかき』は松樹のよく繁つて居ることです。『大内山』は内裏の大庭とか御所の御庭とか云ふ意味であります。

【宿れる月も】(照ラシテ居ル月モ)『宿る』は月の光がやどるのですから、照すと云ふ意味に見て置けばよろしい。

【八千草にすだくや蟲のもろ聲も】(數多ノ秋草ニ集リ鳴ク秋蟲ノ樣々ノ聲モ)『八千草』は樣々の草と云ふ意。此處は萩・桔梗・女郎花・尾花等の所謂秋の七草の類を云つたのであります。『蟲のもろ聲』は松虫・鈴虫・轡虫等の諸蟲のこゑであります。

【あはれを誘ふ折しもに】(感興ヲ催サセル折ニ)『折しも』は折と云ふのと同じ意、『しも』は感動詞『も』の上に語勢を強める爲の『し』が添はつたものであります。

【ほのかに聞ゆる玉琴の】(カスカニ聞エテ來ル琴ノ)『玉琴』は玉で飾つてある立派な琴と云ふことです。

【主や誰ともしら露を踏みしだきつゝ】琴ヲ彈イテ居ル人ガ誰デアルカハ知ラズニ白露ヲ踏ミアラシナガラ)『しら露』のしらには『知らず』のしらが言ひ懸けてあります。『しだく』は踏み荒すと云ふ意味です。

【義貞は漫に心引かされて】義貞ハ何トナク心ヲ引カサレテ)『漫』は何故ともなく心が其の方に向いて行くことです。

【萩の戸近く立ち寄れば】(清涼殿ノ東南、小萩垣ノアル所ニ近ク立チ寄ッテ見ルト)『萩の戸』は小萩を植ゑて垣となしたるもの、これは清涼殿の東南にあつたのであります。『清涼殿』と云ふのは天皇

が日常所起居あらせられる御殿でありますが、勾當内侍も此御殿に居て陛下にお仕へ申したのであります。尙清涼殿は一一八頁を御覽下さい。

【世にも稀なる上臈の】(此ノ世ニ類ノ少イ綺麗ナ官女ガ)『上臈』とは本來は二位三位の女官のことですが此處は身分の貴い婦人と云ふ位の意味に見て置いてよろしい。

【月に向ひてかき鳴らす水の調も澄み渡る】(月ニ向ッテ搔キ鳴ラス琴ノ音モ月ト共ニ澄ミ渡ル)『水の調』は水調子とも云つて三味線の調子の甚だ低いもののことですが、こゝは琴の調子と云ふ意味に使つたのであります。月の澄むと共に、琴の音も澄むと云ふので、『調も』と云つたのであります。

●第二段　義貞が、月光を浴しつゝ彈琴せる内侍の優姿に、戀慕の情禁じ難く、一種の和歌を送つた處が、其事が天皇の御耳に達して、遂に内侍を賜はつた事を云つたのであります。

【折らば落ちなむ萩の露、拾はば消えむ玉ざゝの霰】(折ルナラバ落チサウナ萩ノ露、拾フナラバ消エテシマヒサウナ笹ノ上ノ霰)此の句は浮氣な女の靡き易い樣を云つたのであります。『なむ』は未來完了の助動詞で、『何々してしまふであらう』と云ふ意味であります。『玉ざゝ』は笹をほめて云つたのであります。

【なほあだなれば】(ソレヨリモカヨワク、此方ノ思ヒ通リニ、靡キサウデアッタカラ)『あだ』とは

弱々しく靡き易いことを云つたのです。

【隈なく月はさしながら】（月ハ明カニ隅カラ隅マデ照シテ居ルケレドモ）『隈なし』とは月光の到らぬ隅がないと云ふ意味で、月が非常に明かに照らして居ることを云つたのです。

【心の闇に迷ひけり】（心ガ亂レテ是非ノ判斷ガ出來ナクナツタ爲ニ迷ツタ）『心の闇』は心が亂れて、是非の判斷がつかなくなることを、闇にたとへて云ふのであります。

【見し其人は勾當の内侍と知るや】（義貞ガ今自分ガ見タ其婦人ガ、勾當ノ内侍ダトイフコトヲ知ルト）『勾當の内侍』は第一に位する内侍といふことです。内侍とは朝廷の奥御殿に關する一切の事を掌つた女官と云ふことであります。

【一筋に思ひいる矢に楯もなく】（一途ニ思ヒ込ンデ、内侍ノ方ニ馳セ行ク心ヲ、何物モ留メルコトガ出來ズ）『思ひいる』のいるには入ると射るとの兩意が含まつて居ます。馳せ行く心を射る矢にたとへたのであります。矢と云つたから其縁語を用ひて楯と云つたのです。『楯』は敵の矢丸を防ぐために用ひるものでありますが、こゝは防ぎ止めるものと云ふ意です。

【我袖の涙に宿る影ぞとも知らで雲井に月やすむらむ】（義貞ガ勾當内侍ノ所ヘ送ツタ歌）其意味はこの義貞が御身を戀ひ慕ふ餘り、かやうに涙を流して泣いて居るのに、御身はそれをも知らず、平氣

で琴を彈き澄まして居るやうだと云ふのであります。『月が空で澄んで居る』とは勾當内侍が宮中に於て、平氣で琴を彈いて居ることを諷して云つたのであります。

【おくりし言のいつしかに】（内侍ニ言ヒ送ツタ歌ガ何時ノ間ニ）『言』は前に擧げた歌のことを云つたのであります。

【天津空まで聞えけむ】（天皇ノ御耳ニ達シタノデアラウ）『天津空』とは天とか空とか云ふ意味ですが此處は宮中のことを云つたのです。

【遂に内侍をたび給へり】（トウ〳〵内侍ヲ義貞ニ御下賜ニナツタ）『たび』は上より下に授けることを云ふのです。

【月にしらべし玉琴も】（月下ニ琴ヲ彈ジテ居タ美人モ）『玉琴』は前にも云ひました通り、琴の美稱でありますが、此處では其の奏手なる美人、即ち内侍を指して云つたのです。

【今こゝ宿の妻琴と】（今ハ宿ノ妻トシテ）『妻琴』はたゞ琴と云ふだけの意です。琴は爪を用ひて彈くからして爪琴と云ふのです。爪と妻とは音が同じである處から、妻琴と書く樣になつたのです。さて此處の妻琴は單に妻と云ふ意味取つて置けばよろしい。前に玉琴と云つたものですから、それと調子を合せるために妻琴と云つたのであります。

【末の緒かけて契りけむ】（幾久シク變ラジト約束シタコトデアラウ）『末の緒』は單に末と云ふだけの意味に見て置けばよろしい。琴の緒とするために、緒と云ふ字を附けたのであります。

（四）通釋

〔第一段〕十重二十重枝を重ねたる宮庭の松を照せる月、種類多き秋草の下に集り鳴く虫の聲々、此等のものが感興を催させる折柄、微かに琴の音が聞えて來る。其夜宿直であつた義貞は、其琴の主が何人なるかを知つて居た譯ではないが、漫に心を引かされて、白露を踏み散らしつゝ、小萩が雛近く立寄つた。すると世にも稀な美しい官女が、月に向つて琴をかき鳴らして居る。して其琴の音は月の光と共に益澄みわたつて行く。

〔第二段〕其の官女の容姿は物に譬ふれば萩の露、玉笹の露。否それよりも尙あだめいて靡き易く見えたので、月は隈なく照してゐても、義貞の心の中はさながら暗夜の如く、甚だ迷つてしまつた。彼は其の官女が勾當內侍であることを知るや、その方に心を馳せたが、何物も其れを遮り得ない程、切なものであつた。そこで義貞は

我袖の涙に宿る影ながら知らで雲井に月や澄むらん

と云ふ一首の歌を送り入れたが、其の歌が何時の間に、天皇の御耳に達したのであらう。遂に內侍を義貞に御授けになつた。こゝに義貞は、前に月下に琴を彈いて居た彼の美女を、今は宿の妻として迎へた譯であるが、定めし幾久しく變らじと、固い約束を結んだことであらう。

二八　松風

三世山本中能島松聲　合作

久方の月の桂のかげたかく、風吹き送りまさごちを、磨きなしたる光をば、畫かとばかり見渡せば、花も紅葉もなかりけり。浦の苫屋に秋更けて、うちも寝られず海人は、汐馴衣袖さむみ、砧の音も恨みなり。(第一段)

とふの菅薦みふに寝し、昔偲べば割爪の、わりなき仲もなか〳〵に、何うらずりのうらみごと、袖は涙の涙がへし、かへる袂をひきれんに、秋の夜長し長かれと、名殘はつきぬつくし琴。(第二段)

海と呼ぶ名にゆかりある、磯邊の松を吹く風も、おのづからなる調には、雲井の雁も琴柱して、落つるまに〳〵聲添へて、心をすます波の音。秋風樂やこれならむ。(第三段)

面白や。松風の、しらべ添へたる玉琴は、千代のためしに彈く絲の、永き

世かけて盡きせじと、八百萬代も三笠山。君が惠やあふぐらむ。(第四段)

(一)　解題

此曲は主として磯邊の松に吹く風のことを叙べたものでありまして、那須野や熊野の樣に筋の通つた物語ではありません。松風が琴の音に通ふと云ひ、又琴の音を松風に喩へることは、昔から詩や歌でよくすることでありますが、此曲は松風を琴の音と見たてゝ居ます。

此歌曲は『秋風樂やこれならむ』と云ふ所で一度全く終つて居るのです。こゝで全く終つて居れば大層纏まつた唄でありますが、作者は更に轉じて箏曲の目出度いことゝ、其流行の久しく絶えないことを述べ、此れも御惠深き大御代の餘慶であると云つて結んで居ます。

(二)　句釋

●第一段　初めに月光の明かな海邊の、稍〻寒き頃の秋景色を叙べ、更に餘所の砧の音も恨めしいと云つて、海人の境涯にまで及んで居ます。

【久方の】(月ト云フ語ノ枕詞)　枕詞の説明は「石山源氏上」を御覽下さい。

【月の桂】(月)　月の中に長さ二百五十六丈の桂の樹があると云ふ、支那の傳說から來た詞です。

【影たかく】(月ガ高クサシノボッテ)　この影はすがたとか、かたちとか云ふやうな意味で、木蔭(こかげ)など云ふ場合のかげとは全然違ひます。影はまたひかりと云ふ意味にも用ゆることがありますから一寸御注意申して置きます。

【風吹き送りまさごぢを】(折柄風ガ吹キ渡ッテ、月光ガ麗シク眞砂路ヲ照シテ居ルノヲ)　眞砂路が美しき月光に照らされて居るのを、風が眞砂路を磨いて光澤を出させた樣に見たてゝ云つたのです。『眞砂路と』は細い砂のある路と云ふ意味でありますが、此處は白砂の打つゞく濱邊のことを云つたのであります。

【畫かとばかり見渡せば】(濱邊ノ眞砂ガアマリ美シク、明ルク照リ輝イテ居ルノデ、畫景色カト思ッテ見渡スト)

【花も紅葉もなかりけり】(モウ花モ紅葉モイラヌホド景色ガヨイワイ)　世の人は景物と云へば、必ず春の花・秋の紅葉と云ふだらうけれども、海濱の月景色を見れば、もうそんなものはなくてもよいわいと云ふ意味です。さて此句は新古集にある藤原定家の歌、即ち『見渡せば花も紅葉も無かりけり。浦の苫屋の秋夕ぐれ』と云ふのから取つたのです。

【浦の苫屋に秋ふけて】(海邊ノ苫葺(トマブキ)ノ小屋ニ秋ガ更ケテ)　『苫屋』は苫で葺いた小屋と云ふことですが、此處は漁夫のみすぼらしい家と云ふほどの意味であります。

【うちも寢られず】(寢ルコトモ出來ナイ)　『うちも』はうちといふ打頭語にもが加はつたのであります。『うちも寢られず』は『うち寢られず』と同じ意味で、寢られないと云ふことを、强く云つただけです。

【汐馴衣】(汐ニ馴レタ衣服)　常に海水に染みなれて居る衣といふ意味で、海人の着物のことを云つたのです。

【袖寒み】(袖ガ寒イノデ)　この『み』は原因を示す時によく用ひる接尾語であります。風ガヒドイノデと云ふ處を風をいたみと云ひ、山ガ高イノデと云ふ處を山を高み、苦ガ荒イノデと云ふ處を苦をあらみと云ふのも同じ類です。

【砧の音もうらみなり】(砧ノ音ヲ聞イテモ、マ、ナラヌ世ガ恨メシクナッテ來ル)　『砧』は衣板(きぬた)と云ふ意味で着物を載せて打つための臺です。そトろに寒さを覺ゆる頃ですから、衣類に乏しい海人の耳には、砧の音が恨めしく思はれるのも、無理はありますまい。その『恨み』と云ふ語は『恨見』と音が同じである所から『衣』と云ふ語の緣語になります。

●第二段　かの海邊の秋景色に對して、秋風の嘆に堪へぬ女が昔の戀の恨みを謠ひつゝ琴を彈いて居る、其琴唄だと思へばよろしい。だから琴の手の名が澤山出て居ます。

【とふの菅蔦みふに寢し】（十府カラ產スル菅デ造ッタ寢莫產ノ七分ハ男ニ讓ッテ自分（或女）ハ其ノ三分ニ寢タ）　これは『陸奥の十府の菅ごも七ふには、君をねさせてみふに我が寢ん』と云ふ古い俗歌から取つたのであります。『十府』は奥羽地方の宮城郡十府村のことです。こゝは昔から有名な菅の產地であります。此處の文句では十府に十節を兼ねさせて居ます。みふは三節の意味で十節の中の三分と云ふことです。

【昔偲べば】（昔ノコトヲ思ヒ出シテ見ルト）

【割爪の】（琴ノ彈法ノ名）　此處ではそれが『わりなき』と云ふ語の序となつて居ます。

【わりなき仲】（親シク隔テノナイ仲）

【なか〳〵に】（カヘッテ）『なかなか』は今日では隨分・容易になどの意味に用ひますが、古い所では、カヘッテの意味に用ひた場合が多くあります。又狂言では、サウダ、シカリの意に用ひられて、一寸面倒な語であります。

【うらすのり】（琴ノ彈法ノ名）　こゝでは、それが『うらみごと』の序となつて居ます。

【うらみごと】（怨ミノ言葉）『こと』は言の意で、事の意ではありません。此處では言に琴の意を含ませて居ます。

【袖は涙の】（イロ〳〵ノ話ヲシタ果ハ、女ノ袖ハイツモ涙デヌレテ居ル）　この次の句の浪は涙とかへしの兩方に懸るのです。『涙の浪』とは涙が非常に澤山出ることを浪にたとへて云つたのです。

【浪がへし歸る袂を】（浪ハ一旦打チ寄セテ又引キ返スモノデアルガ、其ノ樣ニ今マデ女ノ處ニ來テ居タ男ガ家ヘ歸ラウトスル。其ノ男ノ袂ヲ）

【引きれんに】（琴ノ彈法ノ名）　此處では袂を引くと云ふ樣につゞけて居るのです。

【秋の夜長し長かれと】（秋ノ夜ハ長イモノナルガ、ソレヲ尙長カレト祈ッテ）

【名殘は盡きぬつくし琴】（名殘ハ尙盡キナイト謠ヒナガラ、筑紫琴ヲ彈イテ居ル）『筑紫琴』は今皆樣がお彈きになる十三絃の琴のことです。後奈良天皇の頃肥前の賢順と云ふ人が創めて之を彈き、後靈元天皇の頃、筑後の善導寺の僧法水が、關東で此技を傳へました。それで紫筑琴と云ふのです。

この段は語の頭字が二つ宛揃つて居る爲め、語調が非常にうつくしく聞えます。

わりづめのわりなき仲

うらすりのうらみごと

なみだのなみがへし
ながしながかれと
つきぬつくしこと

斯様に語の頭の字を同じにすることを、頭韻(alliteration)を踏むと云ふのです。

●第三段　再び轉じて海岸の自然の音樂を叙べて居ます。古曲來蕗の中に『月の前の調は、夜寒を告ぐる秋風。雲井の雁が音は、琴柱に落つる聲々』と云ふ文句がありますが、此段はそれを少し燒き直したものであります。

【海と呼ぶ名にゆかりある】(海ト云フ語ニ縁ノアル)　筑紫琴の筑紫と云ふ詞はよく『筑紫の海』と續けるのであるが、其の海と云ふ詞に縁のあると云ふ意味であります。

【磯邊の松を吹く風も】(海邊ニ生エテ居ル松ヲ吹ク風モ)

【おのづからなる調には】(自然ノ琴ヲ彈イテ居ルガソノ調ニハ)　松風の音を琴の音によそへて云つたのです。

【雲井の雁も琴柱して】(大空ニ飛ブ雁モ琴柱ヲ列ネタヤウナ形ニナッテ)　大空から鳴きつゝ落ちて來る雁の列を琴にたてた琴柱の列に喩へたものであります。

【落つるまに〳〵聲添へて】(雁ガ下リテ來ル際松風ニ聲ヲ添ヘル)　大空から落ちて來る雁が、かの

松風の調子に聲を合せて鳴くことを云つたのです。

【心をすます波の音】(波モ聞ク人ノ心ヲ澄マス樣ナ音ヲ立テ、居ル)

【秋風樂やこれならん】(世間デヨク云フ秋風樂トハコノヤウナ合奏(雁琴ノ音、松風、波ノ音)ノコトデアラウ)

●第四段　全く海岸の縁を離れて松風に調合する琴曲の芽出度いこと、其流行の久しく絶えぬ事とを述べて、此れも聖代の餘慶であると云つて結んで居ます。

【面白や】(面白イコトデアルワイ)

【松風のしらべ添へたる玉琴は】(松風ガ調子ヲ合セタ琴ハ)　松風と琴の音とが調子を合せると云ふことは昔からよく云はれて居ます。箏曲小督の中には、『やすらふかげの松風に、通ふ爪音云々』と云ふのがあり、謠曲の小督の中には、『峯の嵐か松風か、尋ぬる君の琴の音か云々』と云ふのがあり、拾遺集齋宮女御の歌に『琴の音に峯の松風通ふらしいづれの緒よりしらべそめけん』と云ふのがあります。『たま琴』は琴を褒めて云つた詞で、立派な琴と云ふ意味です。

【千代のためしに彈く絲の】(琴ハメデタイ例トシテ引キ出サレルガ、ソノ爪デ彈ク絃ノヤウニ)　琴の糸を彈くことを『例に引く』に云ひ掛けたのであります。『千代のためし』とは千年も萬年も變らぬ樣にあれと御目出たいことを祈る時に出す例であります。又此の『絲』の縁からして次に『永き』と

云ふ語が持ち出されて居ます。

【永き世かけて盡きせじと】(永キ永キ世マデモ盡キナイデ流行シテ行ク樣ニト)

【八百萬代も三笠山】(八百萬代ノ後マデモ見テ下サル大君ノ御惠ヲ三笠山ヲ仰グガ如ク)『三笠山』は海邊の松風の歌としては、甚だ突飛でありますが、八百萬代も見るのみを三笠山のみに云ひ懸けたゞけで、又其『山』の緣で次に『仰ぐ』と云ふ語を出したのであります。

【君が惠や仰ぐらん】(天皇ノ御惠ヲ仰グデアラウ)

(三) 通釋

【第一段】 月は高くさし昇つて、海邊の眞砂を照して居る。そよ風が吹いて來ると、眞砂は恰も其風の爲に磨き出された樣に、益〻綺麗に光る。餘りの明るさに、晝景色ではあるまいかと思つて見渡すと、誠に好い景色で、古人が『花も紅葉もなかりけり』と歌つたのも、尤もだと思はれる。浦邊の苫屋に秋が更けては、物思に堪へぬ秋の習ひ、海人は寢ることも出來ないであらう。潮に染んだ着物の袖に小寒を覺え、他所の砧の音も彼の耳には恨めしく感ずるであらう。

【第二段】 折柄、傍の家で筑紫琴の音がする。主は如何なる人か、其姿は見えないが、吟む唄の聲

は風のまに〳〵聞えて來る。

『とふの菅蘆みふに寢し、昔しのべば割爪の、わりなき仲もなか〳〵に、何うらすりの怨言、袖は涙のなみがへし、返る袂を引きれんに、秋の夜長し長かれと、名殘は盡きぬつく〳〵琴』

唄ノ大意――十府ニ產スル菅デ編ンダ蘆ノ、七分ニ夫ヲ寢サセテ、殘リノ三分ニ自分ガ寢テ居タ當時ノコトヲ思ヒ出シテ見ルト、流石ニ面白イコトガ多カツタ。分ケ隔テガナク、親シイ間柄デアツタノデ、却ツテ何事カ恨言ヲ述ベル。ソシテイロ〳〵話シタ果ハ、我ガ着物ノ袖ハ何時モ涙デ濡レテ居ル。サテ男ガイヨ〳〵歸ラウトスルト、自分ハ其男ノ袖ヲ引キ留メテ、長イ秋ノ夜ヲ尙長カレト祈リツヽ、又語リ續ケル。カクテモ名殘ハ猶盡キナイ。

と歌つて居る。調べの主も物思ひに堪へずして昔の戀の恨を謠ひつゝ、筑紫琴を彈いて居るのであらう。

【第三段】 さて今の女が彈いて居る筑紫琴の筑紫と云ふ詞はよく『筑紫の海』と續けるのであるが、其の海に緣のある磯邊の松を吹く風は自然の琴を彈いて居る。そしてその音には雲間を飛び行く雁も、丁度琴柱を立てた樣に列をなして落ち來るまにまに、聲を添へて居る。(即ち雁が松風の音に聲を合せて鳴いて居る)海の波も聞く人の心を澄ます樣な音を立てゝ居る。かの世間でよく云ふ秋風樂とは實にかゝる合奏をいふのであらう。

【第四段】 眞に面白いことだわい。松風が調子を合せて聲を助けて居る琴の音は、千代も八千代も

と云ふ御芽出たい例によく引かれるが、その彈く絲の樣に長き後の世までも、其琴の流行が絶えることの無き樣に行末永く、御見護り下さる大君の御惠、その御惠を人々は（恰も三笠山を仰ぐ樣に）仰ぎ奉ることであらう。

二九　壽くらべ

（三世　山木作歌作曲）

壽は峻山にして千歳ひいで、また蒼海の限りなき、南の星の影ひたす。（第一段）

岩根の涙の名に高き天の橋立ふみもみず。水の江といふ、みやびをあり。月雪花のをり〳〵に、都の手振りうとからず、心も輕き春風に、釣竿とつて青柳の絲くり出す一葉舟。鰹つり鯛つり誇り七日まで、家路わすれて住の江や、浦回はるかに漕ぎ出でぬ。（第二段）

あゝ　いぶかしや、まさしく釣りしは龜なるを、いとやんごとなき上臈の、折ればこぼるゝ笑の露、初花櫻に鶯の、初音そへたるばかりなり。

上臈『我はそも龍の都のものなるが、君をともなひ申さむ。いざもろともに』と。浦島はどこよの國にいたりけり。（第三段）

わたつみの、わたつみの、神の宮居のうちのへの、妙なるうちに何時まで

も、思ひなぎさに打ち連れて、貝や拾はむ。玉やひろはむ。

歌詞『君が緣は紫の深き色貝。千種貝。たまのあふせは七わだに、思ひとほした女氣は、風に亂れぬ玉簾。すだれ貝とのへだては憂しと、くねる目もとのしほ貝は、撫子貝のしどけなく、物思ふとは白玉か、何ぞと露のあだ言葉。つひ口玉にかけられて、手枕ふれし朝寢髪』（第四段）

樂しき中にふるさとを、かつしのばれて立ち歸る。乙女があたへし玉くしげ、明けて長閑けき如月の、花の莚に圓居して壽くらべ千代くらべ、山にくらべて此君の、高き齡を祝しけり。（第五段）

（一）解題

是は浦島子が龍宮に行つたと云ふ傳說に基いて作つたものであります。浦島の傳說は、日本紀雄略天皇の卷、丹後風土記、及び萬葉集卷九に出て居ますが、夫々多少の差異があります。此の箏歌は萬葉集に基いて作つたものでありますが、又萬葉集のとも少し違つて居ます。卽ち最後の玉手箱をひら

く段は萬葉集では『白雲の箱より出でゝ常世邊に、棚引き去れば立ち走り、叫び袖振り、戀ひまろび、足摺りしつゝ忽ちに心消え失せぬ。若かりし肌も皺み黑かりし、髮も白けぬゆり〳〵は、息さへ絕えて後終に、命死にける云々』とありまして、後悔しても及ばず、終に老人となつて死んだ事になつて居ます。然るに箏唄の方では『開けてのどけき衣更の花の莚に圓居して云々』と芽出たい長壽を祝することに改作してあります。

『壽くらべ』は尙齒會などと同じ意味で、老人共が集つて長壽を祝ふ會のことを云ひます。此の箏唄は老人達が咲き亂るゝ櫻花の下に集つて、浦島子の高齡を祝つたことで結ばれて居るため、『壽くらべ』と題したのであります。

（二）物語

今は昔、雄略天皇の頃、丹後國與謝郡筒川の里に、水江の浦島子といふものがあつた。容姿優婉、櫻かざして遊びし大宮人の面影がある。性來風流を好み、月雪花の遊びにも疎くなかつた。然し濱邊に住む者の常として、魚釣る技には、それ以上多大の興味を持つて居た。年を經るに從つて益〻その方に心をむけ、彼が二十三四の頃には、その爲に寢食をさへ忘れる程であつた。時には里人の間に、

こんな噂をされる事もあつた。

甲『浦島の爺の一人息子が、氣が觸れたとは、本當かい』

乙『さうだとも〳〵。何か憑者がしたのだらうよ。職業は忘る、其處此處と漂泊き歩く、親たちが叱れば、腹を立てゝ、强情を張る。只釣にばかり心を入れて、明けても釣、暮れても釣。いかな日も、この海邊に彼の姿が見受けられるではないか。あゝ實に困りはてた奴だ。』

二十一年も暮れて、春はまた筒川の里を訪れた。櫻花は爛漫と咲きみだれて、人を狂せしめる。青柳は絲を延べて、軟風にそれを梳つて居る。鶯は樹間に舞つて、春の唄を謠つて居る。然しこれらのものは、島子の目に入らず、耳にも聞えない。彼は今日も今日とて、釣竿肩に、濱邊へ姿をあらはした。と思ふと、渚に繫いである小舟にうち乘つて、海上遠く漕ぎ出した。海はさながら鏡面のやう、舟はその上をなだらかに滑つて行く。一時ばかりも經つて振り返れば、船出せし水江の浦は、霞の裏に模糊と見える。島子はこの邊がよいと思つたのか、舟を留めて釣り始めた。二時ばかりしても、何も釣れない。場所を變へて試みても矢張駄目、かくしてその日は落膽の中に暮し、到頭一夜を船の中で明して了つた。翌日も早朝から釣り始めたが、何一つかゝらぬ。偶〻糸がゆらめいたので、胸を躍らせて、引揚げて見ると、餌を取られて居る。日が水平線下に隱れる迄、釣つて居ても、更に獲物はな

い。二日目もやはり其の通り。三日目になつて島子は、いろ〳〵と思慮をめぐらしたが、如何しても、魚の獲れぬ理由が解らぬ。それでその夜は夜通し船の中で考へた。處が曉方になつて、眠氣を催したので、船中で暫時まどろむと、彼の父があらはれて、ひどく彼を折檻する。里人等もやつて來て、彼を揶揄ふ。島子はあゝ恐しや、あゝ悔しや、いで物見せくれんと、起き上らうとする。その刹那、浪がひどく舷を打つて、その夢をさました。日は早や水平線を離れて、暖い光を海面に投げつけて居る。島子はこの美景に見惚れて、暫時茫然として居たが、やがて我に歸つて思ふやう。

『先刻夢に見たのは、正しく父の御顏である。我を揶揄つたのは正しく我が友である。我が親に不孝にして、友の忠言に耳を傾けざるより、神がかゝる夢を見せ給ひしにはあらざるか。さなり、然なり。三日三夜漁して、魚一疋獲ざるも、神の、我を懲らしめんが爲に、なされたる所爲なるべし。あゝ我過てり〳〵。以後は漁を全く思ひ切りて家業に精を出さう。さうだ、〳〵。』

彼の面には一方ならず改心の趣が見えた。そして今日は愈〻我が故郷に歸つて父母に詫び、友に謝らうとまで決心をした。然し魚釣を斷念する思ひ出に、今一度試みんものと、又もや糸を垂れた。處が今度は忽ちにして糸が動く。その動き方も並大底ではない。島子は神の御助けと深く喜んで、竿を擧げた。見れば大きな鰹である。餌を着けて再び糸を入れると、又糸が動く。引揚げて見ると、二尺に

餘る大きな鯛。島子の喜びは譬ふるに物なく、益〻得意になつて、尙も釣り續けたが。釣れる〻〻。そして晝過ぎには、魚籠に餘つた魚が船中にも跳るといふ有樣。島子はやうやう、滿足して、最後の一竿を揚げようとしたが、重くて容易にあがらない。强く牽けば、竿が折れさうである。船を引き寄せて、釣糸の根元を持ち、力を籠めて、糸を手繰れば、これは以外、五色の龜である。島子は大いに驚き、その始末に困つたが、折角釣つたものを放しやるも殘念と思つて、船中に入れて置いた。早速家路に就かうと、用意はしたものゝ、昨夜は殆んど眠らず、加之に今日一日の魚釣でひどく疲れて居る。今はもう楫を動かす力も出ない。しばらく愚圖々々して居たが、その間に到頭寢込んで了つて、日の暮れるのを知らなかつた。

下弦の月は天に冲して、島子の寢姿を朧に照して居る。

夜は痛くふけて、五更に近いであらうと思はれる頃、彼は不圖目を覺した。見れば枕邊に花を欺く上蔲の姿。年の頃は十七八と思しく、長き髮を風に飜して立つてゐる。蒼白い月影を半面に浴びたる樣は、美しいといふよりも、寧ろ凄かつた。島子は駭いて、

『や、おことは、何人にておはするぞ。』

上蔲は彼を下瞰しながら

『妾はこれ龍の都のもの。』

島子は奇怪の思をなして、更に問ふ。

『何用ありて來たまひしぞや。』

『君がかゝる海上にて、お困りあるを救はんため、遙々此處に來つるなり。』

島子はその言によつて、これが世にいふ龍宮の乙姫かと思つた。彼は醉ひたる人の如く、恍惚として美女の面を見上げて居る。女はなほも語を續けて、

『嗚。怪しうはなき者。妾と共に龍の都へ來たまはずや。妾が父母も、汝の御渡りをさぞや喜び給はんよ。いざたまへ。いざ。』

『な……な……なんと。龍の都へ。』

『御驚きあるな。妾は汝に深く心を寄するもの。よしや月日が光を失ふとも、妾の心ばかりは千代も……いや八千代も變るまじ。』

島子も心うち解けて、

『よしや浮寢を重ぬとも、などか厭はん君ゆゑならば、……して、その指す方は。』

女は坤の方を指し示す。舟はその方向をさして、沖へ〻と進む。稍、あつて女は島子に向ひ

『君、暫し御眼を閉ぢてたべ。』

といふ。島子は敎のまゝに眼を瞑る。既にして眼を開けば、こはそも如何に宮殿樓閣が巍然として眼前に聳えてゐる。門を潛つて、玄關に至れば、內よりは多くの人々が出で來て、『龜姫樣御歸り遊ばせ』といつて迎へる。島子は女の案內で、殿內に這入つたが、餘り美しいので、魂も靈も身に添はぬやうな氣がした。柱は珊瑚に、屋根は硨磲。そして柱や天井には金●銀●瑪瑙●玳瑁などが惜氣もなく摺り込まれてある。何處を見ても、世の常ならぬ風情。彼が驚いたのも無理はない。それから奥御殿に通されたが、其處では女の父母姉妹が兩人を歡び迎へる。島子も女も其の中に座を占めて、人間●仙界の物語を始めた。やゝあつて海の珍味は前に並び、玉の盞は一座を巡る。給仕に侍る女達も、皆花を欺くやうな美しい姿。劉曉たる音樂は絶えず聞えて、この場面を一層崇高ならしめて居る。やがて數名の美女が立つて舞ひ始めた。その舞姿の面白さ。また喩へるに物がない。その舞が濟むと共に、島子とかの女との間には鴛鴦の契が固く結ばれて、其の宴は終を告げた。

月日は過ぎ易いもの、島子が此の都に來てから、早や三年の春秋が過ぎ去つた。歡樂の中に起臥して、何の苦勞も知らなかつたけれども、胸中に動き初めた懷鄕の念を制するには、尠からず苦痛を感じてゐた。或日のこと、島子は乙姫に向つてかう言つた。

『暫しの暇をたびたまへ。故鄕に歸りて、わが父母をも見まほしければ。』

乙姫は、憐じげなる面持して、

『理もなきこと仰せられさふらふものかな。一度この鄕を出でなば、歸り來むすべなきものを。』

島『いや〳〵。去年の春、咲きし花は、今年また、咲き出で候ふべし。前に一たび經にし途、再び踏むに難くやある。』

姫『よしなき事。思ひ止まり給ひてよ。』

島『君が切なる御情、辱けなくは候へど、まげて一度、お許しあれ。』

乙姫も遂に諦めて、島子を故鄕に歸らしむべく決心した。乙姫は別れに臨んで、島子に一匣を與へて、かう言ひ添へた。

『この匣の中にこそ、妾が影は籠りたれ。御情變らずば、之を身に添へて持ちたまへ。ゆめ〳〵開きたまふなよ。』

島子はその匣を小脇にかゝへ、もとの小舟にうち乘つて、筒川の里に歸つた。

彼が迎る〳〵、舊の住處へ來て見ると、全く變り果てゝ、昔見た人は一人も見えない。僅か三年を異鄕で送つたばかりで、かうも變るとは、如何した事かと、彼は驚異の念に驅られつゝ、暫時其處に

行んで居た。時に其處へ里人が通り掛つた。

島『そこなる人、此處は筒川の里にて候はぬか。』

里『左樣にて候よ』

島『さあらば、浦島が家は何れの邊に候か。御知りあらば敎へてたべ。』

里『はて浦島とは……』

島『水江の浦島よ。』

里『さなり〳〵。さては御身は、久しき前の事を御尋ねあるよな。その浦島とか申しし人は、海原遠く漕ぎ出でし儘、行方知れずなりしと聞き及びて候よ。してそは今より三百年も昔の事。その人の親族といへるは、七世の孫にてあるとの事なるよ。』

島子は里人の言を聞いて、且つは驚き、且つは悲むこと、此の上もなかつた。寧ろ再び龍の都へ行かうかとは思つたが、これとても今は叶はぬこと。別れに臨んで、乙姫が與へた一つの匣、それも今はあだなる形見。決して明けてはならぬと云はれたが、これが迫めてもの心安めと、到頭その蓋を開けた。白煙一縷。この外には何も出ない。そして今まで若々しかつた彼の粧が、忽ちにして白髮の翁と變つて了つたのである。彼は痛く後悔したけれども、今となつては後のまつり。取返しのつかう道

理がない。其後老衰頓に加はり、天長の二年に、三百二十餘歲を以て此の世を去つた。

(三)　句釋

●第一段　全體の序で壽命長久を祝ふ意を歌つたのであります。

【壽は峻山にして千歲にひいで】(壽命ノ長久ナルコトハ永久不變ナル峻山ノ樣デ、千歲ノ後マデモツヅク)『峻山』は高くけはしい山と云ふ意であります。高き齡を山の永久不變なるに比べることは、昔からよくあることです。詩經小雅篇には『如二南山之壽一不レ騫不レ崩』とあります。

【また蒼海の限りなき】(又永遠ナル蒼海ノ姿ニモ比ブベキデアル)　此句もまた壽命の長久を大海の無限に久しきに譬へたものです。

【また蒼海の限りなき、南の星の影ひたす】(其ノ長壽ハ、マタ南極星ヲ映シテ永久不變ナル蒼海ノ姿ニモ譬フベキデアル)『南の星』は南極星のことです。此の星は人の長壽を司る星だといふので、別名を長壽星・壽星などと申します。さて長壽に譬へるに、普通の海を持ち出すよりも、芽出度い南極星の映つた海を持ち出す方が、適はしいことは云ふまでもありません。

●第二段　春風が輕く袂を掠むる一日、浦島が一舟に棹して魚釣りに出かけたことを云つたのであ

ります。

【岩根の浪の名に高き】（ソノ大海ニアル岩ニハ浪ガ打ッテ居ルガ、其ノ浪ノ高イヤウニ名ノ高イ）

【天の橋立ふみも見ず】（天ノ橋立ニ近ク）浦島の生地は丹後風土記などに見えて居る通り、丹後國與謝郡筒川村であります（よさのこほりつゝかは）から、同じ與謝郡なる天の橋立を持ち出したのであります。『ふみも見ず』は『大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立』と云ふ百人一首の歌の文句を取ったのであり まして、見ずを水の江に云ひかけて『水の江』の序にしたのです。だから『ふみも見ず』には何等意味がないと思つてよいのであります。

【みづの江といふみやびをあり】（水ノ江ト云フ風流ナ男ガアッタ）『水の江』は浦島の苗字であります。筒川村の中の小さな地名から出たものでありませう。『みやびを』は風流な男と云ふことであります。

【月雪花の折々に】（秋ハ月、冬ハ雪、春ハ花ト四時折々ニッケテ）

【都の手振りうとからず】（都風ノ風流ヲヨクワキマヘテ居ル）『手振り』は風俗、習慣などの意味ですが、此處は都で行はれて居る詩歌管絃等の風流な遊のことを云つたのです。『うとからず』は『暗くない』即ち『よく通じて居る』と云ふ意であります。

【心も輕き春風に】（心モ輕クサバケタ氣質デ、輕ク吹ク春風ニ）この『輕き』は『心』と『春風』との兩方にかゝつて居ます。

【釣竿とつて青柳の絲くり出す一葉舟】（青柳ノ絲ノ延ビル頃、釣竿ヲカツイデ、一艘ノ小舟ニ乘ッテ出タ）『くり出す』は青柳の絲と一葉舟とに掛つて居ます。『一葉舟』の一葉は勿論柳の緣から云つたのです。舟と云ふものは柳の葉の水に落ちて浮ぶのに倣つて作つたものだと昔から云つて居ます。

【鰹つり鯛つり誇り】（鰹ヤ鯛ガヨク釣レルノデ、得意ニナッテ）

【七日迄家路わすれて】（七日間モ家ニ歸ルコトヲ忘レテ）

【住の江や浦回はるかに漕ぎ出でぬ】（住ノ江ノ浦カラ遠ク漕ギ出シタ）『住の江』は墨吉（すみのえ）とも書きます。浦島の生れた土地の名です。『住の江や浦回』は住の江の浦回と同じと思つてよろしい。『浦回』とは屈曲したる海邊のことを云ふのです。

●第三段　釣りたる龜が、見る間に上臈と化し、浦島を常世の國（龍宮）へ伴ひ行つたことを云つたのであります。

【あゝいぶかしや】（アヽ不思議ナコトヨ）

【まさしく釣りしは龜なるを】（釣ッタノハ確カニ龜デアルノニ）萬葉集には龜と云ふことが書いて